

東海大學

日本語言文化學系碩士班

碩士論文

日本語學習支援プロジェクトを通じた

学生の学びとは

—台湾人日本語學習者と日本人留

学生による協働プロジェクトから—

指導教授:工藤節子 助理教授

研究生:小池一平

中華民國106年6月

東海大學

日本語言文化學系碩士班

碩士論文

日本語學習支援プロジェクトを通じた  
学生の学びとは  
—台湾人日本語學習者と日本人留  
學生による協働プロジェクトから—

指導教授:工藤節子 助理教授

研究生:小池一平

中華民國106年6月

日本語学習支援プロジェクトを通じた学生の  
学びとは—  
—台湾人日本語学習者と日本人留学生による  
協働プロジェクトから—

透過日文學習支援計劃之學習研究  
—以日文學習者的學生與日本留學生的協同計  
劃為例—

The Learning through project of Japanese  
learning support.  
- The Collaboration project with  
Japanese language learner (Taiwanese  
students) and Japanese students.

研究生：小池 一平

指導教授：工藤節子 助理教授

東海大學日本語言文化學系 碩士論文  
中華民國 106 年 6 月

碩士論文題目：

日本語學習支援プロジェクトを通じた学生の学びとは  
—台湾人日本語學習者と日本人留學生による協働プロ  
ジェクトから—

透過日文學習支援計劃之學習研究  
—以日文學習者的學生與日本留學生的協同計劃為例—

The Learning through project of Japanese learning  
support.

- The Collaboration project with Japanese  
language learner (Taiwanese students) and Japanese  
students.

研究生：小池 一平

指導教授：工藤 節子 (簽章)

審查教授：羅 曉勤 (簽章)

張 瑜 珊 (簽章)

\_\_\_\_\_ (簽章)

東海大學日本語言文化學系碩士班碩士論文

中華民國106年 6月

## 要 約

筆者は、日本語教育が目指すべき目的を、コミュニケーションを育成する立場から、「言語活動」を通して「①言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ、②他者を認め、考え方の多様性を理解する、③自己の認識を深めると共に、学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い、自己課題を見つける。」というホーリスティックな立場で捉え直し、「言語活動」が盛んに行われる場が必要であると考えた。

そこで筆者は、自身の所属する東海大学で日本人留学生と日本語学科の学生の協働による日本語学習支援プロジェクトを実施した。本研究では、日本語学習支援プロジェクト「日本語回廊」の活動を報告し、日本人留学生と日本語学科の学生が協働で活動を運営していく中で、スタッフの仲間や学習者との「対話」を通して、どのような学びが生まれるのかを明らかにする。本稿では、日本語学習支援活動にスタッフとして参加した日本人留学生及び日本語学科の学生を対象にインタビューを行うに加え、日本語回廊の会議を録音したデータや、筆者がファシリテーターとして活動に参加する傍ら記録していた学生の相談などのデータをもとに、人々の相互行為を調査した結果、「スタッフとしての責任の芽生え」「自分のしたことの意義を実感」「言語学習に対する認識の変化」「考え方や文化の多様性を知る」「仲間意識と人間関係の構築」「話し合って問題を解決することの重要性を知る」という学びの概念が浮かび上がって来た。日本語回廊に参加したスタッフたちは、活動を運営していく中で、活動の問題や仲間との問題に直面し、その問題に対して仲間と話し合うことを経て、スタッフとしての責任や考えを話し合っまとめることの難しさに気づく。そして、そうした状況の中で学習言語を使うことで、相手にわかりやすく伝える努力をしたり、自分の言葉を調整したりする。その結果、他者の反応や相手に伝わる実感を通して、問題を仲間と共に協力して解決する実感を得ることがわかった。しかし、一方で活動の問題や仲間との問題が起きたにも関わらず、話し合いを行わなかった結果、途中で嫌になって辞めていったスタッフも多々いた。そういったスタッフたちが何も学べなかったのかというと、そうではなく、話し合いをしなかったことで、問題解決ができず、話し合い協力することの重要性への気づきがあることも明らかになった。

## 摘要

日文教育一直以來都以培育溝通能力為中心，但是筆者認為必須重視的是透過「語言活動」來達到①藉由語言活動來學習新的思維與自我呈現的方法②認同他人並理解多樣的思考模式③加深自我理解，並且積極面對進行語言學習活動時產生的問題點，尋找自身的課題」，以上述觀點重新重視養育人才的立場，充分活用「語言活動」是筆者認為目前的語言教育環境所需要的。

因此筆者在自身所屬的東海大實施了日本留學生與日本語言文化學系學生雙方互相協力的日語學習支援活動企劃。本研究以日語學習支援活動企劃「日語迴廊」為研究中心進行報告，觀察日本人留學生和日本語言文化學系的學生在經營協力活動當中，工作人員與學習者之間的「對話」方式中是否產生了學習變化。本論文針對參加此項活動的日本留學生以及台灣學生進行進一步的訪談，將日語迴廊會議中的錄音逐字文字化，筆者作為一位中介者適度給予意見與活動支援進行紀錄並與學生的商量探討，在本研究調查最終成果發現了「萌生作為工作人員的責任意識」「實際體會自身行為的意義」「對於語言學習的意識形態變化」「理解思考方式與文化的多樣性」「夥伴意識與人際關係的建構」「理解透過討論問題來解決問題的重要性」以上六項學習的概念。

參加日語迴廊的工作人員在過程中正視了活動營運問題與夥伴人際關係問題，夥伴間的對話，一同思考作為工作人員的責任與想法，同事也察覺了身為工作人員統合話題的困難點。因此在這樣的環境下，雙方為了清楚將意思傳達給對方而努力並且調整自己的用詞。最後，藉由對方的反應與觀察對方是否完全的理解，體會了和夥伴一同合力解決問題的實感。但另一方面，無視活動營運問題以及夥伴間的人際關係問題，未進行討論最終放棄的工作人員（日本人留學生）人數也不少。那些放棄的成員並不是完全沒有收穫，他們在這個過程當中，發現若沒有進行討論是無法解決問題的，因此也更進一步的理解了互相討論協力的重要性。

## <目次>

1章	序論	
1-1	研究の背景	1
1-2	研究の目的	5
1-3	本論文の構成	5
2章	先行研究	
2-1	理論的背景	
2-1-1	日本語教育における学習観の変化	7
2-1-2	言語活動としての日本語教育とは	10
2-1-3	協働学習という概念	14
2-1-4	協働の概念を導入した実践事例	16
2-1-5	支援者の学びに関する先行研究	17
2章	研究方法	18
3-1	調査方法と内容	18
3-2	分析方法の選択	19
第4章	東海大学の日本語回廊の概要	
4-1	台湾における日本語コーナーの位置づけ	21
4-1-1	台湾の「英語コーナー」から見るコーナーの背景	23
4-2	東海大学の日本語回廊のあゆみ	24
4-3	協働プロジェクトとしての日本語回廊	26
4-3-1	活動の概要	26
4-3-2	第6期日本語回廊の活動内容	28
4-3-3	第7期日本語回廊の活動内容	31
4-3-4	第8期日本語回廊の活動内容	33

## 第5章 調査概要

5-1 調査協力者及びデータ	37
5-2 分析の焦点	37
5-3 分析の手順	39

## 第6章 分析結果

### 6-1 個々の分析

6-1-1 林さんの場合	42
6-1-2 王さんの場合	55
6-1-3 山田さんの場合	63
6-1-4 宮迫さんの場合	71
6-1-5 森さんの場合	77
6-1-6 山村さんの場合	84
6-1-7 周さんの場合	95
6-1-8 曾さんの場合	107
6-2 分析のまとめ	111
6-2-1 スタッフとしての責任の芽生え	114
6-2-2 自分のしたことの意義を実感	115
6-2-3 言語学習に対する新しい認識	117
6-2-4 考え方や文化の多様性を知る	122
6-2-5 仲間意識と人間関係の構築	124
6-2-6 話し合っって問題を解決することの重要性を知る	126

## 第7章 今後の課題

7-1 方法論的課題	132
7-2 活動の課題	132

参考文献	135
------	-----

付録	137 以降
----	--------



## 第1章 序論

### 1-1 研究の背景

近年、日本語教育を巡る教育観は著しい変化を見せている。1970年代の日本語教育では、ことばの構造を学習する「構造シラバス」が中心であり、「何を教えるか」という教育内容の充実に力を注いできたが、1980年代頃からは、場面や機能による表現選択を重視する「概念・機能シラバス」が用いられるようになり、実際のコミュニケーションの場で利用できるということが重視されるようになり、日常会話やビジネスシーンでの具体的な状況を設定したロールプレイなどが注目されるようになった。

また、近年ではヨーロッパの言語教育の基盤である CEFR に基づいて、日本語の熟達度を「～できる (Can-do)」で表される個々の言語能力と達成目標を設定する基準を設け、活動型の授業の試みが実施されている。筆者は台湾の中等、高等教育の現場で TA や、日本語講師として、学習者に関わる中で、様々な問題意識を持つようになった。大学の日本語学習環境において、教科書をベースに授業を行う以外に、日本人 TA と会話の練習をする機会があるというのは、日本語を学習する上で大きな助けとなっているのは事実だが、一方で授業の延長としてやってくる学生の多くは、授業で出された課題を話して、帰るだけという状況が多々見受けられた。

日本語教育の現場では、日本語学習者たちの日本語能力を向上させるために、日々努力や工夫が重なられているにも関わらず、教師が思うように学生たちが課題に取り組まない、反応が芳しくない状況が多々あり、教師も肩を落とす様子もよく見られる。というのも、一般的に授業では、学生は先生に与えられた課題を行い、テストをクリアし、単位を取得する。そんな中で、学生が自ら進んで学ぶという、本来学習に最も必要なことができなくなってしまうのではないだろうか。

里見 (1995) は、「はじめに「教える」という行為があり、その従属変数として生徒の「学ぶ」という行為が生成する、というのが、近代教育の伝統的なパラダイムであった。このパラダイムにもとづいたマシーンとして学校は構築された。しかし、「教える」と「学ぶ」とが機械的に連動するという前提のうえに形づくられるこのシステムは、実際には「教える」というインプットをいたずらに肥大化させつつ、その所産であるはずの「学び」をかえって受動化し、さらには空洞化させさえしているのである。<sup>1)</sup>」と述べている。

---

<sup>1)</sup> 里見(1995) p11

台湾の高等教育以前の教育現場に目を向けてみると、生徒たちは先生の板書をノートに写し、学校の帰りに塾へ行き、そこで学校と同じように授業を聞き、家に帰ると学校と塾から与えられた宿題をこなし、定期的かつ頻繁に行われるテストにおいて、暗記した内容を計測され、成績をつけられるものであり、「学び」に対して完全に受動的である。学生たちの学習観は、長い学校教育の中で固定化されている。

また、筆者は TA として、教師とは違った立場から日本語学習者と接することで、日本語の学習過程で躓き、自信をなくしている学生や自分の目標を見失い、日本語を学習する意味がわからなくなっている学生が、思いの他多いことに気がついた。そこで、授業とは異なったアプローチが必要であると考え、次のような実践を行ったことがある。2012 年、筆者は大学院の授業実習の一環として、学習支援活動を行った。

そこで「自分の言葉を見つけよう」という目標を掲げ、東海大学の日本語学習者を対象に「日本語遠足」<sup>2</sup>という活動を行った。「日本語遠足」とは、日本語を学習している大学生が遠足を計画し、日本人留学生を実際に案内するという活動である。毎週 1 回会議が行われ、そこで遠足地をどこにするか決め、その計画やバスなどの手配を行い、宣伝をし、そして実際に遠足に行った。1 年間を通じた観察と PAC 分析により、学生たちは活動の中で、「試行錯誤」を繰り返しながら「自分の言葉」を使うことを経験し、「日本語遠足」を通して「クラスメート」や「先輩」、そして「参加した日本人留学生」と状況の中で日本語を使い、他者との関係性の中で、日本語を学んでいくことを経験し、日本語を話すことへの意識が大きく変わったことが明らかとなった。

このような学生の変化を観察してきた筆者は、練習を重視するあまり、学生個人とは実際にあまり関わりのないタスクを設定し、架空のコミュニケーションを行うことが、果たして意味のあることなのか疑問を持つようになった。こうしたタスク達成型の授業について、細川（2007）は「このようなタスク達成型教室活動では、しばしば場所や状況を設定したロールプレイなどによって学習者の意志発信への内的動機がそがれる危険もある。<sup>3</sup>」と述べている。

---

<sup>2</sup> 小池（2014）が報告している学習支援活動の名称

<sup>3</sup> 細川（2007）p7

つまり、ロールプレイの状況設定の目標は、あくまでも語彙・文型の学習にあるため、学びの目標が、そうした語彙や文型に止まってしまうと、学習者が自分の考えを表現する意欲を失ってしまう危険性があるということである。

しかし、筆者は（細川 2007）と同じように、練習としてタスクを導入することに対し否定的な立場をとるものではない。日本語教育が目指す目的を、タスクを達成することではなく、もっと先に見据える必要があると考える。細川（2011）は、コミュニケーション能力を育成するという日本語教育の立場を批判し、学習の対象は「言語」ではなく「言語活動」に向けるべきであると主張している<sup>4</sup>。

つまり、言語能力という「言語」を習得することを目的とするのではなく、言語活動によって生まれる問題から自分のテーマと向き合い、考えることが必要であると考えられるものである。従来の言語教育を見ると、言語という学習の対象があり、その言語は客観的に存在しているものとして捉えられてきた。これは、言語活動からラング（langue）を抽出し、それを客観的な記号として発話を捉えるソシュールの言語学に基づいているものと思われる。これに対してバフチンは言語を体系として捉えるのではなく、イデオロギー的現象として、依存する文脈から切り離すことのできない存在として捉えている。バフチン（1980）は発話について次のように述べている。「言葉[発話]は、人が協力して労働する場面にも、イデオロギー[記号]によるコミュニケーションの場面にも、偶発的な日常の触れ合いの場面にも、政治的な相互作用の場面などにも、ともかく人と人が相互に働きかけ、相互に接触しあうすべての場面に入り込んでおります。社会的なコミュニケーションの全域を貫いているイデオロギーの無数の糸が、言葉によって実体を与えられていると言えます。<sup>5</sup>」

人が発話をするということは、人と人が相互に働きかける場面であり、相手の存在や社会的背景などを既定しているということであるから、言語活動とは話し手と聞き手が存在し相互に働きかけるものであることから、筆者は、細川（2014）の指摘する言語活動の目的を整理し、言語教育が目指すべき学びを以下の通りに定義する。

(1) 言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ。

---

<sup>4</sup> 細川（2011）p21-25

<sup>5</sup> バフチン（1980）P36

(2) 他者を認め、考え方の多様性を理解すること。

(3) 自己の認識を深めると共に、学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い、自己課題を見つける。

そこで、筆者は自身が在籍する東海大学において、日本語学習者による言語活動が盛んに行われる場を作ることとし、その具体的な方法として、日本人留学生と日本語学科の学生が協働で企画、運営するプロジェクトを実施することにした。東海大学では、2012年より日本語回廊という日本語学習支援活動が行われている。2014年までは日本語学科の大学院生が企画運営を行ってきたが、院生が関わらなくなったことで、活動自体の存続が危うくなっていた。そこで、筆者は日本語回廊という場を日本人留学生と日本語学科の学生とが一緒に活動を作っていくプロジェクトとして再生を試みた。

なぜ、日本語学科の学生と日本人留学生であるかということ、両者は互いの母語が学習言語であるため、異なった言語背景を持つ者同士が互いに働きかけ合う中で生まれる問題から自分のテーマと向き合い、解決に向けて考え行動していくことで、それまで知らなかったことの発見や、新しい認識が生まれると考えた。また、日本語母語話者である日本人留学生と日本語学習者である日本語学科の学生が協働で活動を行っていく場合、その関係性に、教える側、教えられる側という力関係を築いてしまっただけでは、「対等」という条件のもとで「対話」を行うことができない。両者が同じ支援者という立場で、一緒に活動を作っていくというスタンスをもって活動していくことで、意味のある言語活動が生まれると考え、日本語学習支援活動をプロジェクトとすることにした。

日本人留学生と日本語学科の学生という、どちらも言語を学習している立場の両者が共に協力し合い、日本語学習支援活動を企画、運営していく中で、どのような学びが生まれるのだろうか。

## 1-2 研究の目的

以上のことを踏まえ、本稿では日本語学習支援活動「日本語回廊」の活動を報告し、日本人留学生と日本語学科の学生が協働で活動を運営していく中で、スタッフの仲間や学習者との「対話」を通して、どのような学びが生まれるのかを明らかにする。

学習を他者とのやり取りの中から生まれるものと捉えた場合、その学びも一方通行ではなく、相互に与え合うものである。つまり、日本人留学生と日本語学科の学生の協働による学びを明らかにするためには、日本語学科の学生だけでなく日本人留学生も調査の対象としなければならない。本稿では、日本語学習支援活動にスタッフとして参加した日本人留学生及び日本語学科の学生を対象にインタビューを行い、実際にどのような事に気づき、新しい認識を得ているのか、他者とどのようなやり取りを経て、学びに繋がっているのかを探ることを目的としている。他者とのやり取りという複雑な過程を扱うためには、多様なデータを分析する必要がある。本稿では、インタビューに加え、日本語回廊の会議を録音したデータや、筆者がファシリテーターとして活動に参加する傍ら記録していた学生の相談などのデータをもとに分析を行い、スタッフたちにどのような学びがあったのかを探る。

そして、筆者の定義した言語教育の学びである (1) 言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ。(2) 他者を認め、考え方の多様性を理解すること。(3) 自己の認識を深めると共に、学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い、自己課題を見つける。という視点から、学生たちの学びが言語教育としてどう位置づけることができるかについて考察を行う。

## 1-3 本論文の構成

第二章では、先行研究として、まず本稿の理論的な背景を論じる。そして、協働という概念について説明すると共に協働の概念を用いた実践報告をまとめる。さらに、支援者の学びに関する先行研究を取り上げ、学習支援をする側が一体どのような学びを得ているのかを調べ、本研究の指針とする。

第三章では、研究方法について述べる。日本語学習支援プロジェクト「日本語回廊」にスタッフとして参加した日本人留学生と日本語学科の学生たちの言語活動を通じた学びを明らかにするために、データに基づいた理論構築を目指す研究方法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を採用する理由を述べると共に、どのようにデータを取り、分析を行うかを明らかにする。

第四章では、学習支援活動が台湾でどのように位置づけられているかについて言及し、筆者が実施した日本語学習支援プロジェクト「日本語回廊」の概要と実施状況について報告する。

第五章では、本研究で行う分析の主要データであるインタビューの調査協力者を挙げ、本研究の分析方法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析手順を述べる。

第六章では、M-GTA によるデータ分析を踏まえ、調査協力者個々の概念やカテゴリーの関連性を示す概念関連図を作成し、概念関連図に沿って、個々の学びを考察する。さらに、個々の概念をもとに、調査協力者全体の概念関連図を作成し、そのストーリーラインを書き、調査協力者全体の学びを考察するとともに、筆者の定義した言語活動における学び (1) 言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ。(2) 他者を認め、考え方の多様性を理解すること。(3) 自己の認識を深めると共に、学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い、自己課題を見つける。の視点から、分析結果を日本語教育という視野でどのように学びを捉えるかについて述べる。

## 第2章 先行研究

### 2-1 理論的背景

#### 2-1-1 日本語教育における学習観の変化

これまでの日本語教育における学習観の変化を見てみると、行動主義学習観から認知主義学習観への変化と認知主義学習観から状況的学習観への変化の2つに見ることができる。1960年代頃までは、学習を端的な刺激に対する結びつきであると考えられ、プログラム学習やドリル練習などの学習方法が盛んに行われていた。こうした学習観による日本語教育の目標は、日本語の発音や語彙、文法などを如何に効率的に学習者に定着させるかであり、言語構造が自動的に出てくるまで体に覚えこませるための文型練習を重視するオーディオ・リンガル法と、日本語だけを使用して教える直接法の基本を習得することが重視されている。

そして、こうした行動主義学習観への批判から、1960年代頃から認知主義心理学に基づいた学習観が提唱されるようになった。行動主義心理学が人間の「頭の中」をブラックボックスとして、学習を端的に刺激と反応の結びつきに還元したのに対し、認知心理学では、人間の学習を注意や概念さらには概念の操作を伴う、構造化された知識の獲得過程であると見た<sup>6</sup>。認知主義的心理学に基づいた学習観では、反復練習による丸暗記をするのではなく、自分の頭の中にある既存知識と新しい学習内容とを関連させることで、自らが知識を再構成することで新たな知識を獲得するというものである。

こうした学習観の変化と同時期に、日本語教育においても新たな取り組みが行われるようになった。それが、コミュニカティブ・アプローチである。佐々木（2006）によると、1980年代頃から日本国内では、中国の残留日本人孤児の帰国や、ベトナム難民の受け入れ、外国人就労者の増加などにより、多様な人々が日本語学習の支援を求めて日本語教室に来るようになった。そこで、従来とは異なるコミュニケーションを重視した、各学習者のニーズに合わせた言語学習の必要性が出てきた<sup>7</sup>という。

それまでの文法や語彙などの知識を重視する教育方法では、日本社会で生きていく多様な背景を持った日本語学習者のニーズに対応することができないため、コミュニケーションを重視した様々なシラバスが作られるようになった。例えば、教科書の中でその単元で中心的な文型の入った会話例が紹介され、会話練習が導入されたり、状

---

<sup>6</sup> 西口（1999）P8

<sup>7</sup> 佐々木（2006）P261-263

況や場面を設定したロールプレイが考えられた。前節で述べたタスク型の授業も、こうしたコミュニケーションを重視した取り組みであり、現在も盛んに行われている。

しかし、こうしたタスク型の授業には問題も内包している。細川（2007）は、このようなタスク達成型教室活動では、しばしば場面や状況を設定したロールプレイ等によって学習者の意志発信への内的動機がそがれる危険もある<sup>8</sup>と指摘している。また、佐々木（2007）は、シラバスは異なっても、あくまでも「日本人」、特に、日本人同士のコミュニケーションを規範として作られた「正しい」コミュニケーションの形が存在し、学習者はそれを身につける、教師はその支援をするという、客観主義的教育観に基づいた教育である<sup>9</sup>と述べている。

つまり、予め設定された場面や状況の背景には、教師が望ましいと考える模範的な日本人同士の会話が存在し、学習者にその模範的な日本語を教えるというところに目的がある。

1990年代に入り、認知心理学、文化人類学などの研究成果から、学習は、個人的な活動ではなく、道具や装置などの人工物や他の認知主体との相互作用にあるという考え方がされるようになった<sup>10</sup>。それまでの認知主義学習観や行動主義学習観では、学習という営みは、知識を獲得するものであると捉えられ、個人はその知識が注がれ、蓄えられるものであった。それに対し、人間の学習は、個人的な営みではなく、他者や道具などの人工物との相互作用の中で生まれるものであり、それはその時の状況や文脈から切り離すことができないものであるとして、一般に状況的学習論と呼ばれている。状況的学習論は従来の認知主義学習観や行動主義学習観とは全く異なった学習観を持っている。SFARD(1998)は、従来の行動主義的・認知主義的な学習観を「獲得メタファ」、状況的学習論的な学習観を「参加メタファ」として比較し表1のように示している。

表1を見ると、状況的学習論では、学習は他者と共同体に参加し共同体を構築していく過程で相互に知識のやりとりを行うことであることがわかる。従来の獲得すべきであった知識が、他者とやり取りするものであると捉えられている。このような状況的学習論は、言語の教育や学習において提唱されたものではなく、学習というものの

---

<sup>8</sup> 注4に同じ

<sup>9</sup> 佐々木（2006）P265

<sup>10</sup> 西口（1999）・美馬（2005）



理論化を試みたものであった。しかし、この理論は、言語教育のあり方を考え直す上で重要な見方を提供するものである。

獲得メタファ		参加メタファ
個々の豊かさ	学習目標	共同体の構築
何かを獲得すること	学習	参加者になる
知識を与えられるもの	学習者	共同体の周辺参加者
知識を与えるもの	教師	熟達した参加者・先輩
所有するもの	知識・概念	実践・対話・活動
所有すること	知ること	共同体に参加し、コミュニケーションを行うこと

表1 The Metaphorical Mappings (SFARD1998) <筆者訳>

西口（1999）は、状況的学習論の観点から日本語教育を見ると、日本語教育で創るべきものは、「日本語がよくできる（日本語非母語話者の）わたし」という熟練のアイデンティティである。この熟練のアイデンティティには、「その人が自分らしい自己実現をするために必要な日本語ができること」とともに、「行動する場面の特性や背景を知っていること」、そして「わたしは日本語がよくできる日本語非母語話者である」という自己認識が含まれる。とし、そうしたアイデンティティを形成するような学習リソースが構造化された「学びの経験」を編成することが日本語教育には必要な立場である<sup>11</sup>としている。

つまり、状況的学習論から教育を見た場合、教師が学習者に「教える」という概念ではなく、教師は学習者が回りの人との関わりの中から学習のリソースを見つけ、「日本語がよくできる自分」というアイデンティティを創っていけるような学習環境を整えることが重要だということである。

このような状況的学習論が提唱された 1990 年代、日本における日本語教育の現場にも大きな変化が起こった。日本国内の外国人滞在者が増加し、外国人住民も地域社会のお客

<sup>11</sup> 西口（1999）P13

様ではなくメンバーへと転換が起き、これまで使いこなしてきた母語に加えて、必要な分野で日本語を使いこなし、英語も使いこなす複言語主義の人々が出現し始め、これらの人々に対するこれまでとは異なった日本語教育の枠組みが必要となった<sup>12</sup>。さらに、こうした学習者に日本語教える地域日本語活動に対して「教える－教えられる」という関係が問題であるという声も挙がってきた。古川・山田（1996）は、地域日本語活動において学習者となる者は、その地域社会のルールを規定した言語や文化を学習しなければならない位置に定められ、強制的な力関係を生じさせるとして、地域日本語活動のあり方を問う必要があると主張した。

こうした背景から、日本語学習者との「多文化共生」の意識のもとに、「教える」から「伝え合う」、「教育」から「支援」「交流」へと日本語ボランティア活動の社会的役割をこれまでとは違う視点から捉える団体が現れてきた<sup>13</sup>。しかし、このような状況的学習観や「伝え合う」という概念が実際に言語教育の場に浸透している訳ではない。佐々木（2006）は「現状では、大半の教師にとって、これまで自身が受けてきた教育すべてが知識伝授型授業であることが多く、理念はわかっているにもかかわらず実践に不安がつきまとう。」や「教師の指示待ち顔の留学生、コンテンツの少なさにがっかりした様子の留学生、自己選択・自己評価に不安げな表情の留学生をアジア系の中に見ることは少なくない。」と実際の教育現場で新しい概念を取り入れた教育を実施していくことが容易でないことを述べている。実際に言語教育の現場に、状況的学習観を取り入れていくにあたって、どのように位置づけていくべきなのか、考える必要がある。次項では、言語活動という視点から、日本語教育の目的のあり方を提言する。

## 2-1-2 言語活動としての日本語教育とは

言語を学習する者は誰しも学習言語を習得し、その言語を自由自在に操れることを願うものである。筆者も中国語を学習してきた者として、自分の母語の如く自由に中国語を使えるようになることは、一つの大きな目標であった。「日本語能力」という言葉は、日本語教育において頻繁に耳にする。これまで、この「日本語能力」を証明する方法として、日本語能力試験などが有力であった。台湾の日本語塾などでは、日本語能力試験に合格す

---

<sup>12</sup> 注7に同じ

<sup>13</sup> 渡邊（2007）

ることが一つの目標とされ、学習者はテストに向けて単語や文法を勉強し、合格することで自分の「日本語能力」を位置づけてきた。そして、コミュニカティブ・アプローチが盛んになるにつれ、「コミュニケーション能力」が重視されるようになり、日本語教育の現場ではコミュニケーション能力育成が唱われ始めた。例えば、ネウストプニー（1982）は、実質行動とコミュニケーションの関係性を構図化し、コミュニケーション能力には、「文法能力」「社会言語能力」「社会文化能力」が含まれていることを指摘した。

しかし、従来の学習者の能力をテストなどによって測るという枠組みは残ったままである。能力は測られるものだという考え方に基づくと、文法能力は従来のテストによって測ることは可能であるが、「社会言語能力」や「社会文化能力」は如何にして証明するのだろうか。細川（2011）は、問題は、本来外側からは計測できない、個人の中に内在する活動総体の一部を分析的に取り出すことで計測したこととし、その結果を以て、それを「日本語能力」とであると断定するとともに、その計測値をあげることが「コミュニケーション能力育成」とする考え方それ自体に所在するものである<sup>14</sup>と述べている。コミュニケーションというものは、ネウストプニーの指摘したように、「文法能力」「社会言語能力」「社会文化能力」に分けることが可能なのかもしれないが、実際に人間がコミュニケーションを行うといった場合、それは言語活動そのものであり、それを項目に分けて測ることはできないのである。ここで、「日本語能力」そのものが日本語教育の目的になることに矛盾が内包していることが浮き彫りとなった。

では、日本語教育では、何を以て日本語教育の目的とすれば良いのだろうか。筆者は「日本語遠足」における学生の学びを観察してきた経験から、日本語による活動を通して、他者とのやり取りの中で知らなかった言葉や文化を発見したり、自分の目標や、自己課題を発見したりすることができるような教育のあり方が必要であると実感した。他者とのやりとりの中心となるものは、ことばである。細川（2014）は、「人はことばで考え、ことばによって他者と対話し、ことばによって社会を形成する<sup>15</sup>」のものであると、言語による活動の重要性を述べている。

ソシュールは、自身の言語論の中で、言語を体系として言語活動からラング（langue）を抽出して、それを客観的な記号として発話のあり方を研究の対象としてきた。これまでの言語教育も、ことばを客観的で非人格的な存在として扱い、それを習得することを目的とし様々なアプローチが行われてきた。

---

<sup>14</sup> 細川（2011）P23

<sup>15</sup> 細川（2014）P53

しかし、ことばを客観的な記号とし、学習者に適応しようという行為は、佐々木（2006）が「シラバスは異なっても、あくまでも「日本人」、特に、日本人同士のコミュニケーションを規範として作られた「正しい」コミュニケーションの形が存在し、学習者はそれを身につける<sup>16</sup>。」と指摘した様に、学習者は日本人の日本語という規範を自分に適応しなければならないということである。

一方で、こうしたソシユールの言語観に異論を唱えたのが、バフチンである。ソシユールが言葉を、その発せられる状況から切り離し、記号として捉えるのに対し、バフチンは、「ことば」はその状況や文脈から切り離すことのできない、イデオロギー現象であると主張した。バフチン（2002）によると、実際に発せられた（あるいは意味をもって書かれた）あらゆる言葉は、話し手（作者）、聞き手（読者）、話者の対象（主人公）という三者の社会的相互作用の表現であり、所産である<sup>17</sup>としている。

つまり、発せられる「ことば」というものは、ただ無意識な物体として空気中に放たれるのではなく、そこには「聞き手」に向けたイデオロギーが含まれているのである。例えば、トイレの壁に「いつもきれいに使っていただきありがとうございます！もう一步前に寄っていただくと嬉しいです」といった紙が貼られている。このように短いことばの中にも、トイレをきれいに使ってほしいという語り手の思考が込められているのである。こうしたトイレに貼られている紙をレストランの座席に貼ったところで、ただ違和感だけがあり、その思考を理解することはできない。ここでは、トイレで用を足すという特定の場所でトイレ使用者に向けられている。

さらには、「一步寄る」ということは男性のトイレであり、男性トイレを使用中の人へ向けられて発せられたことばということになる。このように、「ことば」を発するという行為は、その特定の環境の中でのイデオロギー現象なのである。

西口（2013）は「ことば＝イデオロギー現象」は、社会の経済的組織という生存基盤の上で社会的交通が営まれ、その中での具体的な言語的交通が行われることを示している。そして、そのような関連の中で、ことば＝発話によって示される実践的な現実が社会的出来事である。

経済組織というと、会社のような構造が複雑な組織を連想するだろう。しかし、もっと簡単な例を挙げると、人類が洞窟で狩りをしたり、田畑を耕したりして生活していた時代に遡る。彼らは複数の人間が共同生活をする中で、社会的交通は狩りや農業の中で行われ

---

<sup>16</sup> 注 10 に同じ

<sup>17</sup> バフチン（2002）P30

ていたことになる。狩りや田畑を耕すことは一人でもできるかもしれないが、仲間と協力することで、その収穫や効率を上げることができる。そうした仲間と協力する場面に社会的交通が生まれるのである。そして、その社会的交通、つまり協力関係を首尾よく行うために、言語的交通が行われる。言語的交通により、狩りや農業に使う道具の作り方や有効な使い方を共有する。そこで互いの考え方や知識を交通させることで、新たな道具や狩りの方法が編み出されるのである。それはコンピューター同士で行うデータの交換などではなく、発見や創造が伴う社会的な出来事なのである。

つまり、言語活動とは教科書に書かれている模範的な台詞を読んだり、覚えたタスクをこなしたりすることではなく、それぞれの生きてきた社会的・言語的背景のもと、現実的な生活基盤や状況の中で互いの思考を言葉にしてやり取りし合うことを指す。これは、個人の意識、思考に基づく、論理と感覚・感情を包含した人間相互理解のための活動であり、世界諸言語による人間の活動は、すべてこの言語活動の基盤の上に成り立っていることを示している。

このような言語活動という側面から、言語教育を考えると、その目的は個人の中の一部の能力を育成するというものではなく、自分とは異なった他者との間で個人の意識や思考に基づき、相互に理解し合おうとすることのできる人間を育成するという立場が大切であると考えられる。ここで特筆しておきたいことは、筆者は言語教育の目的をコミュニケーション能力や日本語能力といった個人の中の一部を取り出して評価することに対して批判的な立場をとるが、言語知識が必要ないと述べているのではない。現在行われているロールプレイなどの練習の他に、自分の「ことば」を実践する場が必要であると考えられる。次節では、そうした「ことば」を実践する場として有効ではないかと考える「協働学習」という概念を取り上げ、その特徴を明らかにする。

### 2-1-3 協働学習という概念

近年、さまざまな分野で「協働」という言葉を耳にするようになった。「協働」とは、「協働」「協同」「共同」など様々な表記がされているが、それぞれの分野の中でも厳密には統一されていない。教育の分野における表記では、「協働学習」「協同学習」「ピア・ラーニング」といった表記がされている。本稿では「協働」の表記を用いる<sup>18</sup>。中谷・伊藤（2013）は、ピア・ラーニングとは、同じような立場の仲間（ピア）とともに支えながら、ともにかかわりを持ちながら、知識やスキルを身につけていくことである<sup>19</sup>と定義している。

では、実際に協働学習の概念を用いることによって如何なる成果が得られるのだろうか。アメリカの協同研究の第一人者的存在であるジョンソン（2010）は、競争場面や個人学習事態を批判し、『協同学習』の必要性を主張する中で、生徒たちは、協同的な活動を続けるうちに、誰かの努力が仲間全体にもよい効果を与えたり、すべての仲間が運命を共有していることを意識したり、個人の成果には、その個人と仲間の両方が貢献していることを認識したり、仲間の成績がよかった時にはグループの全員が誇らしく思い、一緒になって祝福したりするようになる<sup>20</sup>としている。他者のことを考えて、行動できるということは、人生においても非常に重要なことである。

こうした協働の概念は、近年、盛んに使われるようになった言葉であるが、この概念自体は人間が洞窟に住み、狩りをして暮らしていた頃から存在する。一人で火を起こし、家を建て、獲物を捕らえるには限界がある。他者と共に家を建てる方がずっと早く、大きな獲物ですら捕らえることができる。現在の社会においてもそれは同じことで、一人で大きな仕事をすることはできない、他者と協力して仕事をすることで大きな成果が得られるのである。

また、池田・館岡（2007）は「対話によって協働の主体同士は理解し合い、互いに自分の生きていくための安全・安心な場を確保し、さらに他者との関係性の中で自己実現していく<sup>21</sup>」と、他者と協働する中で「対話」は必要不可欠な要素だとしている。他者と「対話」を行うためには、他者との関係性も非常に重要な要素である。例えば、王様と家来のような力関係がある場合、その「対話」は、果たして成立するであろうか。互いに意見を

---

<sup>18</sup> 先行研究で表記が異なる場合には、『 』で表記する。

<sup>19</sup> 中谷・伊藤（2013）P2

<sup>20</sup> ジョンソン, D. W. / ジョンソン, R. T. 他（2010）P10-12

<sup>21</sup> 池田・館岡（2007） P6

ぶつけ合い、協力していくためには「対等」である必要がある。この「対等」という言葉は、ただ単に仲間同士の職業や地位が同じという意味ではない、お互いを尊重し、相手の意見を認め合うことのできる関係性において「対等」という言葉を用いている。

池田・館岡（2007）は、こうした「対等」の関係を前提条件として、対話によって協働の主体同士は理解し合い、協力していく中で、ひとりで行っていた志向に、他者の視点が加わることでそのプロセスが発展し創造を生み出し、創造を生み出すまでのプロセスやその成果が両者にとって意義のあるものになることが協働の主要な概念要素であるとしている。協働の概念を図で表すと、図1のようになる。

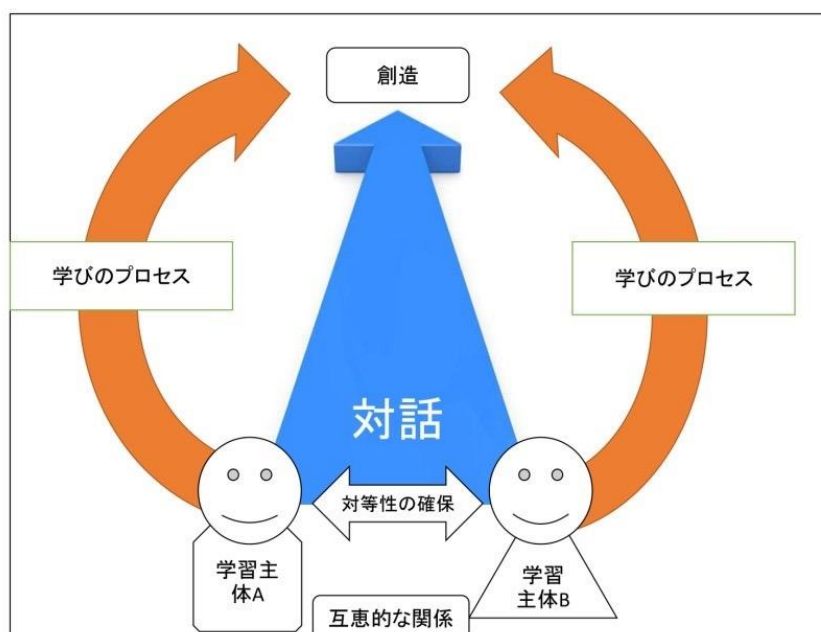


図1 日本語教育における協働の概念池田・館岡（2007）P7の図を引用

学習主体 A と学習主体 B は、対等性を確保しつつ、創造に向け対話が繰り返し行われる。その過程で、対話を通じた学びのプロセスが生まれ、両者にとって恵みのある互恵的な関係を築いていくものである。この図を見てわかるように、両者にとって学びを生成するものは「対話」である。そして、このような「対話」が生まれるためには、他者と共通した目的が必要である。つまり、「協働」の第一歩は、参加することである。何かを行っている、行おうとしている複数の人間によって成り立つグループやコミュニティーに参加し、そのグループの持つ目標に向かって、仲間と話し合い、協力し合って作業をする中で、それまでは知らなかった物の見方や考え方を発見したり、新たな人工物や情報、知識などを創造したりするものである。次項では、日本語教育における協働の概念を導入した実践事例を挙げ、協働による学びを位置づける。

## 2-1-4 協働の概念を導入した実践事例

日本語教育における協働の実践研究は、研究計画を協働で書く試みとして、佐藤（2008）がある。佐藤（2008）は、日本語学校の「大学院進学クラス」において協働で研究計画を書くことを通して、学生同士の対話によって相互に動機文の変容を促し、自分の考えを皆が理解できるように思考を開いていることがわかった。さらに、学習者が相互の専門性を尊敬し合い、関心を持ち、自分の経験や知識から他の学習者に助言するという関係性を構築していることが明らかとなった。

プロジェクトを協働的に行う実践を報告した研究に、中島（2013）がある。中島（2013）では、留学生と日本人学生の混成グループが、鹿児島市内を探索し、地域を学ぶ「多文化間プロジェクト型協働学習」を通して、外国人留学生は日本人と一緒に調査発表したことで、鹿児島や日本についての理解が深化し、日本人とともに活動したことにより日本の若者のことがわかるようになったり、日本人の考え方や生活習慣などを考えることができるようになったことを明らかにした。

高宮（2008）は、これまで学習者は作文を書く上で、教師を読み手として意識し、高い評価が得られることを目的に書くことが多かった。そこで、ブログというインターネット上で不特定多数の目に触れられる可能性のある場所に投稿することで、学習者はおのずとクラスメートやクラス外のさまざまな読み手を想定して書くようになり、学習者同士の協働作業を取り入れることで、教室の外と内をつなぐことになるのではと考えブログを使った総合活動型日本語教育を実践した。学習者たちは、活動を通して、アメリカ、日本に持っている考えの双方がステレオタイプにもとづいていることに気づき、次第に考え方を変化させていることがわかった。さらにプロジェクトが進むにつれて学習者たちは、批判的視点の形成からステレオタイプを打破しようとする姿勢を身に着けていっていることが明らかとなった。

以上の先行研究から見てもわかるとおり、学習者たちは、他者との協働を通して、それまでとは違った視点に気がつき、自らの知識や認識を変化させているものである。



## 2-1-5 支援者の学びに関する先行研究

近年、ワークショップやボランティアに参加した学生の学びや意識の変化にスポットが当てられた研究がされるようになってきたものの、研究の蓄積はまだ少ない。しかし、先行研究は少ないとはいえ、普段は「教えられる側」「支援される側」である学生たちが「支援する側」に立ったとき、自主的に被支援者や教材、周囲の人工物とのインターアクションを通して、様々な学びを得ることができることが明らかにされてきた。水野（2007）は、ボランティア活動に参加した学生は、新しい知識の獲得、自身の変化と成長、将来の目標の決定、仲間との連帯感、楽しさ・喜び・充実感、新たな認識を獲得という6つの教育的効果を示唆している。

また、高橋（2012）は、大学生ボランティアが地域日本語教室活動において、子供たちの学習支援に取り組むことを通して、子供たちとの向き合い方を考えると同時に自己の日本語や支援教科に対する知識を見直すことで、自分の世界観を変えるきっかけとなっていることや、支援の中で問題や困難にぶつかり、少しずつ乗り越えようとする姿勢が見られるようになったとしている。

そして工藤（2013）は、日本語学習者が中国語を学習する日本人に向けた学習のコースデザインを行い、学習支援活動を行うことを通して、支援者となった学生自身の働きかけによって学習者の中国語が上達していく過程を観察し、学習者から肯定的な評価というフィードバックを得ることにより、支援者たちは相互学習を実感し、達成感を得ていることがわかった。また、学習者は自分が望むシラバスで学習する機会を得て、練習をしながらわからないところを教えてもらえるという支援を通して、自分でも手応えのある学習ができ、それが今後のモチベーションにつながっていることがわかった。このように、支援者たちは、実習を通して互惠性のある学びを得ていることが明かとなった。また、工藤（2013）は、教師は学習者が自身のもつ知識や経験を生かして相手に何かを与え、その中で相互作用がうまれるような場をデザインしていかなければならない。その際に重要になってくるのは、「何を与え合うか」であり、パートナーと共に実践する行為は、有意味な実践であることが望ましい<sup>22</sup>と他者と共に有意義な実践を行う場をデザインする必要性を述べている。

---

22 工藤（2013）P9

## 第3章 研究方法

本研究は、日本語学科の学生と日本人留学生が協働で日本語学習支援を運営していく中で、どのような学びがあったのか、そして他者とどのような関わりや、やり取りが学びの要因になっているのかを明らかにするため、筆者もファシリテーターとして活動運営に参加する傍ら、調査協力者に対し、PAC分析を応用したインタビューを行った。

そして、インタビューデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて理論生成を行う。そして、最後に M-GTA から得られた概念と活動中の会議を録音文字起こしした資料、そして筆者がファシリテーターとして活動に参加する中であった自分と学生とのやり取りの記録から、どのようなプロセスを経て学びに繋がっているのかをまとめる。

M-GTA は質的アプローチのひとつであり、分析ワークシートを用いながら概念を生成し、カテゴリーにまとめつつ、それらの関係性を図式化することによって理論的構築を行うものである。

この研究方法は、人々の相互行為を構造化することに向いていることから、人間行動の実践理論の生成に有効であるといわれている。本研究では、日本語学科の学生と日本人留学生の協働による学習支援プロジェクトを運営する中でどのような学びがあるのかという限定された範囲で理論生成を目指していること、日本人留学生と日本語学科の学生及び日本語回廊に参加する学習者たちとの間で相互作用が生じている現象であることから M-GTA が適していると判断した。

### 3-1 調査方法と内容

日本語学習支援活動「日本語回廊」にスタッフとして参加した学生たちにどのような学びがあったのかを明らかにするために、2015年3月から2016年6月の各学期末にインタビューを行ってきた。インタビューの方法としては、まずは調査協力者たちがはじめに「日本語回廊」に対してどのようなイメージを持っているかについて、キーワードを10個挙げてもらい、そこで出たキーワードを見ながら質問し、そこから具体的にどのような体験があったのか、どう思ったかなどを質問した。質問の際、調査協力者が持つ一般的な

「学び」という概念に左右されない様にするため、「学んだことは？」や「勉強したことは何ですか？」という学びに関する質問を直接しない様に留意した。以下の例は、調査協力者に行った質問の一部である。

質問例：

小池：ここでは、悩みと水曜日というキーワードがありますが、この二つはどのような関係がありますか？

調査協力者：水曜日が悩み、回廊があるから。

小池：どういう点が悩みになっていますか？

調査協力者：回廊をする前に、今日はみんなの反応はどうかな。ずっと不安でした。

小池：不安の原因は何ですか？

インタビューの内容は、調査協力者に研究の趣旨を伝えた上で同意を得て、ICレコーダーで録音しながら、必要に応じてメモを取り、インタビュー内容を文字化した。

また、インタビュー以外に、活動の顧問としてアドバイスを行いながら参加し、スタッフとして参加している学生たちの観察を行うと同時に、学生たちに許可を得て、会議の様子を IC レコーダーで録音し、必要に応じて文字化を行った。その他、学生から届いた相談メールや話し合い時の様子を録音した資料も同様に文字化を行い、分析の対象とした。

### 3-2 分析方法の選択

本研究の分析を行うにあたって、調査協力者であるスタッフたちと同じ活動に参加し、彼らの行動や成長を観察してきた筆者の主観は、分析結果に大きな影響を及ぼすと考えられる。そこで、本研究では、①質的なデータを、データに即した形でまとめていくのに適している、②手続きが確立されている、③分析者の主観を排除することなく、むしろ研究する一人の人間として、分析全体の軸に位置づけている分析方法である木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAと略す）を採用した。M-GTAは、社会学者ストラウスとグレーザーによって生み出されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）をベースに木下康仁がさらに発展させたものである。グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、データに基づいて分析を

進め、データから概念を抽出し、概念同士の関係づけによって研究領域に密着した理論を生成しようとする研究方法<sup>23</sup>である。M-GTA の特徴を挙げると、①グレーザーが細かいデータの切片化を基にした緻密な分析にこだわるのに対して、M-GTA ではデータを単に切片化するのではなく、概念生成の基礎となるデータの持つ文脈を重視し、データの文脈に基づいた意味解釈を行う。②分析を行う上で、「分析テーマ」と「分析焦点者」を設定し、「最終的にその分析で自分が何を明らかにしていこうとするのか<sup>24</sup>」という分析の方向性を見失わないようにすることを重視している。③GTA では研究する人の姿を排除するのに対して、M-GTA では研究する人間の視点を重視する。さらに、M-GTA によって生成された理論は分析結果に関心を持つ研究者によって類似した社会的場面での応用が期待される。このように、M-GTA は人間の行動を説明したり予測したりすることができる理論を生成する方法であり、プロセス的性格を持っている現象を扱うのに適している。しかし、一方で岩壁（2010）は、グラウンデッド・セオリー・アプローチが個の理解から現象の理解へと発展させることを目的に、1つの事例に見つかったコードやカテゴリーが複数の事例に共通する、より一般的なパターンであるか検討することで、あまりに個々の事例をあまり細かく見ないという問題が起こるといふ指摘もある。そこで、こうした問題への対処として、まず個々の分析を細かく行い、最終的にまとめていくという方法で、調査協力者一人一人の学びを見ていくこととした。

---

<sup>23</sup> 戈木クレイグヒル滋子(2014)P11

<sup>24</sup> 木下(2007)P146

## 第4章 東海大学の日本語回廊の概要

筆者が日本語学習支援プロジェクトをデザインしていくにあたり、現在台湾の日本語教育現場では、どのような日本語学習支援活動が行われているのか、また、そうした学習支援活動がどのような理念をもって運営されているのかを明らかにする必要があると考える。そこで、本章では台湾の大学で行われている日本語学習支援「日本語コーナー」なるものを取り上げ、どのように実施されているのかを明らかにする。台湾の日本語学習支援を調べるにあたり、定期的に行われている活動であるということ、大学の機関が関わって運営されている点、授業のようなテストや単位は関係なく、自由参加であるという点に絞った。

### 4-1 台湾における日本語コーナーの位置づけ

最近、台湾の各大学で「日本語コーナー」という名称の活動が見られる。李（2013）の報告によると、実践大学では、2008年から「日本語」を楽しませ、「日本文化」に触れさせる機会を与えるという目的でクラスが設けられ、実施している。活動内容は、学習者の学生のニーズに合わせて、日本語の会話、歌、日本文化などで、リラックスした雰囲気で行う授業を通し、日本語に対する学習意欲を高めるという目的で、できるだけ動的且つ活発的な方式をとり、一般的な教室活動と違って日本語コーナーでは学習者が常に教室で一部主導者として教学活動を進めているという。また、実践大学以外にも、東呉大学では語文学習角という名称で外国人留学生のTAを置き、外国語の口頭表現能力を練習することができる環境を設置している<sup>25</sup>。大仁科技大学応用外語学科では、学生のリスニング、話す能力及び日本語学習に対する興味を高めることを目的とし、教師の空き時間を利用して毎日2時間ほど活動を行っている。活動内容は、日本語教師が参加する学生の学習状況を見て3-5分ほど会話の練習をするものである<sup>26</sup>。このような自由参加型の言語支援活動は一体どのように行われているのかを知るため、交通大学の「日本語テーブル」という活動

---

25 東呉大學學生學習資源組〈[http://tew.scu.edu.tw/Student\\_content.aspx?rid=17](http://tew.scu.edu.tw/Student_content.aspx?rid=17)〉. 2016年12月18日 20:02 アクセス

26 大仁科技大学応用外語学科 japanese corner 〈<http://r01.tajen.edu.tw/files/11-1045-3222.php>〉. 2016年12月18日 20:18 アクセス

を見学し、実際に携わっている教師にインタビューを行った<sup>27</sup>。この「日本語テーブル」という活動は、交通大学の第二外国語を管轄している言語教育センターが中心として、日本語による会話能力向上という目的のもと、2008年よりスタートした。2008年以前は、英語の学習支援活動、英語テーブルが既に行われており、そこでの活動理念である会話能力の向上（提升口説能力）がそのまま日本語テーブルに受け継がれた。日本語テーブルは、毎週火曜日と水曜日の12時20分～13時10分のお昼の時間に、言語センターの自学室で開かれている。

活動の主な内容は、テーマに基づいて討論することであり、先生がある程度毎回の活動のテーマを決定し、担当のスタッフ(大学生や院生)が具体的に何をするか決めている。担当のスタッフは毎回一人で、学習者は一回に平均5～6人で、その多くが第二外国語で日本語をとっている学生や自学で日本語を学習している学生である。筆者が見学した2016年10月4日の昼の活動では、朗読コンテストに向けての練習ということで、集まった学生が自分の原稿を持ち寄り、担当のスタッフを相手に読み方の確認やアドバイスを受けていた。また、日本語の言語的な面の支援だけでなく、担当スタッフの自己の日本語学習の経験や方法を共有したり、日本語学習を進める上で相談に乗ったりしている。スタッフと学生の関係は、教師と学生といった関係ではなく、気軽に相談に乗ってくれる先輩という関係であると感じた。2016年上学期の活動の一部を表に示す。

1回目	浴衣着付け体験
2回目	浴衣着付け体験
3回目	朗読練習
4回目	朗読練習
5回目	50音を使ったゲーム
6回目	日本のpop文化

表2 2016年度交通大学日本語テーブルの活動例

このように、名称も活動内容も各大学によってさまざまだが、学習者の日本語を話す能力やリスニング能力を向上させることを目的としている点は一致している。名

<sup>27</sup> 2016年10月4日10:00～12:00 交通大学言語教育センター事務所でインタビューを実施。本稿の資料にインタビュー内容を掲載する。

称、活動内容共に統一されていないことから、このような授業外で行われている自由参加型の活動を総称して、「日本語学習支援活動」と呼ぶこととする。このような学習支援活動がどのようなきっかけで起こり、現在まで発展してきたかを明確に示す先行研究や資料はまだない。そこで、どの日本語活動でも共通して「英語コーナー」も同時に行われている<sup>28</sup>ことから、「英語コーナー」がどのように起こったのか調査する必要がある。次節では、「英語コーナー」からその成り立ちを見ていくこととする。

#### 4-1-1 台湾の「英語コーナー」から見るコーナーの背景

「日本語コーナー」に比べて、「英語コーナー<sup>29</sup>」は台湾のどの大学のホームページを見ても、大きく宣伝されている。中国医薬大学の「英語角落 (English Corner)」は、民國 96 年に教育部の教学卓越計画に参加することで、学生が英語のスピーチ能力の練習できる「外語学習環境」を設置した。英語コーナーは、休憩時間に学生が英語を話す能力を練習するだけでなく、実用英語会話課程や英語作文課程などの授業を設け、こうした授業以外に外国人教師を招きコーナー内で個人もしくはグループによって英語で会話をする活動を行っている<sup>30</sup>。

また、高雄医学大学言語分化中心でも英語の会話練習のため、外国籍の教師を招き昼休みの時間や放課後の時間を利用し、定期的にテーマに基づいて英語で話し合う活動を行っている<sup>31</sup>。その他にも、文藻外語大学、国立中山大学、銘伝大学、東呉大学、静宜大学など、さまざまな大学で「英語角 (English corner)」が実施されている。では、こうした英語角や日本語角、「角」は英語で「corner」を意味するのだが、実際にはこういった位置づけで用いられているのだろうか。

---

28 交通大学では、まず「英語テーブル」が起こり「日本語テーブル」はその後作られた。東海大学における「日本語回廊」も、「英語コーナー」のあとに作られた。その他、各大学においても「日本語コーナー」が行われている大学では、「英語コーナー」が必ず存在している。

29 英語角や英語角落などの表記があるが、日本語では「英語コーナー」と称する。

30 中国醫藥學院英語角落 < <http://language.cmu.edu.tw/ec.html> >. 2016 年 12 月 18 日 19:28 アクセス

31 高雄医学大学言語分化中心 English Corner < <http://lc.kmu.edu.tw/index.php/zh-TW/%E5%85%AC%E5%91%8A%E4%BA%8B%E9%A0%85/%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%BF%AB%E5%A0%B1/231-english-corner-%E6%B4%BB%E5%8B%95%E9%96%8B%E5%A7%8B> >. 2016 年 12 月 18 日アクセス

台湾の国家教育研究院の教育大辞典によると、学習角（Learning corner）とは、教師が教室をいくつかのコーナーに分け、学生の興味によって各コーナーで違ったテーマを用い、学生の興味をそそるような玩具や教材、図書などを置き、学生が自分でそれを操作し、遊びの中で自分の学習の目的を達成するものである<sup>32</sup>と定義している。こうした活動学習のコーナーを学習コーナーと呼ぶ。学習コーナーの応用は興味発見型学習法の主な特色の一つである。幼稚園や幼児を対象とし、すべての学習過程において幼児の主体的な参加、自発的に学習するため、教師は幼児を観察し、サポートし、学習環境を提供する位置づけである。幼児を自然生活に最も近い経験によって学習されるため、教師はできるだけ現実的な環境を整えなければならない。よって、教育機関では様々な学習コーナーに分けられている。例えば、ぬいぐるみコーナー、数学コーナー、パズルコーナー、サイエンスコーナー、図書コーナー等の学習を刺激するリソースを配置している。これは興味を発見する学習法を以外にも、幼児に探求、発見、問題解決のために知識や技能を習得させることができると同時に、幼児の興味や能力の違いによって、違ったテーマの学習コーナーでゲーム活動を行うことで、テーマ毎に基づいた学習目標を達成するものであると定義されている。

また、同辞典によると「発見学習（Discovery Learning）」の理念に基づいているという。発見学習とは、ブルーナーによって提唱された教育法方で、学習には直感的思考が重要であると考え、事象の背後にある法則を発見することを通して、学習者が自ら知識を構築していくものと見る<sup>33</sup>。そして、発見学習における教師の役割は、児童・生徒を問題発見とその解決に向かわせることであり、そのために系統的な補助を行うことである。台湾における「角（コーナー）」がこのような理論の上にできているとするならば、現在台湾の各大学で行われている英語コーナーや日本語コーナーが、教師が教え、学生が教えられるという一般的な授業とは違った形で実施されていることを位置づけることができる。

#### 4-2 東海大学の日本語回廊のあゆみ

---

32 国家教育研究院の教育大辞典< <http://terms.naer.edu.tw/detail/1314278/>>. 2016年12月18日 21:35 アクセス

33 ブルーナー（1963）



東海大学の日本語回廊<sup>34</sup>は、「気軽に自由に話せる場所」をコンセプトとして、2012年9月に始動した。学生個々が主体となって、自分の話したいことを日本人や他の学生と話す中で、どうやって自分の考えを相手に伝えればよいか試行錯誤をする中でインターアクションが生まれる「交流空間」として展開してきた。近年、台湾の多くの大学では英語コーナーや日本語コーナーなどの学習支援活動が設置され、学生の授業外での言語学習、特に会話能力を育成する場として、様々な形で取り組みが行われている。東海大学の日本語回廊においては、大学院生を含めた学生たちが中心的に活動を企画、運営していることが特徴である。2012年9月に日本語回廊のプロジェクトが始動し、当初は日本語言文化学系の主任を中心とした教員が企画に参加し、大学院生はTAとして活動を進行していた。大まかなテーマを教員が設定し、スタッフはそのテーマの話題で関係のある写真を印刷し、写真を見せながら参加学生と会話をするものである。担当した大学院生の数は4名で、レベルごとに参加学生をわけ、それぞれに応じた難易度で会話を進めていた。参加学生は毎週異なるが、30名から50名の間で推移していた。

その後、第二学期（2013年3月）から日本語言文化学系の教員が参加しなくなったことによって、大学院生による企画・運営が行われるようになった。活動のスタイルは前学期を受け継いだが、テーマ設定から準備をすべて大学院生が行うことで、それまでは作業をこなすだけであったスタッフの仕事も、参加学生のニーズを取り入れたり、参加学生の興味のある内容を考えたりして活動を運営していくようになった。そして、第二期、第三期と回を重ねる毎にゲームや昔の遊び、浴衣体験などの様々なイベントを取り入れた活動を展開していった。第4期（2014年3月）からは、参加学生の日本語能力を重視するようになり、活動そのものが日本語を教えるというスタイルに変化した。学習者個人の日本語レベルによって、上級・中級・初級に分け、事前に作成したレジュメに沿って簡単な会話や文化を紹介し、その練習を行うものであった。その後、第4期の活動を最後に、大学院生が全員辞めてしまった為、第5期（2014年10月～12月）では、新しいスタッフを交換留学生の中から面接で選び、日本語回廊を運営していくことになったのだが、それまで全く経験のない留学生たちは混乱し、全くやる気を失い、活動は崩壊寸前の危機に瀕していた。

---

<sup>34</sup> 本稿では、日本語回廊または回廊と表記する。

## 4-3 協働プロジェクトとしての日本語回廊

### 4-3-1 活動の概要

#### (1) 活動を行う上での理念

前節では、2015年までの日本語回廊の歩みについて述べてきた。このような経緯で、日本語回廊は一度無くなりかけ、筆者が後を受け継ぎ、日本人留学生と日本語学科の学生との協働による活動運営のスタイルを構築しようと考えた。以前の日本語回廊でも、日本語学科の学生がスタッフとして参加していたが、日本人留学生との関係は、協働ではなく、連携だった。日本人留学生が活動の内容を考え、日本語で資料を作り、その資料を台湾人である日本語学科の学生が翻訳していた。活動中も、日本人留学生が中心となり、日本語学科の学生は、必要な時に手伝いをするというものだった。このような関係性の中では、日本人留学生と日本語学科の学生との間に対等な対話が生まれず、日本人留学生が作ったものを、日本語学科の学生が受け取り、作業をするという一方的な関係となってしまう。池田・館岡（2007）は、まちづくりにおいて、「連携」と「協働」を比較して、次のように述べている。「これまでも、行政と市民との「連携」という概念が注目され、両者が互いの声を聞くというところまでの体制の変革がありました。しかし、この段階では協働の域には至っていません。連携段階とは、実際には行政側に最終決定権や主導権がある段階のことで、協働の前段階を意味しています。<sup>35</sup>」つまり、一緒に作業を行う両者の立場に上下関係が生じてしまうと、水が高いところから低いところに流れていくのと同じで、下からの意見はなかなか上に通らないものである。それゆえ、第一に考慮した点は、日本人、台湾人問わず誰が中心で誰に決定権があるのかを決めず、皆が自分の意見を言い合える場であるということである。そして、すべての企画、運営はスタッフとして参加する学生に委ね、筆者はスタッフ達の相談役という位置で活動を見守るという役割を担う。日本語回廊を再編成するにあたり、重視したことは、実践活動という具体的な状況の中で、スタッフ同士が協力しながら、活動を如何に運営してゆくのか、自分の意見や考えを相手に伝え、相手の意見を尊重する中で、よりよい活動を作ることである。

---

<sup>35</sup> 池田・館岡（2007）p9

## (2) 活動の立ち上げ

新学期の活動に向けての動きは、2014年12月末から開始した。以前、日本語回廊に参加してくれていた学生である王さん、張さん、陳さんと共にどのような活動にすれば良いか話し合い、スタッフのやってみたいことを学習者と実現していく場にするということに決まった。その背景には、日本語学科の学生として、まだまだ知らない日本の事、台湾の事について話し合い、みんなで一緒に新しい考え方を見つけたり、新しい作品を作ったりしていきたいという王さんの思いがあったからである。

そして、年が明けて新学期が始まると同時に、他のメンバーの募集を行った。募集に当たり、日本語学科の授業の一つである日語分科教学法を履修している学生5人が参加し、事務係として前学期の事務係の後輩2人が参加した。また、日本人スタッフは、日本語学科で行っているTAの面接の際に、日本語学科の教員により選ばれた日本人留学生2人が参加、そして日本語回廊が始まって2週目に日本人スタッフが足りないということで、華語センターから新たに探してきた日本人留学生の12名のスタッフで活動の運営を行った。

活動の企画は、日本語回廊のスタート日が迫っていたため、先に集まったメンバーで、どのような活動にしていくか話し合った。そこで、メンバーがしたいことを出し合い、料理、旅行、園芸、状況について話し合う、ラジオドラマなど大まかなテーマを決め、後に集まったメンバーと誰がどのテーマで活動を作っていくか相談し、各テーマ毎にそれぞれの活動の企画を行った。このようにしてプロジェクトとしての日本語回廊が新たなスタートを切った。次項では、第6期～第8期の活動内容と変化について述べる。

## 4-3-2 第6期日本語回廊の活動内容

第6期日本語回廊は前項で説明したように始まり、新学期の第2週目から宣伝活動を行い、学習者を募集した。活動内容は、4つのグループに分かれ、テーマをそれぞれ「こんな時どうする?」「台湾の料理と日本の料理」「一緒に旅行を計画しよう」「演じたい自分を見つけてみませんか」と題し、便宜上それぞれを「状況班」「料理班」「旅行班」「ラジオドラマ班」と名付けた。宣伝ポスターは日本語学科の掲示板以外にも、学生食堂や歴史学科などの他学科の掲示板にも掲示した。そして、第6期日本語回廊が始まり、第一回目の参加者は40名を超えた。そこで、日本人スタッフが不足しているということで、急遽新たな日本人留学生を探し、宮迫さんがメンバーとして加わった。各グループ毎の活動内容は下記に示す。また、1学期間の活動は、毎週水曜日の12時20分～13時10分までで、全12回である。

### (1) 各グループの活動

#### (ア) 状況班

状況班は、「こんな時どうする?」をテーマに学習者と共に日本と台湾ではどのような違いがあるかを討論するグループである。Facebookのグループを利用し、参加者にどんな事に興味があるのか、何を知りたいのかを書き込んでもらい、毎週のテーマを決める。例えば、怪我をしたとき、日本ではどのように処置をするか、どんな病院に行けば良いかなど、実際の経験を語り合うというものである。活動の流れは、①Facebookで学習者の意見を聞きテーマを決める、②スタッフはそのテーマに関する資料や不足している知識を補う、③日本語回廊でテーマについて話し合う。活動中は原則日本語で話し、わからない言葉などは中国語で訳したりする。学習者のほとんどは、日本語を流暢に話すことができる日本語上級者である。状況班は、実際の生活という身近なテーマで、自分たちの経験を話し合い、様々な情報を共有することであり、その過程でどうやって自分の考えや経験を自分の言葉にして相手に伝えるかを学ぶことを目指す。

## (イ) 旅行班

旅行班は、「一緒に旅行を計画しよう」というテーマのもと、実際に学習者と共に旅行を計画し、行くというものである。活動の流れは、①活動で旅行の経験を話す、②台湾と日本で行ってみたい場所を話し合う、③台中の近場で観光地や穴場スポットを話し合う、④現実的に行ける場所を話し合い、目的地を決定する、⑤学習者各自で目的地の観光スポットの紹介を準備する、⑥活動中に観光スポットの歴史や紹介を日本語でどうやって説明するかを話し合い旅行計画を作成、他の回廊グループの学習者に宣伝する、⑦みんなで旅行に行く。という一大プロジェクトである。ただ、遊びに行くのではなく、細かく計画したり観光地の情報を調べたりすることで、みんなで話し合い決定していくことを目指す。学習者の大半は日本語を勉強し始めたばかりの学生や、日本語を勉強したことのない学生である。そのため、活動中日本語と中国語の両方が飛び交っていた。

## (ウ) 料理班

料理班は、「台湾の料理と日本の料理」というテーマで、それぞれの料理の特徴や不思議な点を比較し話し合うことを中心とし、さらに学習者と一緒に料理のレシピを調べて実際に作るものである。活動の流れは、①食べたことのある日本や台湾の料理、面白いと思った料理などを話し合う、②食べてみたい料理を話し合い、レシピを調べる、③日にちを決め、実際に料理を作って食べる、④作った料理のレシピを作成する。というものである。この活動では、日本と台湾の料理の文化を話し合い勉強するだけでなく、一緒に同じ釜の飯を食べることで、人間関係も広げて行くことを目指す。

## (エ) ラジオドラマ班

ラジオドラマ班は、1人の日本人スタッフが提案したテーマだが、興味のあるスタッフが他にいなかったため、一人で活動を運営することになった。「演じたい自分を見つけてみませんか」というテーマで、学習者とセリフを読み、一つのドラマを完成させるものである。活動の流れは、①ラジオドラマの台詞を読んで、その状況を考えながら声に出して読み練習する、②4コマ漫画を作成し、その4コマ漫画を声に出して読み、録音する、③録音した音声と、4コマ漫画を繋げてビデオを作成するというも

のである。参加者は日本語学科2年生が毎週2,3人で、午後の掃除などと重なり、来たり来なかったりと不安定であった。このグループは、ドラマの台詞を通して、話し方や状況を話し合う他、実際に自分もその役になりきって台詞を話すことで、さまざまな言語表現を勉強することを目指す。

## (2) 活動の編成とプロセス

上記の活動は、すべてスタッフが主体的に立案し、コースデザインを行った上で実践している。筆者は、スタッフたちの相談を受けたり、アドバイスを行うが、筆者主導で活動の決定をすることはしない。活動開始までの約2週間間に、各グループ毎にコースデザインを行い、資料などの準備を行う。活動開始後は、毎週一回全体で集まり、状況報告や問題解決のための話し合い、必要な場合は互いのグループの手伝いを行う。全体会議の他、書くグループ毎に、活動の具体的な内容や資料の準備を行う。筆者は、各グループ内でのやりとりには、基本的に干渉せず、何か問題が発生したときや、スタッフから相談を受けた時に、アドバイスや解決策を一緒に考えるというスタンスである。グループ内での役割や話し合いは、各自に任せていた。それまで、活動運営を経験したことのないスタッフたちは、はじめは戸惑い、メンバー間でうまくコミュニケーションがとれないなどの問題が発生し、それぞれが悩んで解決していった。活動がうまくいっているかどうかの判断基準は参加者から回収するアンケートと、参加者の反応である。そのため、参加人数が増加したり減少したりすることで、活動内容を調整した。

## (3) 活動時間の流れ

日本語回廊のスタッフは毎週1回、木曜日の昼12時～15時の間に集まり、進め方や現状などの報告、相談を行う。水曜日の11時半頃に授業時間と重なっていないスタッフが集まり、ブルーシートや必要な備品を準備する。12時10分頃から、授業を終えたスタッフや学習者が続々と集まり始め、歓談を始める。12時20分から活動開始、12時50分頃まで各グループで活動を行い、昼食を配布する。昼食を食べながら、学習者と歓談したり、アンケートの記入を行う。終了後、午後の授業のないスタッフが集まり、状況などを話し合う。翌日の木曜日にもう一度集まり、毎回の反省や今後の予定を話し合い、各グループの準備を行う。会議の進行は、はじめは筆者が行っていたが、途中で台湾人スタッフの王さんに任せ、補足が必要な時は筆者も加わった。会議

は、長いときでは2時間半に及んだが、あまり会議に慣れていない学生たちは、なかなか意見も言えず、あまり効率的な会議は行えていなかった。また、各グループの話し合いは、それぞれに任せていたため、グループでの話し合いを行わない、コミュニケーションがとれていないなどの問題も発生した。しかし、スタッフたちはそのたびに悩み、解決していこうと努力をしていた。

#### 4-3-3 第7期日本語回廊の活動内容

第7期日本語回廊の会議は、2015年9月30日からスタートした。活動メンバーは、前学期に引き続き、林さん、王さん、山田さん、宮迫さんの他に新たに森さん、山村さん、周さん、藤田さん、唐さんが加わり、9人のメンバーで活動を運営することになった。第6期の最後の会議で、会議時間を増やし、メンバー間のコミュニケーションをもっと取るようにすると決め、第7期の会議は週二回行うこととした。また、第6期には決めていなかった各メンバーの役割も決め、それぞれ司会、記録、FBの更新、備品の管理など、大まかではあるが誰が担当するかを明白にした。

そして、活動内容については、第6期に全体がまとまらなかったことから、統一したテーマで、そこからグループに分かれて活動を行うこと、状況班の討論方式の活動が成功していた例から、学習者とテーマに基づいて討論するスタイルで活動を行っていくこととした。そして、日本人スタッフの4名で、それぞれの出身地域をグループの名前として、学習者にどの地域で話がしたいかを選択させる形をとった。例えば、方言というテーマで討論をする場合、沖縄、大阪、岐阜、名古屋と分け、その各地域でどんな話し方があるかを討論する。第7期のテーマは表3に示す。

回数	テーマ	内容
1回目	ゲーム	日本と台湾のゲームを実際にやってみる
2回目	食べ物	面白いと思う食べ物や好きな食べ物について
3回目	ハロウィン	ハロウィンでどんなイベントがあるか、お菓子について
4回目	祭り	日本のお祭りや台湾のお祭りについて
5回目	言葉	若者言葉や方言
6回目	パーティー	みんなで楽しくフリートーク

表3 第7期日本語回廊の活動内容

## (1) 活動の編成とプロセス

第7期の活動のスタッフ募集は、夏休前に行った。事前に9月から留学してくる日本人留学生に連絡を取り、活動内容を伝えていた。また、台湾人スタッフも第6期に日本語回廊に参加してくれていた参加者の中から、やりたいという申し出があり、2人参加してもらうことになった。そのため、新学期がはじまってすぐの9月30日に会議を開くことができた。会議では、第6期には無かった役割分担を決め、テーマ決定を行った。大学の予算の関係上、第7期の回廊は6回しか開催することができないと聞かされ、一つ一つの活動に力を入れようと皆で決心した。

前学期の反省を生かして、活動のスタイルをグループ毎に別々のテーマにするのではなく、統一したテーマのもと、4つのグループに分けて活動を進めて行くことにした。また、第6期の活動が12回もあったのに対し第7期では6回にまで減少してしまったため、旅行班や料理班など、参加者と共に計画し、実行するスタイルの活動は難しく、話し合いを中心とした活動スタイルで進めることとなった。グループの分け方については、地域によって分けてみてはどうかという意見から、日本人スタッフの故郷の地域によって分けることとした。そして、台湾人スタッフもちょうど4人であったため、それぞれの地域グループに一人ずつ入り、1グループを二人で担当、進行を行った。

第7期の回廊では、会議の司会を日本人留学生である山村さんが担い、記録などの役割も振り当てたため、会議も活動全体もまとまって動くことができた。また、メンバー9人という少人数であることにより、メンバー間の連絡も緊密になり、みんなで協力して準備に当たることができていた。活動を運営していく中で、司会者はどのようにメンバーから意見を引き出すか、記録する人はどのように記録をつけていくのか、また、固定した役割のないメンバーたちも、自分の考えをどのように相手に伝え、みんなの意見をまとめていくのかを学んでいくことになる。

## (2) 活動時間の流れ

スタッフの会議は第6期日本語回廊でも行われていたが、第7期では活動前の月曜日に活動の打ち合わせや準備を行い、活動が終わった金曜日に活動の反省を含めた会議を行った。どちらの会議も1時間から2時間近くまで及ぶ。活動当日は、時間のあるスタッフが、事務係と協力して昼食を用意する。そして、ブルーシートなどの準備をした後に、12時頃からポスターを持ったスタッフが回廊の入り口に立ち、日本語回廊の



案内を行い、他のメンバーはブルーシートの上でグループに分かれて日本語回廊の学習者と歓談を始める。12時20分頃には殆どの学習者が集まり、各グループの案内を行い、グループに分かれて話を始める。12時50分頃に、事務係の二人がアンケートと昼食を配って回り、昼食を食べながらしばらく歓談をする。午後授業のないスタッフはそのまま残り、2時頃まで残った学習者とフリートークや活動の感想などを聞く。活動終了後、金曜日の16時から18時の間にスタッフで集まり、活動の反省や問題点などを話し合う。そして、簡単に次週の活動をどのようにしていくか話し合い、土日を利用して各自資料などを準備し、月曜日の会議で最終確認を行う。

#### 4-3-4 第8期日本語回廊の活動内容

第8期日本語回廊では、それまでのメンバーの大半が帰国、または留学に行ってしまうため、日本語回廊に参加できなくなってしまった。そこで、新たにメンバーの募集を行った。第7期から参加していた山村さん、周さん、藤田さん、唐さんの他に、それまで学習者として日本語回廊に来ていた日本語学科2年生が4名加わり、日本人留学生も新たに二人決まった。

しかし、日本語回廊が始まった週に突然、日本人留学生の二人が辞退したため、急遽新しい日本人スタッフを探すことになった。唐さんの友人を通して、学部生として東海大学に入学している日本人留学生が参加することに決まり、なんとかスタートを切ることができた。第8期の日本語回廊の活動回数は、予算の関係上第7期と同じという通達があったが、大学事務に掛け合い8回まで回数を増やすことができた。さらに、スタッフ会議では、活動運営の細かな改善点や前学期までは曖昧だった活動全体の目標について話し合われた。第7期の最後に行った学習者へのニーズ調査から、学習者が日本人との交流や友達を作るために来ていることが多く、勉強というイメージを取り払った交流を目的とし、プレッシャーのかからない内容を設定していくことにした。そして、「みんなで楽しく話し合う」空間にすることを念頭に置き、テーマを決めた。

回数	テーマ	内容
1回目	ゲーム（自己紹介）	アイスブレイキングとしてゲームを行い、参加者の緊張を解いてから自己紹介をする
2回目	変な食べ物	第3回目の後の料理パーティーに向けて、食べ物や料理について話し合う
3回目	みんなで定食を作ろう	実際に料理を作ることを考えながら、定食のメニューやレシピを考える。
時間外	料理パーティー	学校の調理室を利用して、みんなで料理を作って食べる。
4回目	大学の生活	自分の大学生活を話し合っって相手を知る。また、日本と台湾の大学生活を比較して違いを考える。
5回目	遊ぼう	普段何をして遊んでいるか、インドア派・アウトドア派の考えの違いを話し合う。
6回目	若者言葉	日本の若者言葉や流行語を紹介して、台湾のものと比較しながら、意味や使い方について話し合う。
7回目	日本と台湾の屋台について	台湾と日本の屋台の違いを話しながら、その特徴や面白いと思うところを共有する。
8回目	パーティー	みんなでフリートークをしながら、活動の振り返りや今後話してみたいことやしてみたいことを話し合う。

表4 8期日本語回廊の活動内容

### (1) 活動の編成とプロセス

第8期日本語回廊で大きく変化した点は、会議の効率化と学習者同士の協力体制の強化である。前学期に引き続き、会議は週に2回行われたが、会議の議題を具体化、LINEグループ上で報告を行った上で、会議を行っていた。そのため、会議の進行や討論がスムーズに進み、さまざまな問題を取り上げ解決することができた。さらに、学習者同士が互いの仕事を協力し合うことによって、スタッフ同士の人間関係を深めながら、意見を言い合い、聞き合うことで、他者と共に一つの活動を作りあげることを経験していくことになる。

### (2) 活動時間の流れ

第8期では、火曜日に活動を実施し、活動前の月曜日に活動の打ち合わせや準備を行い、活動が終わった木曜日に活動の反省を含めた会議を行った。第7期では、会議の時間が長くて2時間近くかかることもあったが、第8期の会議では、議題を明確化し進行したため、1時間以内に毎回の内容を話し合うことができた。

活動当日は、時間のあるスタッフが、事務係と協力して昼食を用意する。そして、ブルーシートなどの準備をした後に、12時頃からポスターを持ったスタッフが回廊の入り口に立ち、日本語回廊の案内を行い、他のメンバーはブルーシートの上でグループに分かれて日本語回廊の学習者と歓談を始める。12時20分頃には殆どの学習者が集まり、各グループの案内を行い、グループに分かれて話を始める。12時50分頃に、事務係の二人がアンケートと昼食を配って回り、昼食を食べながらしばらく歓談をする。午後授業のないスタッフはそのまま残り、2時頃まで残った学習者とフリートークや活動の感想などを聞く。活動終了後、木曜の12時から13時の間にスタッフで集まり、活動の反省や問題点などを話し合う。そして、簡単に次週の活動をどのようにしていくか話し合い、土日を利用して各自資料などを準備し、月曜日の会議で最終確認を行う。

#### 4-3-5 大学側からの予算について

日本語回廊を行うにあたり、大学の資源センターから運営予算が出ている。参加者の昼食代、教材作成の際の印刷費、その他必要な道具などをその予算で購入することができる。さらに、日本語回廊にスタッフとして参加している私たち学生に対しても、僅かではあるが、給料が発生している。しかし、第一期の日本語回廊以降、日本語回廊に降りる予算と使用可能な範囲が徐々に狭まっていった。予算の中で一番重要な部分を占めるのが、参加者に配る昼食費用である。日本語回廊はお昼休みの時間帯に行なっているため、参加する学生の為に昼食を準備する。第1期の活動では、一回の活動につき5000円近くの昼食費用があり、簡単なビュッフェを注文し、サンドイッチやから揚げなどの軽食を食べながら活動を行う事ができた。しかし、予算は少しずつ減らされ、第8期の頃には、一回につき1500円、1人50円以内と決められるようになった。

また、教材の印刷費用も、大きな問題である。第1期から第4期までは、カラー印刷やパウチ、ブルーシートやサインペンなど、活動に必要な道具に予算を使うことができた。しかし、第5期以降は、印刷も白黒で何枚までと制限されるようになり、スタッフが自費で印刷を行うなど、自分たちで工面する他なくなってしまった。

## 第5章 調査概要

### 5-1 調査協力者及びデータ

調査協力者は、日本語回廊にスタッフとして参加した学生のうち、インタビューの目的を説明した上で、快く協力してくれた7名である。プライバシー保護のため、調査協力者の名前は仮名で表記する。また、調査協力者以外のメンバーについても、同様に仮名記で表記する。

名前	性別	所属	活動参加期間
林さん	女性	日本語学科3年生	2015年2月～12月（第6期・第7期）
王さん	女性	日本語学科3年生	2015年2月～12月（第6期・第7期）
山田さん	女性	日本人留学生	2015年2月～12月（第6期・第7期）
宮迫さん	女性	日本人留学生	2015年2月～12月（第6期・第7期）
森さん	男性	日本人留学生	2015年2月～6月（第6期）
山村さん	女性	日本人留学生	2015年9月～2016年6月（第7期・第8期）
周さん	女性	日本語学科2年生	2015年9月～2016年6月（第7期・第8期）
曾さん	女性	日本語学科3年生	2015年2月～6月（第6期）

表5 調査協力者の属性

調査協力者に対するインタビューは、2015年3月から2016年6月の各学期末にインタビューを行ってきた。インタビューを実施した日時については、表6に提示する。

名前	1回目	2回目	3回目
林さん	2015/3/8	2015/6/29	2015/12/2
王さん	2015/3/6	2015/6/29	2015/12/2
山田さん	2015/6/29	2015/12/16	
宮迫さん	2015/7/2	2015/12/16	
森さん	2015/6/29		
山村さん	2015/11/25	2016/6/26	
周さん	2015/12/20	2016/6/26	
曾さん	2015/6/27		

表6 インタビュー日時

インタビューの内容は、調査協力者に研究の趣旨を伝えた上で同意を得て、IC レコーダーで録音しながら、必要に応じてメモを取り、インタビュー内容を文字化した。

また、インタビュー以外に、活動の顧問としてアドバイスをを行いながら参加し、スタッフとして参加している学生たちの観察を行うと同時に、学生たちに許可を得て、会議の様子を IC レコーダーで録音し、必要に応じて文字化を行った。その他、学生から届いた相談メールや話し合い時の様子を録音した資料も同様に文字化を行い、分析の対象とする。表 8 に会議記録の日時、録音時間を記す。

第 6 期日本語回廊		第 7 期日本語回廊		第 8 期日本語回廊	
録音日	録音時間	録音日	録音時間	録音日	録音時間
2015/3/26	1 時間 16 分	2015/10/28	45 分	2016/3/15	29 分
2015/3/26	1 時間 16 分	2015/10/28	45 分	2016/3/15	29 分
2015/4/2	1 時間 22 分	2015/11/9	33 分	2016/3/17	55 分
2015/4/30	1 時間 7 分	2015/11/16	59 分	2016/3/22	35 分
2015/5/7	1 時間 42 分	2015/11/18	49 分	2016/3/28	22 分
2015/5/14	58 分	2015/11/19	51 分	2016/3/29	29 分
2015/6/4	1 時間 39 分	2015/11/23	49 分	2016/4/18	31 分
2015/6/11	1 時間 19 分	2015/1/25	1 時間 38 分	2016/4/19	38 分
		2015/12/7	37 分	2016/4/26	28 分
				2016/5/3	21 分
				2016/5/9	40 分
				2016/5/10	28 分

表 7 会議記録の日時と録音時間

## 5-2 分析の焦点

本研究の分析テーマは、日本人スタッフと台湾人スタッフが協働してプロジェクトの企画・運営をしていく中で、どのような「学び」が生まれるのかを明らかにすることを目的としている。

本稿では、調査協力者の学びを明らかにすることが目的であるため、まず各調査協力者の概念を生成し、その概念間の関係を検討しカテゴリー化する。それから、概念とカテゴリーについて、会議記録や筆者の観察の点を交えて述べる。

## 5-3 分析の手順

インタビューデータを、①生成中の概念とデータの中の具体例を比較し、概念を個々に完成させる、②概念同士の関係を検討する、③関連し合う複数の概念からカテゴリーを生成する、④カテゴリーとカテゴリーを比較し、カテゴリー間の関係を検討する、⑤全体のデータの中心となる概念あるいはカテゴリーを見出していくという作業を同時並行で行った。

### ①概念の生成

インタビューデータの中で、分析テーマと関連している部分に着目し、分析焦点者の視点から見て、それはどんな意味を持つのか意味を解釈した。そして、その部分を具体例として、概念を生成し、その名称と定義、具体例と理論的メモをワークシートに記入した。その後、新しい概念が生成される度に、ワークシートを順々に作成し、それぞれの概念について具体例を追加していくとともに、概念の名称と定義が妥当的であるか何度もデータに戻りつつ個々の概念の完成に向け作業を進めた。M-GTAにおいては、ある概念の具体例がすべて同じ分析焦点者からしか出ない場合は、概念として不成立と判断するのだが、本研究においては、個々のデータを重視する理由から全ての概念を成立すると判断した。表8はワークシートの記入例である。

### ②カテゴリーの生成

自分が生成しつつある概念と、他の生成しかけの概念の関係を個別に見比べて検討し、概念のまとまりを作っていくことで、カテゴリーの生成を行った。ただし、その

概念そのものが単独で意味をなすと判断した概念については、単一の概念からなるカテゴリーとした。

### ③カテゴリー同士の比較検討

分析結果の中心が何になるのかを検討しながら、データとの確認作業を行った。ここでは、カテゴリー同士がどのような関係性になるのか、一つのプロセスとして捉えられているかどうかには注意をしながら、カテゴリーの相互関係を考えながら、概念関連図を作成した。

### ④個々の分析結果を細かく見る

以上の手順を経て、調査協力者一人一人の概念関連図を作成し、その図と具体例に基づいて、調査協力者が日本語回廊の活動を運営していく中で、どのような出来事があり、学びに繋がっているのかを見ていく。また、同時に会議記録から、実際にどのようなやりとりが行われていたのか参照する。この作業で、個々の分析を細かく見ていくことで、スタッフ一人一人にどのような気づきや実感、認識の変化があったのかを明らかにする。

### ⑤全体の分析をまとめる。

最後に、個々の学びをまとめ、一括りの概念関連図を作成し、その図を参照しながら、スタッフたちは、どのようなやり取りを経て、学びを得ているかを説明する。

#### 概念1：支援者として日本語を話す意識

定義：支援者として学習者に日本語で話してもらうために、日本語を話さなければならないという位置づけをしている

具体例：

小池：日本語を話すと会議、これはどうでしょう。

林さん：日本語、しなければならないこと。

小池：なぜ、日本語を話すと会議がしなければならないことですか？

林さん：回廊の時に日本語で話す。日本語を、日本語で話さないと、参加者も日本語で話さない。

林さん：会議、うーん、会議のとき、発表の時も日本語で話す。

林さん：日本語は、回廊の時の日本語、みんなと日本語でコミュニケーションをする。それは、会議の時も討論、日本語で話さないといけない。

理論的メモ：「しなければならない」というのは、支援者として、活動を作るための意識である。学習者のために日本語で話す、学習者に日本語を話させるという支援者としてのあり方を感じ、それに伴った行動をとろうとしている。

表8 ワークシート記入例



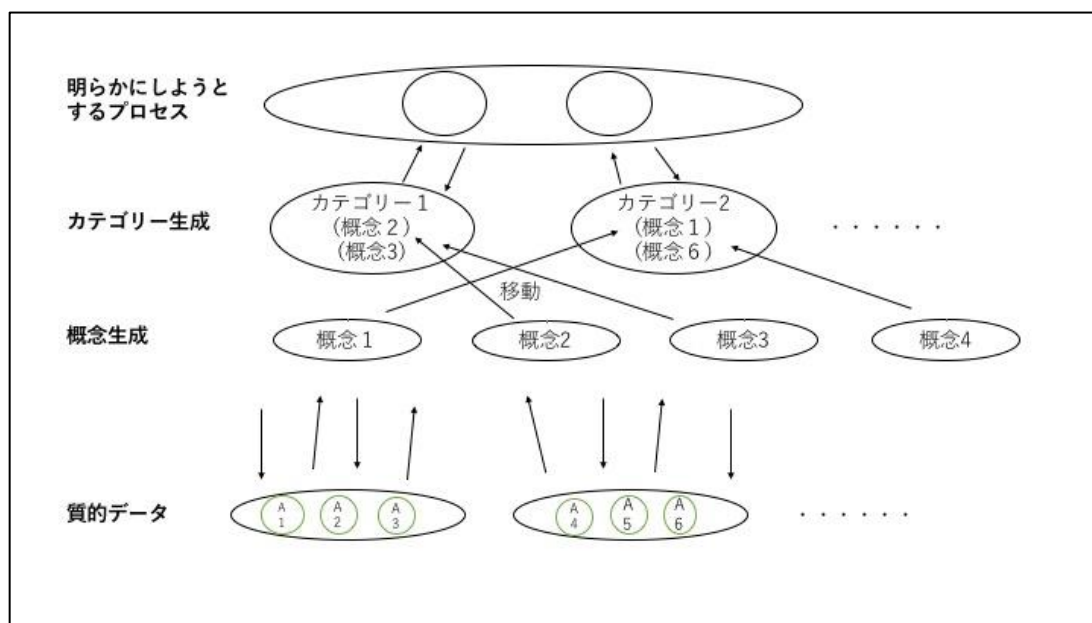


図2 分析のまとめ方

M-GTAの分析のまとめ方を図式化すると図2の様になる。まず、質的データであるインタビューデータを、その文脈に基づいて読み込みを行い、そこから概念を生成する。そして、概念同士の関係性を検討しながら、それぞれ類似した項目をまとめ、カテゴリー化を行う。そして、カテゴリー関係をまとめていくことで、一つの概念関連図を作成する。

以上のような手順で分析をまとめ考察すると共に、筆者が研究背景で述べた言語教育の目指すべき学びという、(1) 言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ。(2) 他者を認め、考え方の多様性を理解すること。(3) 自己の認識を深めると共に、学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い、自己課題を見つける。の3つの視点から分析結果を踏まえ、言語教育としての学びを位置づける。

## 第6章 分析結果

### 6-1 個々の分析

#### 6-1-1 林さんの場合

林さんは日本語学科 3 年生で、以前日本語回廊には参加者<sup>36</sup>として来ていた経験がある。日本語学科の日語分科教学法という授業を履修していて、その実習として 2015 年 2 月より日本語回廊スタッフのメンバーに加わった。林さんに対するはじめの印象は、とても物静かな学生で、自分から話しかけることは少なく、人と人の話をじっと見つめていて、普段何を考えているかよくわからない学生であった。第 6 期日本語回廊では、みんなで旅行を計画して旅行に行くという目標の「旅行グループ」の中心メンバーとして、活動のコースデザイン<sup>37</sup>を行っていた。しかし、メンバー間でうまくコミュニケーションを取ることができず、活動がうまくいかなかったり、メンバーが分裂してしまったりなど、様々な問題にぶつかり、その度に悩み、問題を乗り越えていった。

インタビューの内容を、M-GTA で分析した結果、「言語学習の仕方に対する認識の変容」「日本語を使うことに対する意識の変化」「自分の日本語に対する自信の芽生え」「話すのは怖い相手の顔を見て話すことの必要性を感じる」「ちゃんと話して相手に伝えることの重要性を知る」「考え方や方法の違う人と一緒に仕事をする必要性を実感」「活動の中で自分の役割を見つける」「分担協力して作業することの重要性を実感」「参加者からスタッフへの意識の変化」「仕事と怖いという子持ちを分けることの必要性を実感」の 10 個の概念が生成することはでき、さらにその概念同士の関係性を検討し、カテゴリー化を行った。すると、「日本語を話すことに対する認識の変化」「ことばにして相手に伝えることの重要性を知る」「さまざまな考え方を交流させる重要英」「他者と協力して一つのことをする意義」「スタッフの仕事に向き合う態度を身につける」の 5 つのカテゴリーができた。

概念とカテゴリー間を図でまとめると、図 3 のような概念関連図が作成できた。生成された概念を白地に黒字で表し、そこからできたカテゴリーを黒地に白字で表す。

<sup>36</sup> 2013 年の活動において、被支援者として参加していた。

<sup>37</sup> 日語分科教学法の授業の課題で、自分で学習支援などのコースをデザインして実施するものである。

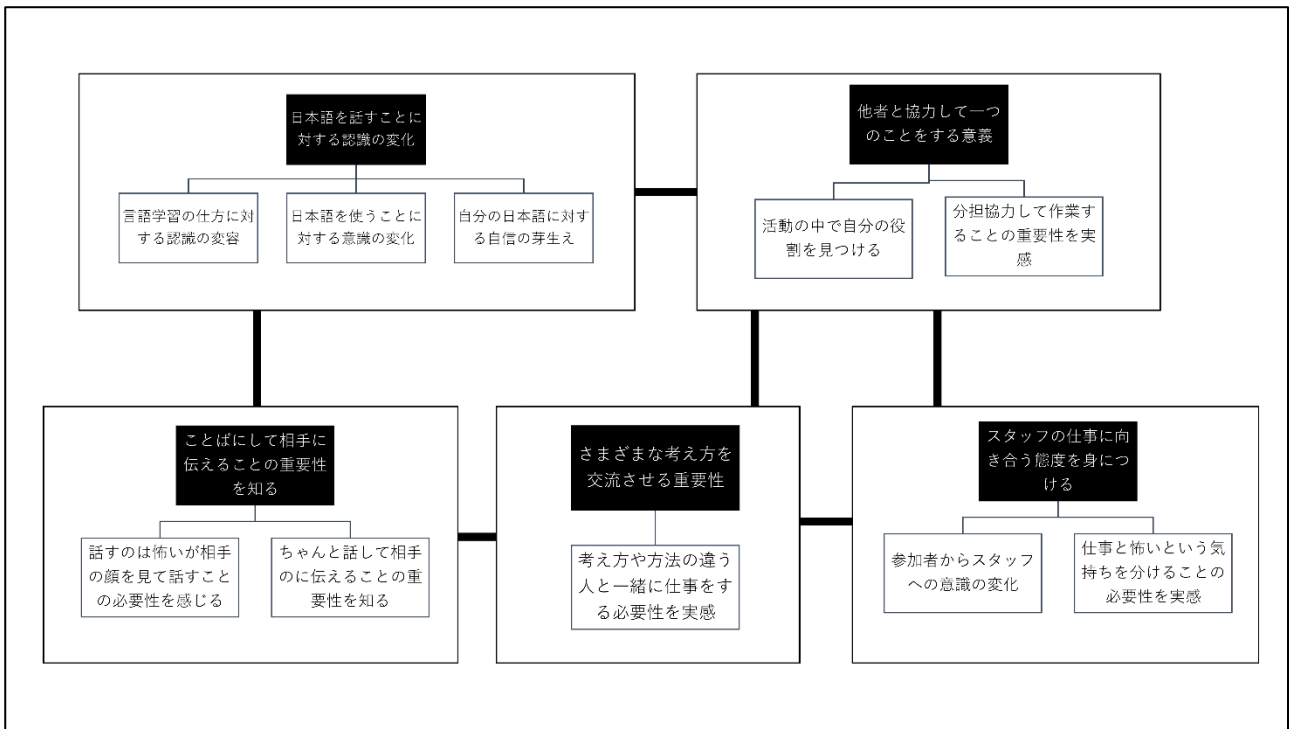


図3 林さんの概念関連図

(1) [日本語を話すことに対する認識の変化]

このカテゴリーは、①言語学習の仕方に対する認識の変容 ②日本語を使うことに対する意識の変化 ③自分の日本語に対する自信の芽生えの3つの概念から生成された。

林さんは、東海大学の日本語学科で日本語を学習している学生である。日本語学科の学生にとって、日本人と実際に会話をするのできる場合は、学校が用意している会話のTAと、日本語回廊である。会話のTAというのは、授業で習ったことを、放課後の時間を使ってTAのもとへ行き、会話の練習をするというものであり、言わば会話の練習相手である。また、2015年以前の日本語回廊は、日本人が中心となり、日本の地域や食べ物、言葉などを紹介するという内容のもので、そこ場でやりとりされていたものは、専ら知識である。そのような環境の中で、林さんは日本人と日本語を話すことについて、インタビューで次のように述べていた。「跟日本人聊天，可以自己，就是，就可以问自己有興趣的問題，然後，得到跟上課不一樣的知識，從日本人那邊得到不一樣的知識，我覺得很有趣（日本人とおしゃべりする、自分で興味のある問題を聞く、そして、授業とは違う知識を得る。日本人から違った知識を得ることは、面白いことだと思います。） {インタビュー2015/3/8}」「因為說日語都跟日本人有關，所

以有問題直接問日本人最清楚的。（日本語を話すことは日本人と関係があります。だから、直接日本人に聞くのが一番わかります。） {インタビュー2015/3/8}」。このように、知識を求めることが中心となっている。知識というのは、言語的な知識や日本の文化に対する知識のことである。また、勉強の仕方については、「うーん、単語を覚えます。然後日文的文法很難，要背，還有要多講才可以（そして、日本語の文法は難しい、覚えなければいけません、そしてたくさん話す）。 {インタビュー2015/3/8}」と、日本語を学習する上で、単語や文法を覚え、自分で話すことが必要であると考えている。こうした言語学習の方法は、一般的に体系化された授業や教科書の中で行われるものである。学校で日本語を学習している林さんが、このような学習に対する認識を持っていることは、なんら不思議ではない、むしろ正常であると言える。

日本語回廊にスタッフとして参加してゆく中で、日本語を話すということは、単に学習のためでなく、他者とやりとりするために必要なツールとしての存在へと変化する。インタビューでは、「回廊の時に日本語を話す。日本語を、日本語で話さない、学習者<sup>38</sup>も日本語で話さない。だから、日本語で話さなければならない。 {インタビュー2015/3/8}」と語った。スタッフとして学習者に日本語で話してもらうために、自分も日本語で話す必要があると感じている。また、「会議、うーん、会議の時、発表、昨日の状況を話す時も日本語で話す。日本人が多いです。あまり中国語がわからない。だから、日本語で話さないといけない。 {インタビュー2015/3/8}」というように、スタッフ同士が会議を行う上で、中国語を学習しはじめたばかりの留学生にもわかるように日本語で話さなければならない状況である。そうした状況の中で、日本語を使うことによって、林さんは、新しい言語の学習を経験している。インタビューでは、「就日本人他們在我們開會的時候就是都講日文，就可以聽他們是去怎麼表達一件事情，所以是一種學習。然後我也講自己的想法。（日本人は会議の時日本語を話します。そのとき、彼らがどのように一つのことを表現しているのかを聞きます。これは勉強です。そして、私も自分の考えを言います。） {インタビュー2015/6/29}」や「會議的時候常常有他們在講什麼東西。聽不出來。就是有時候講的一瞬間聽不懂，但後來聽一聽才發現原來是那個。猜一下，而且那個不會一下就過去，他們通常會有前後文，所以可以猜一下。也有猜錯的時候。（会議の時、よく何を言って

---

<sup>38</sup> 学習者とは、日本語回廊に被支援者として来る学生たちのことである。

いるかわからない時がある。聞いてわからない。一瞬わからない、でも後で聞いていると、そういう意味だったのかってわかる。推測してみる、それにそれ（話題）はすぐに通りすぎない。前後に内容があります。だから推測できる。間違えることもあるけど。） {インタビュー2015/6/29} 」と語った。

このように、実際に会議で話し合う中で、他の人が日本語でどのように表現しているのかを聞き、自らも自分の考えを日本語で言ったり、聞いて分からないことを、前後の内容から推測したり、状況の中で日本語を使うことを経験している。自分のこうした新しい日本語学習について、「行動と日本語の学習。因為我要跟大家一起討論，所以要自己行動，行動與學日文是一起的。（行動と日本語の学習。みんなと一緒に討論しなければならないから、自分で行動する。行動と日本語の学習は一つです。）

{インタビュー2015/6/29} 」と、行動する中で日本語を学習していくことが重要であることを実感している。日本語回廊に参加したばかりの頃は、言語や文化の知識を得たり、覚えたり、練習することが学習であると認識していたが、日本語回廊を通して、自ら行動し状況の中で日本語を使っていくことで、新しい表現方法を取り入れ実践していくというように、言語学習に対する認識が大きく変化しているのである。

以上のような学習に対する認識の変容に伴って、「なぜ日本語を話すのか」という② [日本語を使うことに対する意識の変化] も見られた。回廊に参加し始めた頃は、「就是有日本人，可以跟他說日語。可以練習口說，這個是口說的勉強，因為我不太會說，所以需要練習口語。（日本人がいるから、彼らと日本語を話す。会話の練習ができる、これは会話の勉強です。わたしはあまり話せません。だから会話の練習が必要です。） {インタビュー2015/3/8} 」や「我不敢說日語，因為會很害羞，就是應該是很多學語言的一個要克服的點。（わたしは、恥ずかしくて日本語を話せない、これは言語を学習する多くの人が克服しなければならない点です。） {インタビュー2015/3/8} 」というように、自分の日本語を上達させるために日本語を話す必要があると考えていた。しかし、日本語回廊では、実際に日本人スタッフや学習者という他者と接する中で、学習のためという念头ではやっていけない。相手の意見を聞き、自分も日本語で発信していかなければならない。インタビューでは、日本語で話さなければならない状況について、「會議、うーん、會議の時、発表、昨日の状況を話すときも日本語で話す。日本人が多いです、あまり中国語がわからない。だから、日本語で話す必要があります。 {インタビュー2015/3/8} 」と語っている。また、「はずか

しい、話せない、困ります。日本語の自信がない。迴廊大部分講日文，加一點點中文，でも、日本語で話します。でも、通じないときはすぐ中国語で話したい。（はずかしい、話せない、困ります。日本語の自信がない。回廊のほとんどは日本語で、中国語を少し交ぜます。日本語ではなします。でも、通じないときはすぐ中国語ではなしたい） {インタビュー2015/6/29} 」というように、自分の日本語には自信がない中で、活動を進めていくために、日本語で話す努力をしていることがわかる。日本語を学習するために話すのではなく、相手や状況に合わせて日本語を話すことを経験し、 [日本語を使うことに対する意識の変化] が起きていると捉えることができる。

そして、日本語回廊の活動や会議で日本語を使っていく中で、日本語を話すことに対する自信が少しずつ芽生えているのではないかと思われる。林さんは、物静かな学生で普段からもあまり口数は多くない、さらに上記でも述べたように、日本語に対して自信がなく、話すことが苦手であるとも語っている。そんな彼女にとって大勢の前で日本語を話すことはとても勇気のいることである。インタビューでは、「日語迴廊有很多人，但是又不是認識的人，所以要在大家面前說日語也其實會害羞（日本語回廊は人が多い、でも知らない人たちです。だから、みんなの前で日本語を話すのは、とても恥ずかしい。） {インタビュー2015/3/8} 」と回廊という人が多く集まる場で、日本語を話すことが、とても恥ずかしいと語っている。恥ずかしいと感じながらも、「日語，就是日語迴廊的日語，跟大家用日文溝通，就不管是開會的時候跟討論，常用日文麻，然後在活動當中也是用日文。通常在學校上課沒有這麼多機會用日文，不管是日本人還是台灣人都會用日文溝通，跟上課不一樣，上課的話，跟同學之間不會用日文聊天。（日本語、日本語回廊の日本語、みんなと日本語でコミュニケーションをする。会議の時も討論の時も、よく日本語を使う、そして活動当日も日本語を使う。普通、学校で授業をする時、日本語で話すチャンスはそんなにない、日本人だろうと台湾人だろうと日本語でコミュニケーションする。授業とは違います、授業ではクラスメイト同士は日本語で話さない。） {インタビュー2015/6/29} 」というように、そうした環境を肯定的に捉えている。

そして、日本語回廊には、日本語学科の後輩だけでなく、他学科で日本語を第二外国語で履修している学生たちもやって来る。そこで、知り合い友達になることがすごくうれしいと感じている。また、その後輩たちから頼られることを経験している。インタビューでは、「うれしい。認識朋友，在那邊就是有些學妹，認識一些學妹和外系

的、然後在路上遇到可以打招呼，或是因為在那邊認識一個學妹，然後那時候她就是有一天傳訊息有需要幫忙，然後可以幫上忙，那時候還蠻開心的。我的日文有幫得上忙，我覺得蠻開心的。（うれしい。友達ができる、そこでは後輩もいて、他学科の後輩とも知り合える、そしてあったときに挨拶したり、後輩と知り合って、あるとき助けてほしいと連絡があった。そして、手伝うことができるとてもうれしかった。わたしの日本語が役にたつてうれしかった。）2015/12/2」と語った。後輩から日本語の学習上での問題やわからないことの相談を受け、自分の日本語というものが、誰かの訳にたったことで、喜びを感じている。自分の日本語に自信がないという彼女だが、誰かの役に立つと気づいた時、日本語に対し少し自信のできる一歩になったのではないだろうか。

## (2) [ことばにして相手に伝えることの重要性を知る]

このカテゴリーでは、上記の[日本語を話すことに対する認識の変化]とは違ったことばに対する考え方の変化が見られる。林さんは、日本語回廊に参加したばかりのころ、日本語を話すことに自信がなく、話すことが怖いと感じていた。また、一緒に活動を作っていくメンバーである森さんに対しても怖いというイメージを持っており、活動の内容について話し合うことが出来なかった。インタビューでは、「最初に相談ができない原因は森さんが怖かった。だから、相談、話すのが怖い、だから相談しなくてもわかると思った。{インタビュー2015/6/29}」と語っている。話し合いを行わずに、活動を進行していたために、森さんとの間に問題が発生した。林さんは、会議では森さんの意見を聞くこともなく、詳しい説明をしないで活動当日いきなり、「じゃあこれをお願い」と話を振っていたため、森さんは林さんに対し不満を感じ、活動に来なくなった。その時に筆者にメールで相談をしている。

<2015年4月5日20時 調査協力者森さんからの相談メール>

「小池さん、すみません。最近回廊に行かなくて。正直今のままではきついんです。何をしたいのか全然分かりませんし、林ちゃんは当日いきなりこれやっていいいます。なんか、うまく入っていけない感じで、このままでは続けられません。」

この相談メールを受け、筆者は林さんに森さんの状況と気持ちを伝えた。そのときの林さんとの相談を録音していたので、次に示す。

<2015年4月6日13時 筆者と調査協力者林さんとの話し合い>

小池:林さん、最近うまくいってますか？

林さん:ダメです。コースデザイン、ぜんぜんうまくいかない。

小池:なぜだかわかりますか？

林さん:・・・(沈黙)

小池:最近、森くんが会議にも活動にも来ませんが、どうしてですか？

林さん:体調悪いから。

小池:じゃあ、活動のときにちゃんと森くんと話し合っていますか？昨日森くんから「もう辞めたい」って相談を受けました。「何をしてるか全然わからない」って。林さんは自分のコースデザインの内容を森くんに話しましたか？

林さん:いいえ。森くん、分かっていると思ってました。

小池:ちゃんと自分が何をしようとしているのか、森くんと話し合ってみたらどうですか？一人ですらしようとするから活動がうまくいかないんですよ。

林さん:はい。

この話し合いの後、林さんは森さんに連絡を取り、話し合うことで一緒に活動を考えることができた。

森さんとの問題は、ここで解決したのだが、しばらくして同じメンバーであるが事務係として活動に参加していた別のメンバーである黄さん<sup>39</sup>との間に問題が起きた。黄さんは、事務係りを担っているが、自分のやりたいことがあり参加していた。はじめの活動内容を決める会議で、「旅行グループ」を発案したのも、黄さんであった。しかし、事務の仕事の忙しさからはじめは林さんたちと一緒に活動を作っていくことができなかった。そのため、途中から黄さんのやりたいこととは全く違うことをしている旅行グループに対して不満を抱きはじめ、2015年4月16日の会議において、ちょっとした口論となってしまった。

それまでは、林さんが中心となって活動をデザインし進行してきたのだが、それに対し、不満を持っていた黄さんは、自分のやりたいことを主張し、活動のテーマを変えようとした。しかし、ほかのメンバーによって阻止された。これは、一見すると、黄さんに問題があるように見えるのだが、林さんはインタビューにおいて次のように語った。「わたしがみんなと相談しなかったから、黄さんの件、黄さんがイヤになっ

<sup>39</sup> 日本語回廊の事務係として事務仕事をこなす一方、活動に対する興味もあり、初回の会議から積極的に意見を出していたが、事務の仕事のために、なかなか活動に入ることができなかった。



た。{インタビュー2015/6/29}」林さんは自分に責任があると感じている。会議では次のようなやりとりが行われた。

<会議記録 2015年4月16日>

小池:旅行グループはその後どう決まりましたか?

林さん:5月3日の前に、2回ありますから、5月3日の準備をして、5月3日のあとはみんなの実家を紹介する。そして、自分の故郷の観光スポットを紹介する。

山本さん:あれ?旅行はどうなったの?

黄さん:このテーマは私がかんがえました。わたしたちは、台湾の地図を作りたいですから、台湾をいくつかの地域に分けて、そしてみんなが自分の故郷を紹介する。例えば、台湾、台北、新竹、そして台湾のマップを作る。

小池:だから目標が違ってるんですね。どう思いますか?

林さん:もうわたしたちのコースデザインは決まってるから、変えない方がいいと思います。そして、台湾人が自分の故郷の話をして、日本人は何をしますか?

黄さん:一緒にできませんか?

王さん:なんの地図を作りたいの?

林さん:黄さんは、みんなが自分の故郷の話をして、各地の観光スポットを集める。

王さん:でも、それだと今まで旅行することが目的だったのに、突然変えるのはよくないと思う。

黄さん:じゃあ、私はやりたくない。

小池:もし、黄さんがやりたいならやってもいいと思うけど、これまでやってきた旅行グループを変えてやるのはよくないと思う。林さんたちはがんばってコースデザインしてきたわけだし。

黄さん:でも、今の旅行グループはぐちゃぐちゃです。このままやって意味がありますか?

林さん:え?うん・・・

曾さん:でも、学習者は旅行行行って楽しみで来てる。例えば料理も自分で料理を作るから来てる。

王さん:新しいグループを作ったら?

黄さん:今のグループを二つにわけると。日本人も二人いるから。

小池:そのことは日本人の二人に伝えましたか?

黄さん:わたしたちで分けたらいい。

林さん:それはダメです。ちゃんと聞かないと。

黄さん:じゃあ、自分で作ってやるかは自分で決めてもいいですか。

小池, 王さん:はい。

2015年4月16日の会議終了後に黄さんと呼び、話を聞いた。録音した会話の一部を提示する。

<黄さんとの相談記録 2015年4月16日>

旅行是我提出的題目，我當初就要做台灣的地圖。但，林學姐要去旅行，我們一直都在忙，後來才知道要去旅行。

我就不想做了。（旅行は私の出したテーマです。はじめ台湾の地図を作りたいって言いました。でも、林先輩は旅行に行っちゃいました。わたしたちはずっと忙しい、後で旅行に行っちゃりました。もうやりたくなくなった。）筆者訳

この後、黄さんは自分のグループを新しく作り、日本語学科の先生が黄さんのグループに入って手伝ってくれることで解決したが、林さんと黄さんとの間の亀裂がうまることがなかった。インタビューでは、「わかったことは、相談、相談が大切。話す

のが怖い、でもやっぱりちゃんと話さないといけないと分かった。{インタビュー2015年6月29日}」と述べている。このことから、林さんは、<ちゃんと話して相手に伝えることの重要性>を実感している。

また、面と向かって話をするのが怖い林さんは、第7期の回廊では山田さんと同じグループで活動に参加した。二人の時間が合わなかったこともあり、林さんと山田さんの話し合いは携帯電話のアプリ LINE を利用してメッセージによるやりとりが行われていた。顔を見て話すのと違い、どうやって相手に伝えたらいいのか考えるのにすごく時間がかかっている。そんな中で、相手の顔を見て討論の方が効率がいいことに気がついている。このように、メンバーとのコミュニケーションを取らなかったことによって問題が起こり、その問題の原因を考え、自分の考えを相手に伝えることによって、問題が解決し、後味の悪さを残しながらもその問題を乗り越えることを通して、[ことばにして相手に伝えることの重要性の実感] していることがわかる。

### (3) [スタッフとして仕事と向き合う態度を身につける]

このカテゴリーでは、日本語回廊の活動を作っていくなかで、仲間とのトラブルや活動がうまくいかないなどの問題にぶつかり、考え解決していくことで、自分が支援者であることを自覚していることがわかる。インタビューを行った際に、林さんに対し2015年3月に行っていたインタビューのデータを見せ、自分の変化について内省を行ってもらった。すると、「小池:前の分析では、こうでしたね。これを見て、変わりましたね。どういうところが変わりましたか? 林さん:これ(参加直後)は、学習者としてのイメージ。こっち(現在は)TAとしての。うーん、あのときは回廊のことがよく、回廊は2回くらい、だからまだTAの、TAの仕事と困難と、まだ知らなかった。{インタビュー2015/6/29}」と、自分のスタッフとしての仕事に対する態度に変化があったことを述べている。このような変化の原因について、「あのとき、回廊全部で、2回目か3回目の回廊で状況ははじめてあった。だから、回廊のテーマはお勧めの場所だけど、行きたい場所に話がずれてしまって、みんな話さない状況。そういう問題、はじめてあった。だから、どうしようって。{インタビュー2015/6/29}」と活動中で起きた問題と向き合い、不安に感じるのがきっかけだったという。その時の状況を次のように語っている。「回廊をする前に、今日はみんなの反応はどうか

な。ずっと不安でした。だから月曜日から水曜日はずっと不安です。{インタビュー2015/6/29}」

また、自分のスタッフとしての仕事に対しての取組み方を反省し、＜仕事と怖い気持ちを分けることの重要性＞を認識している。インタビューでは次のように語った。

「勉強したことは、仕事と自分の気持ちをちゃんと分けて。自分の気持ちを仕事の後ろに置く。今回は、はずかしい、怖いなどの自分の気持ちの、今回の問題の大きな原因は、いろんな気持ちで、やるべき事をやらない。{インタビュー2015/6/29}」

このように、林さんは活動がうまくいかなかったことで、その問題点を受け止め、自分の気持ちと仕事とをわけて、やるべきことをやる必要性に気づいている。このことは、林さんの〔スタッフとして仕事に向き合う態度を身につける〕きっかけになっていることがわかる。

#### (4) [さまざまな考え方を交流させる重要性]

このカテゴリーは、＜考え方や方法の違う人と一緒に仕事をする必要性の実感＞という概念から生成された。日本語回廊では、日本人留学生と日本語学科の学生が共に会議をしたり、作業をしたりする中で相手の考え方や作業への取組み方を見ることが出来る。情報技術が発達した時代、様々なメディアを通して、日本人は勤勉だとか細かいというイメージを持っているかもしれない。しかし、実際に共に作業をすることで、その異なる考え方や作業の仕方に触れ、自分や自分たちとどのように違う取組み方をしているのかを比較することができる。林さんは、日本人留学生と共に作業をする中で、相手の良いと思う点を観察して、次のように述べている。「一番明確なのが、山村さん。彼女のやり方は日本人とは関係ないかもしれない。たぶん本人の特質。彼女はある事をするのに、すごくパワーがある。会議のリズムをうまくコントロールして、それはすごくいいことだと思います。最後は、みんなの亂七八糟の（ぐちゃぐちゃな）意見をまとめて結論を出す。すごいです。{インタビュー2015/12/2}」これは、日本人だからという問題ではなく、個人の問題ではあるが、仲間の行動力や能力なるものを評価し、そういった人物が会議には欠かせないことに気づいている。そして、いろいろな考えを出し合い、討論することの重要性を感じている。インタビューでは、「会議で討論するとき、みんな他の班に対して意見を言って、よかった。

互いに話し合っ、だから意見をいう人とかまとめる人、いろんな考えや方法の人たちが活動に重要としました。 {インタビュー2015/12/2} 」と語った。

このように、林さんは他者との協働の中で、さまざまな考え方を話し合うことの重要性や、異なった能力や考え方をを持った人と、考え方を交流させる重要性を実感していることがわかった。

#### (5) [他者と協力して一つのことをする意義の実感]

このカテゴリーは、<活動の中で自分の役割を見つける>と<分担協力して作業することの重要性を実感>という概念から生成された。林さんは、第6期から参加している。第6期の頃は、自分が中心となりコースデザインを行い、メンバーとの問題を乗り越えながらやってきた。自分一人が活動の中心で、次に何をするかを考えていかないといけない立場であるときは、常に不安を抱えていた。第7期に入って、その状況は一変し、メンバー同士が分担協力して作業をするようになった。インタビューでは事前準備と分担協力する必要性について次のように述べている。「小池：活動で一番大切だと感じたことは何ですか。林さん：事前準備でしょう。毎回の会議は次の活動と成功のためにやります。だから、活動の事前準備が大切です。そして、分担協力すること。ある人は昼食を取りに行っ、ある人は先に会場に行っ、ブルーシートをしい、みんなが各自で準備をする。効率がいいです。そして、みんなで準備して始めるという感じがします。 {インタビュー2015/12/2} 」仲間と分担協力することで、作業の効率が上がっただけでなく、みんなで一つのことをするという団結意識にも繋がっている。また、仲間と共に意見を出し合、活動を広げていくことを通して、心のゆとりも生まれている。インタビューでは、「前（前学期）と違います。今は不安な感じがない。なぜなら、今私は活動当日に中心で司会をする人じゃないから。一番不安なのは、一人で真ん中にあること。今は一緒にやる人がいます。わたしは人の意見をまとめることができません。毎回活動の時にみんなが意見を出して、それをまとめる。前、私がまとめますが、できない。でも今はまとめることができる人がいる、だから、頼ることができる。気持ち楽です。 {インタビュー2015/12/2} 」と語った。そこでは、頼れる仲間が存在し、一緒に意見を出し合、まとめていくことを通して、

<分担協力して作業することの重要性>を実感している。そして、第6期の活動では林さんは活動での司会進行などを行い、毎週水曜日にどうすればいいか考えていた。

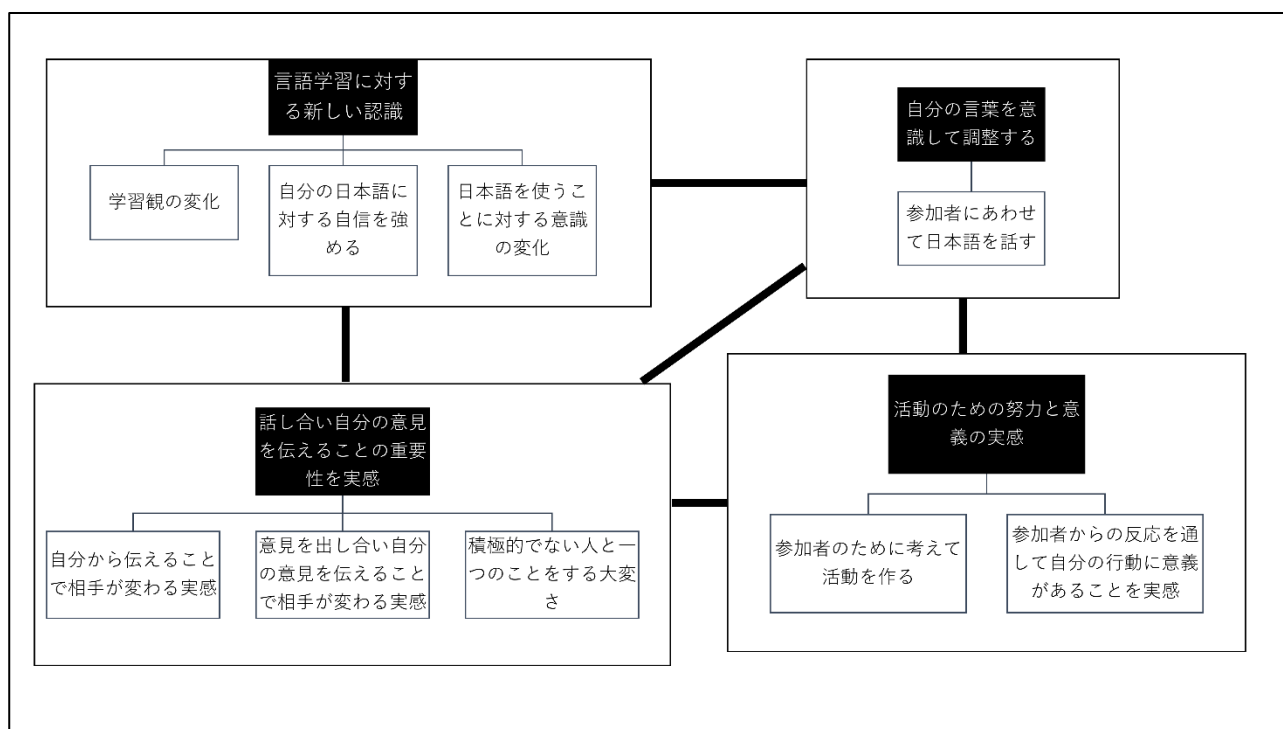
しかし、第7期では、同じグループの山田さんが中心的に活動を進め、そんな中で自分の役割がわからなくなっていた。インタビューでは、「自分が何をしたらいいかわからない時、日本語学科の（学習者）は、日本語がわかりますから、自分が何をしたらいいかわからなくなりました。最初は何していいかわからない時は、笑うだけです。何をしたらいいかわからない時は、山田さんからプレッシャーを感じました。彼女は何も言いませんが、プレッシャーを感じました。何か手伝わないといけない。だから、雰囲気を作ったり、後で翻訳が必要なときは翻訳をして、翻訳の必要ないときは、山田さんの紹介する内容はとても新鮮ですから、一緒に学習者に交じって質問をしたりとかしました。{インタビュー2015/12/2}」と語っている。自分の役割を見失い、笑うしかできない林さんに対して、は直接何をしてくれと要求することはなかったが、林さんは山田さんから無言のプレッシャーを感じ、自分でできることを探し、翻訳と一緒に話題に加わり、雰囲気を作るなどの補佐という役割を見つけていった。

このように、緩やかではあるものの仲間と協力して作業していく中で、自分の居場所を見つけ、仲間のいる安心感や分担することでの作業効率の良さを実感している。

## 6-1-2 王さんの場合

王さんは、日本語学科 3 年生であり、以前日本語回廊へは参加者として参加していた。その関係から、日本語回廊のスタッフになってくれた。また、林さんと同様、日本語学科の日本語学科の日語分科教学法という授業を履修していて、授業の実践も兼ねている。とても日本語が上手な学生で、授業の勉強をコツコツとする優等生タイプである。しかし、あまり自分の意見や考えを主張することはなく、いろいろ悩んでいることがあるなという印象だった。日本語回廊では、状況班のコースデザインから準備まで一生懸命取り組み、メンバーと衝突し、自己葛藤を経て最も大きな変化が見られた学生である。

インタビューの内容を、M-GTA で分析した結果、「学習観の変化」「自分の日本語に対する自信を強める」「日本語を使うことに対する意識の変化」「自分から伝えることで相手が変わる実感」「意見を出し合い自分の意見を伝えることで相手変わる実感」「積極的でない人と一つのことをする大変さ」「参加者にあわせて日本語を話す」「参加者のために考えて活動を作る」「参加者からの反応を通して自分の行動に意義があることを実感」の 9 個の概念が生成することができ、さらにその概念同士の関係性を検討し、カテゴリー化を行った。すると、4 つのカテゴリーができた。概念とカテゴリー間を図でまとめると、図 4 のような概念関連図が作成できた。生成された概念を白地に黒字で表し、そこからできたカテゴリーを黒地に白字で表す。



#### 図4 王さんの概念関連図

##### (1) 日本語学習に対する新しい認識

このカテゴリーは、①学習観の変化 ②日本語を使うことに対する意識の変化 ③自分の日本語に対する自信を強めるの3つの概念から生成された。

王さんは、東海大学の日本語系で日本語を勉強している学生である。彼女の日本語はとても上手で、授業などでも成績は上位であり、いわゆる優等生タイプの学生である。日本語回廊が始まったばかりの頃のインタビューから、寝る間も惜しんで日本語の勉強をしていることがわかる。「<王さん>：日本語一生懸命勉強してるから、寝不足。<小池>：それはいつもの事？ <王さん>：1年生の時（今は？）今はそんなに・・・、あ、今も日本語、なんか、日本語学科の宿題をするために寝不足。{2015/3/6}」や「今の生活が日本語中心だから、多分、うん。日本語中心の生活してるから、日本語が多分自分の母語より今は重要だと思う。{2015/3/6}」というように、日本語学習の重要性を位置づけている。毎日寝不足になるほど学習する理由については、「なんか私は大学まではずっとなんかあんまり勉強してない人だから（そうなんですか）多分頭がいいから、勉強してなかった。日本語学科に入ると、勉強する。なんかずっと勉強してる。なんか日本語学科のクラスメイトとか、みんなすごいから、勉強しなきゃいけない。{2015/3/6}」と他のクラスメイト達に負けないように日本語を勉強する必要があると考えている。こうした王さんの努力の対象となっている日本語学習であるが、どのような学習をしているかという質問に対して「どんな勉強・・・、主には日本語、先生が教えた事を勉強して、後はなんか自分の知りたい事の授業を聞いたり、調べたり、勉強してる。{2015/3/6}」と、授業の課題や先生が教えたことを学習することが中心である。

そして、日本語回廊のスタッフとして活動を企画し、運営していく中で、メンバーとの衝突や話し合い、参加者とのやり取りを通して、学習に対する意識に変化が見られた。王さんのそんな学習に対する考え方が変わってきたのは、第6期の4月頃であった。それまでは日本語回廊が終わると一目散に次の授業に行っていたが、途中からよく授業をサボるようになった。インタビューでは、「サボるということも学んだことです。今までは授業をサボらなかった。なんか、回廊でいろいろ話し合っ、授業はあんまり大事な事じゃないと思った。なんか、昔の絶対授業に行った方が良いという

考えは変わった。{インタビュー2015/6/29}」と自分の授業に対する考え方が大きく変わったと述べている。日本語回廊に参加する数ヶ月の間、王さんは自分との葛藤があった。それまでは、授業に休まず行くことが大切だと考えていたが、日本語回廊の準備や作業のために、度々遅刻するようになり、自分にとって何が重要か考え始めていた。2015年4月14日の日本語回廊では、活動が終わった後、いつまでも次の授業に行こうとしない王さんの姿があった。筆者は、不安に思い、「王さん、授業行かなくていいの？」と訪ねたところ、笑顔で「ふふ、サボった」と答えた。しかし、その笑顔は心の底から笑っているような感じではなく、何か複雑な笑顔だった。インタビューでは、その時のことを「授業をサボるのは罪悪感を感じていました。{インタビュー2015/6/29}」と語った。それまで自分が大切だと考えていたことに反することで罪悪感を感じていたのである。そして、自分にとって何が意味のあることかを考え、行動を変化させていった。その一つが、「授業をさぼる」ということである。インタビューでは、「回廊の後の授業は、授業の方式は、先生が動画を用意して、その動画を見て終わり、だから、意味がないと思う。なんか、自分のやりたいことや自分の趣味とか、面白いことを学びたいけど、聞くだけの授業は意味がないと思った。{インタビュー2015/6/29}」と語った。また、日本語回廊では、授業とは違い、スタッフである自分たちが考え、活動の流れを作っていかなければならない。そのためには、自分から他者に働きかける必要がある。他者に働きかけるということは、自分の考えを伝え、相手の話を聞く事である。王さんはインタビューで、「回廊でいろんな人と話して、自分をどう（考え）アピールするかが大事だと分かった。それは授業では学べない。うーん、自分の考えを相手に伝える力。そういう力が必要。{インタビュー2015/6/29}」と語った。

このように、王さんにとって学習するという事は、授業を受けて課題をこなしたり、それに準ずる知識を獲得したりすることにあつた。しかし、日本語回廊の中で、他者と意見をぶつけ合い、一つの活動を作っていくことを通して、自分の考えをどのように表現していけばよいか、そのためには授業ではなく、他者とのやり取りの中で学んで行く必要があるということを実感し、王さんの学習観が変化してきているものと考えられる。

一般的に言語を学習する上で、その目的となっているのが、「言語能力」を身につけることである。しかし、学習者はその「能力」というものが一体何なのか分からず漠然とした目標のために学習している。王さんは、能力について、「なんか他の人が



私を見てるときを感じるわたしの能力。なんか、例えば将来仕事の面接の時、わたしの能力はどんなもの、なんか、今の勉強は、なんか能力の準備みたいな。{インタビュー2015/3/6}」と語った。つまり、王さんは、他者から見られる能力を身につけるために日本語を学習しているということになる。また、日本語を話すということは、「日本人と日本語を話す機会、大事です。それは日本語や日本語の文化を知る。{インタビュー2015/3/6}」というように、自身の日本語や文化の学習のためであるという認識を持っていることが伺える。

そして、王さんは日本語回廊のスタッフとして、他者の学習を支援するという立場になり、参加者のために活動を企画していく中で、日本語を使うことに対する意識に変化が見られた。

まず、日本語回廊の勉強について、「勉強は大事だと思うから（日本語回廊の勉強？）うん、日本語回廊をやるためにいろいろな勉強をしなきゃいけない。{インタビュー2015/6/29}」や「参加者の日本語を話すために、いろいろ準備して、話します。{インタビュー2015/6/29}」というように、参加者の日本語を支援するために、勉強したり準備したりすると語った。これは、勉強というものは自分のためだけでなく、他者に向けられていることを意味している。そして、勉強の内容については、「なんか、勉強したことはたくさんある。うーん、話すこと。司会を……。回廊の時、状況班の司会。静かになった瞬間を、早く何かを話すという。どうすれば、（参加者との）話を繋げられるか、それを考える。{インタビュー2015/6/29}」と語った。

王さんは、「（参加者）がわからない時は、他の言葉を考えて、話すようにしました。でも、やっぱりわからなかったり、難しいです。本当に難しいです。わたしより日本語が上手な人と話すより、話せない人と話す、すごく勉強になります。{インタビュー2015/12/2}」というように、相手の反応や理解を考えて日本語を話すことを経験している。このことから、自分の能力向上や知識の獲得ために日本語を話すという意識から、相手のことを考え、日本語を使っていくという意識が生まれていると捉えることができる。

そして、参加者のために考え準備して日本語を実践していく中で、参加者からの反応を得ている。インタビューでは、「いろいろ準備して、学習者（参加者）のおもしろいや勉強になったということを知ると、それがうれしい。{インタビュー2015/6/29}」や「回廊をやってよかった。日本語がうまくなったと思うけど、具体的

にはわからない。でも、日本語でなにかしたこと、日本語の能力じゃない。これは、テストとは違う。{インタビュー2015/6/29}」と語った。参加者のために起こした自分の行動に意義があるということを実感しているのである。さらに、活動に参加してきた台湾人の学生や、日本人留学生から日本人と間違えられることで、自分の日本語に対する自信を強めている。インタビューでは、「うれしい、ふん、フフフ。回廊でなんか来た人に日本人に間違えられたとき、はすごくうれしかった。最後に、日本人ですか?って聞かれて、うれしかった。わたしは、言語と見た目で日本人になりたいから。{インタビュー2015/12/2} と、自分の日本語が日本人に間違われるくらい上手なんだという自信に繋がっている。

## (2) [話し合い自分の意見を伝えることの重要性を実感]

このカテゴリーは、<積極的でない人と一つのことをする大変さ><自分から伝えることで相手が変わる実感>の二つの概念から生成された。日本語回廊では、もともとクラスメイトだった学生や、初めて知り合った学生と共に協力して企画・運営を行う。普段は一緒にいる友達でも、共に作業をしてみると、うまく折り合いがつかないこともある。王さんは自分のグループのメンバーとうまくコミュニケーションが取れず、協力し合って活動を運営することができなかった。その中で、<積極的でない人と一つのことをする大変さ>を実感している。インタビューでは、「いつもメンバーと連絡が取れない、だから一人で準備する。報告も作業も全部ひとりです。楊さんはいつも一緒だけど、一緒にやってる感じがしない。ただ私についてるだけ。だから本当に大変、嫌。{インタビュー2015/6/29}」と一人で準備をしていることに対して不満を語っている。

王さんは第6期日本語回廊において、状況グループに参加していた。状況グループは王さん本人がやりたいこととして最初の会議で提案したものである。状況グループのメンバーは、楊さんと山田さんである。第6期が始まったばかりのころ、楊さんと王さんはお互い連絡を取り合おうとしなかった。そのため、いつも作業や報告を一人で行っていたという。そして、いつも一人で作業していることを不満に感じながら準備をしていた。そこで筆者は2015年4月26日に王さんと話し合いを行った。その時の話し合いを録音し文字化した一部を提示する。

小池：最近悩んでるみただけど、大丈夫？

王さん：うーん、山田さんと連絡が取れない。楊さんはよくわからない。

小池：こっちから連絡してみましたか？

王さん：したけど、あんまりない。

小池：でも、一人で作業は大変でしょう。一度ちゃんと話し合った方がいいと思います。

山田さんも、状況がわかっていないのかも知れません。

王さん：うん・・・。

(以下、楊さんとの関係についての相談につき省略)

その後、王さんは山田さんに自分の考えを伝え、相談をしている。この相談についてはインタビューでも語られていた。そして、山田さんが一緒にやってくれるようになったと、メンバーの行動の変化を述べている。王さんは第7期のインタビューの際に、その時の状況を思い出して次のように語った。「あのときは、みんなでやりたいけど、一緒にやってくれなかった。だから自分でするしかなかった。わたしも自分の時間なんか、これを今しないと、これから時間がないから、自分でやってた。でも、それは、わたしが伝えなかったから。今は言えます。〔インタビュー2015/12/2〕このことから、王さんは初めは自分一人で作業する方が効率が良いという考えを持っていることがうかがえる。連絡して話し合おうとしなかった自分に問題があることに気づき、「今は言える」と以前の自分とは違うことを評価している。

そして、第7期の回廊では、第6期と比べて会議で出される意見の量のはるかに多くなった。そのため、以前は自分一人で決めていたことが、みんなで話し合っただけで決めることになり、戸惑いを感じている。会議では多くの意見が出され、そこからどうしていくかを話し合わなければならない。そのため、会議には多くの時間が費やされ、王さんは効率の悪さを感じる。しかし、実際に問題点や反省点を話し合い、問題を解決してゆくことを通して、いろいろな人の視点から問題点を探して話し合い解決していくことの重要性に気づいている。また、たくさんの意見が出される中で、必ずしも自分の意見が尊重されるとは限らないことも実感している。インタビューでは「会議の時、意見を言ったけど、他の人の意見の方が強い、それである人の意見は無視された。人の意見も聞いて、自分もちゃんと言わないといけない。」と、相手の意見を聞き、自分の意見をちゃんと言ふことの重要性について語った。このように、王さんは、自分が仲間に対してきちんと自分の気持ちを言えなかったことを認め、[話し合い自分の意見を伝えることの重要性を実感]していることがわかった。

### (3) [参加者のための努力に意義を感じる]

このカテゴリーは、＜参加者のために考えて活動を作る＞＜参加者の反応を通して自分の行動に意義があることを実感＞の2つの概念から生成された。＜参加者のために考えて活動を作る＞という概念では、インタビューで「なんか、日本語回廊をやることは、すごく頭のエクササイズになる。色んな事を考えなきゃいけないし、自分でなんか話し合いたいことを自分で準備して、教えたいことを自分で何回も考えなきゃいけないから、疲れる。{インタビュー2015/6/29}」と語っているように、参加者に対して何を伝えればよいのか、活動の内容を考えたり準備をすることが、頭のエクササイズになると感じている。しかし、このような苦勞をするのは、自分のためでもあるが、参加者のためであると考えている。インタビューでは、「今までこんなことはなかった。でも、ちゃんと意味があることを考えることがいいと思う。小池：意味があることというのは？ 王さん：自分だけじゃない、学習者（参加者）のことを考える。{インタビュー2015/6/29}」と語っている。自分のためだけでなく、参加者のために活動を考え、準備をすることは、これまでに経験したことのないことだが、実際に参加者のために考え行動することで、そのことに意味があると感じている。そして、自分の努力の結果として、参加者からの反応がある。インタビューでは、「いろいろ準備して、学習者（参加者）のおもしろいや勉強になったということを知ると、うれしいです。{インタビュー2015/6/29}」や「回廊をやってよかった。日本語がうまくなったと思うけど、具体的にはわからない。でも、日本語でなにかしたこと、日本語の能力じゃない。これは、テストとは違う。{インタビュー2015/6/29}」と語った。参加者のために起こした自分の行動に意義があるということを実感しているのである。ここで、筆者が重要だと考えるのが、インタビューの中での「日本語でなにかしたこと、日本語の能力じゃない」という語りである。日本語回廊に参加したばかりの頃に行ったインタビューでは、王さんは個人の能力を如何に向上させるかということに重視していた。日本語回廊を通し、日本語を使って他者のために行動することで、自分の行動そのものが評価されることを経験しているのである。

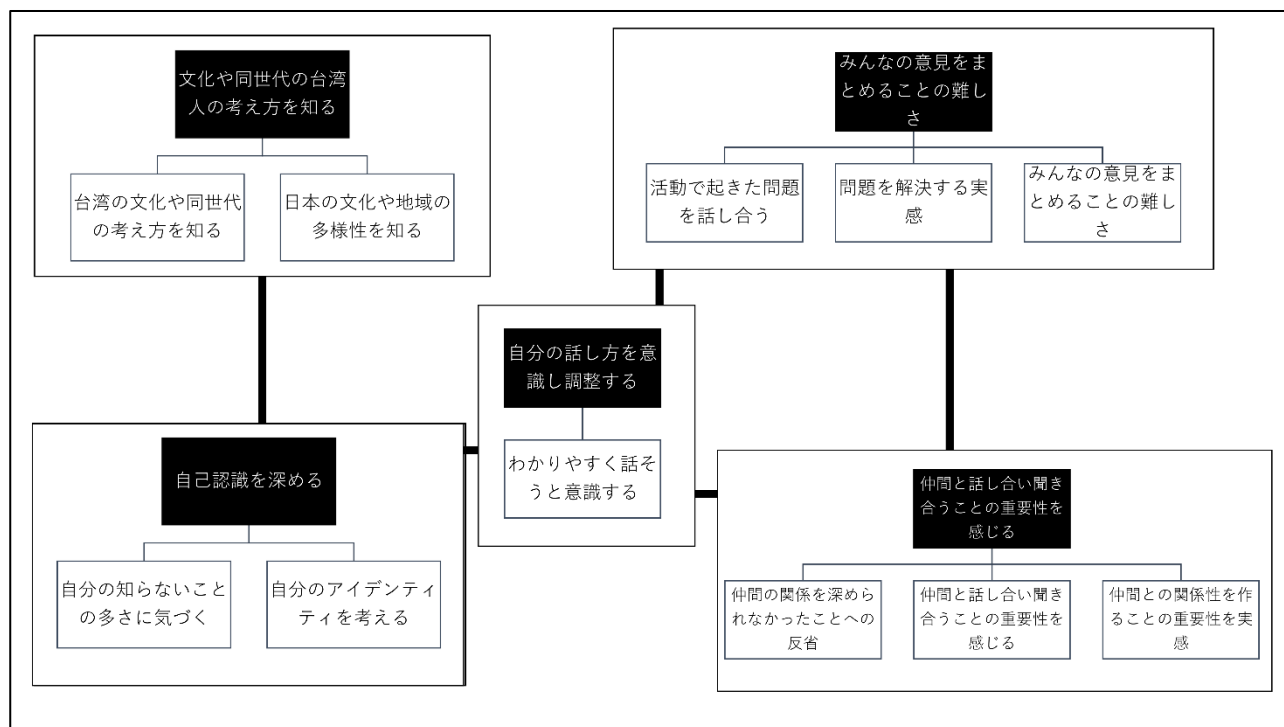
#### (4) [自分の言葉を意識して調整する]

このカテゴリーは、＜参加者に合わせて日本語を話す＞という概念から生成された。王さんは日本語を流暢に話すことができる。しかし、日本語回廊に参加してくる学生の多くは、日本語学習をはじめたばかりの1年生や2年生が大半である。そのため、参加者と日本語で話す場合、自分の日本語を調整する必要がある。王さんは、日本語がわからない参加者に対して翻訳を行う一方で、参加者のわかる言葉に置き換えて話していた。しかし、よく考えて話したつもりでも、通じないこともあり、わかりやすい言葉に置き換えて話すことの難しさを感じている。インタビューでは、「相手（参加者）がわからない時は、他の言葉を考えて、話すようにしました。でも、やっぱりわからなかったり、難しいです。本当に難しいです。わたしより日本語が上手な人と話すより、話せない人と話す、すごく勉強になります。{インタビュー2015年12月2日}」と語った。自分より日本語が上手な人と話す場合、自分が何を言っても相手はそのほとんどを理解し、返答してくれるだろう。しかし、日本語があまりできない人に対して日本語で説明するためには、如何にわかりやすく、そして相手の反応を見ながら話す必要がある。そのため、どうすれば相手に伝わるのか、試行錯誤する中で、自分の言葉で話す力を洗練しているのである。

### 6-1-3 山田さんの場合

山田さんは、2015年1月より日本からやってきた交換留学生である。2月初頭に日本人スタッフを探す際、TAの面接を通じて日本語回廊のスタッフになった学生である。はじめは、メンバーともあまり連絡を取らず、何をやっているのかわからない中で周りに流されるように参加していたが、第6期の後半から徐々に積極的に参加するようになり、第7期の回廊ではメンバーの中心的存在になって、活動を引っ張っていった。

山田さんへのインタビューは、第6期が終了した直後と、第7期が終了した直後に行った。インタビューデータをM-GTAで分析した結果、「台湾の文化や同世代の考え方を知る」「日本の文化や地域の多様性を知る」「自分の知らないことの多さに気づく」「自分のアイデンティティを考える」「わかりやすく話そうと意識する」「活動で起きた問題を話し合う」「問題を解決する実感」「みんなの意見をまとめることの難しさ」「仲間の関係を深められなかったことへの反省」「仲間と話し合い聞き合うことの重要性を感じる」「仲間との関係性を作ることの重要英を実感」の11個の概念が生成でき、さらに概念関係を検討しカテゴリー化を行った。すると、4つのカテゴリーができた。概念とカテゴリー間を図でまとめると、図4のような概念関連図が作成できた。生成された概念を白地に黒字で表し、そこからできたカテゴリーを黒地に白字で表す。



## 図5 山田さんの概念関連図

### (1) [文化や考え方の多様性を知る]

このカテゴリーは「台湾の文化や同世代の台湾人の考え方を知る」<「日本の文化や地域の多様性を知る」>の概念から生成された。日本語回廊では、学生がスタッフとして、同世代の日本語学習者たちの学習支援活動を企画運営している。そのため、スタッフと学習者はほぼ同年代である。日本語回廊の主な目的は、日本語を教えることではなく、交流することである。交流する中で自分の考えや言いたいことを学習言語で話すことによって、言語だけでなく文化や考え方の交流をすることができる。

山田さんは、スタッフとして話題を考え提供し、学習者との間のファシリテーターをする中で、学習者である同世代の台湾人の考え方を知ることができたという。インタビューでは、「私が日本語回廊で一番だと思ったのが、台湾人と日本語で交流する場所。日本のことを話すことで、日本のことも新しい発見ができたっていう、日本のことを教えていうのもあるんですけど、自分自身が学ぶことが多かったですね。

{インタビュー2015/7/4}」と語った。回廊では、日本のことを話題として話す中で、山田さんは日本の文化を教えるという感覚を持っていたが、他者に紹介することで、それまで知らなかった新しい発見があったのである。また、活動の中で台湾と日本を比較することを通して、台湾の文化を学ぶことができたという。インタビューでは、「台湾と沖縄のことを話してて、たくさん似ているところがありました。食べ物とか、風習とか。テレビとかでも台湾や沖縄の文化を紹介してますが、実際に話し合うと、もっともっと知りたくなりました。{インタビュー2015/7/4}」と語った。実際に学習者と身の回りのことをテーマとして話し合う中で、自分の故郷である沖縄と台湾の似ている点に気がつき、台湾の文化に対して、もっと知りたいと考えるようになったのである。そして、台湾と日本という文化背景の異なった者同士が話し合うことで、異なった視点や考え方を知ることができる。山田さんは、「文化を知るのも、例えば、クリスマスは日本では恋人のイメージですよとか、なんででしょうか。インターネットで調べるとか本で調べるのとは違って、その土地の人たちがどんな風に考えているのか、若い人は特にどう考えているのか、テーマを通して理解できたのはよかったですね。{インタビュー2015/7/4}」と、実際にテーマに基づいた

話し合いを通して、台湾の同世代の学生がその話題に対してどのような考え方を持っているのかを知ることができたと述べている。

もう一つの概念が「日本の文化や地域の多様性を知る」である。日本語回廊では、日本と台湾に関連するテーマに基づいて活動を行っている。そのため、スタッフ達は話題を提供するために、話題と決めた事柄に関してある程度の情報を持っていないといけない。山田さんは、テーマに基づいて情報を調べることを通して、日本の文化や地域の多様性を発見したという。インタビューでは、「日本の文化、イベント毎の話、例えば日本では何月にこういったイベントがあります。台湾ではこういったイベントがありますよとか、そのような紹介。紹介するためには、自分で調べなきゃいけないと、そこでいろいろ調べました。わからないことがたくさんあるので、調べると、日本の知らなかった文化とか、わかりましたね。{インタビュー2015/7/4}」と語った。学習者に話題を振ったり、紹介したりするために調べ、その過程でそれまで知らなかった日本の多様性の発見があったのである。このように、学習を支援するということは、支援する側からされる側への一方通行的な関係ではなく、その中で知識はやり取りされ、再構成されているのである。

## (2) [自己の認識を深める]

このカテゴリーは、「自分の知らないことの多さを知る」「自分のアイデンティティを考える」という概念から生成された。まず「自分の知らないことの多さを知る」では、「文化や考え方の多様性を知る」と関係している。学習者に話題を提供するために、テーマに関する情報を調べる中で、それまで自分の知らなかったことを知ると同時に、「自分の知らないことの多さを知る」ことができるのである。山田さんはインタビューにおいて、「日本語回廊では、日本と台湾の比較をしました。こういう時どうしますかっていう形で。でも、なかなか知らないことが多くて、例えば、部屋を探すときどうしますかって聞かれて、やったことがなかったので、敷金礼金とか分からなかったのが、困りましたね。あと、日本について、いわゆる日本の文化って言われるものが、沖縄とは違って、知らないものとか、各地域によって違うと思うんですけど、なんでこんなに知識がないのかなって、もっと勉強しておけばよかったって思いました。{インタビュー2015/7/4}」と語った。そして、日本や沖縄、台湾のこ



とを調べ話し合うことを通して＜自分のアイデンティティを考える＞という。インタビューでは、「自分自身を見直し、日本について考える。回廊の中で話したり、準備したりする時に、こういうのがあったんだっていう。沖縄の場合は、福建からの文化が入ってる関係で台湾と似てるっていうので、でも実は日本にも同じようなルーツの文化があるっていうことを知ることができたので、そこから自分自身のアイデンティティということを考えさせられました。{インタビュー2015/7/4}」と語った。山田さんは、異なる他者、異なる文化と接触し、話し合うことによって、「自分が何者なのか」考えるきっかけとなっていることがわかった。

### (3) [仲間と話し合える関係を構築することの重要性]

山田さんは、第6期の日本語回廊では王さんや楊さんと共に状況グループのメンバーとして参加していた。しかし、はじめは仲間と連絡を取り合うことをしなかったために、何をしていたかわからないまま活動に参加していた。また、同じメンバーである王さんと楊さんも積極的に山田さんに対して連絡をとっていなかったため、山田さんはどうしていいかわからない状況であった。しかし、山田さん本人も、二人の仲間が慌てて準備をしているのを見ているにも関わらず、自分から手伝おうとはしなかった。インタビューでは、「二人の仲間が結構あわててやっていたので、声をかければ良かったんですけど、どうしたらいいんだろうって思って、それで終わっていたので、後悔があります。」と自分から話しかけていかなかったことについて反省していると語った。

しかし、第7期の日本語回廊では、第6期の反省から、自ら積極的に活動に参加し、メンバーとの連絡も頻繁に取るようになった。第6期の会議記録と第7期の会議記録の一部を比較すると、山田さんの会議への参加の仕方に大きな変化があることがわかる。＜会議記録 2015年5月7日 12:00-13:10＞は、第6期の後半に入ってからのものである。山田さんは活動に参加したばかりの頃、メンバーと連絡を取らず何をすればいいかわからない状況であった。王さんからの働きかけにより、話し合いの場を設けて、一緒に活動に参加するようになった時の記録である。第6期の会議では各班がそれぞれの報告を行い、そこで出された問題について話し合いが行われていた。ここで取り上げるのは一部である。王さんは楊さんに発話を促すが、楊さんは記録がない

からと王さんに報告をするように言い、仕方なく王さんが報告を行っている。その様子を見ながら、山田さんは少しずつ言葉を挟んでいくようなやり取りである。一方で、第7期2015年9月15日の会議記録では、山田さんは第6期の経験を踏まえて、どんな活動にしていくか積極的に意見を出していることがわかる。

<会議記録 2015年5月7日>

王さん：ほわ？ 状況から。

楊さん：我沒有寫，你來吧。

王さん：昨日は意外と順調でした。昨日のテーマは、病気したらどうする？そして、いくつの小さい紙に病気と怪我を書いて

山田さん：みんなに引いてもらって

王さん：そして、怪我とか病気をしたらどうするかを言う。意外といろんな感想や仕方を、勉強になりました。昨日は相変わらずおじさんとおばさんたち、あとは物理学科の男の子、2週間ぶりに来ました。もう一人は調子悪いつて。

山田さん：昨日は7人でした。

王さん：そして、来週のテーマも決めました。来週は、新暦と旧暦の行事。

<会議記録 2015年9月15日>

小池：今学期のアイデアはありますか？

山田さん：月ごとのイベントとかはどうかな？前、ちょうど作ってた、もってた人がいて。

林さん：うん。

山田さん：もう持ってますって、パワーポイントも用意してるってコがいて。

林さん：うん。

山田さん：これやりたいですって来てる人もいます。それに、前の人も結構大人の方が多かったのです。昔はこうだったんですよって、イベントの方が割と盛り上がりやすかったなっていう印象があったので、日本のお祭りとか行ったことあるんですけど、どうしてこういうものがあるんですかって。イベント事はみんな楽しそうにしてたので。

山村さん：え、イベントっていうのは毎回違うんですか？どういうことがよくわからなくて。

山田さん：あのう、行事ですね。月の行事、例えば中秋節とか。

山村さん：あー、祭事ってことですか？

山田さん：祭事、今はどうやって過ごしてるかとか、10月はハロウィンとかもありますし、12月はクリスマスどういう風に過ごしますか。これが結構やりやすいテーマなのかなって思います。特に、学生が多いですので、12月の前に東海大学のクリスマスはどうやってますかとか。

林さん：うん。

山田さん：日本人がいたら聞きたいと思うんですよ、そういうの。

このように、仲間と連絡を取り合い会議で相談し合って活動を進めていくことで、メンバーのまとまりを感じ、スタッフ同士のコミュニケーションと活動を準備する際の効率が全然違うことを実感している。

しかし一方で、仲間と連絡を取るようになったものの、繋がりやの弱さを感じている。お互いにもっと連絡を取り合うことで、さらに仲間とのまとまりが強まったのではないかと、反省をしている。仲間と連絡を取り合わないことで問題が起き、話し合い自分の問題に気がつき、次へと行動していくことで、仲間との関係の改善と活動との影響に気づき、「仲間と話し合える関係を構築することの重要性」を実感していることが明らかとなった。

#### (4) [みんなの意見をまとめる難しさと問題解決の実感]

このカテゴリーは、＜活動で起きた問題を話し合う＞＜意見をまとめられなかった反省＞＜問題を解決する実感＞の3つの概念から生成された。日本語回廊の会議では、グループ毎の問題点を共有し合い、話し合っていた。しかし、第6期の活動では問題点の共有は行われていたが、そこで解決に向けての話し合いには至らず、こういう問題が起きているという現状を把握するだけに留まっていた。そのため、山田さんは、各グループが報告する中で、活動でどのような問題が起きるのかを聞いて勉強したという。そして、第7期の日本語回廊の会議においては、問題を共有するだけでなく、＜活動で起きた問題を話し合う＞ことで、その解決策が討論された。一方で、たくさん意見が出てくることで、その意見をまとめ切れず、他の人の意見を聞けずに話が流れてしまうことも多々あった。これは、周さんの分析で具体例として挙がっていた会議の例である。その会議において、周さんは意見を出したが、山田さんから別の意見が出た。そして最終的には決まらずに山田さんの出した意見で進むことになってしまっていた。インタビューでは、「告知が遅くて一方的に教えるしかないってなったり、グループの分け方、このやり方だと良くないんじゃないかってなった時に、じゃあどうするかっていうので、あんまりまとまらなかったっていうか、そこが一番の反省点なんですけど、意見が出たのに、聞けなかったっていう。{インタビュー2015/12/23}」と語った。このように話し合いではなかなか意見がまとまらず、意見をまとめることの難しさを実感している。一方で、話し合われた問題の中で、小さい問題などはすぐに活動に取り入れ、効果があることがわかり、話し合っ＜問題を解決する実感＞も得ていることがわかった。インタビューでは、「みんなで話し合っ、うーん、できなかつたところもありますけど、小さい問題は結構解決できていた

と思います。例えば、最初に学習者の名前を聞いて、ホワイトボードに書いておいて、話を振る時に名前を呼ぶとか、沈黙になりそうなときに、どうするか、会議で話し合っ、例えば質問の仕方を「わたしは、こう思います。～さんはどう思いますか」とか、活動の時に試して、効果があったかなって思います。{インタビュー2015/12/23}」と語った。このように、活動で起きた問題を話し合う中で、意見をまとめられなかったり、問題を解決したりして、複数の人と一緒に物事を話し合い解決していく難しさと、解決していく実感を得ているのである

#### (5) 「学習者の反応を通した達成感」

このカテゴリーは、＜学習者と活動のための努力＞＜学習者の反応による喜びと反省＞＜学習者と話を繋げられた実感＞の3つの概念から生成された。日本語回廊のスタッフは、活動をよりよいものとするために、日々努力をする。学習者のために、活動を話し合い、どうすれば学習者が楽しめ、発話を引き出すことができるのかを、常に考えて活動を運営している。山田さんは、第7期日本語回廊では、活動を話し合う上で中心的な役割を担っていた。活動を作っていく上で、会議は不可欠である。インタビューでは「会議は、回廊を進めていく上で絶対必要で、今回の回廊では、台湾と日本の交流を回廊でする、それをいいものにするためには、どうしたらいいかってことを会議で決めていきましたね。自分にとってもですけど、どっちかって言ったら、相手（学習者）が楽しめるようになっていう意識で会議をしていましたね。楽しくないとみんな（学習者）は来ないですから。{インタビュー2015/12/23}」と語った。こうして活動を運営していく中で、自分たちの作った活動を評価する方法は、学習者の反応に頼るものである。

山田さんは、自分の好きな沖縄を一生懸命調べ、紹介することで、学習者からうれしい反応があったり、同じ学習者が何度も来るようになるのを見て、自分たちの作った活動を楽しんでくれていることがわかり、逆に学習者が来なくなると、何の原因で来なくなったのか、考えるきっかけとしている。インタビューでは「学習者から反応があった時、やっぱりわたしは沖縄が大好きなので、紹介したときに、沖縄と台湾とこういうところが似てるねっていった時に、「えーそうなんだ！って驚いて関心して

くれたときは、よっしゃ！って思いました。そんな反応があったときがうれしかったですね。{インタビュー2015/12/23}」と語った。

そして、学習者との間に沈黙が起きる問題も学習者の反応を深い関係がある。一つの話題が途切れ、学習者との間に沈黙が起きた時、はじめはその沈黙をどうしていいかわからなかったが、仲間のやり方を観察したり、考えて試すことで、相手の反応が変わり、話をうまく繋げられたという実感につながっているのである。インタビューでは、「これは言語の問題だけじゃないんですけど、学習者と話してて、しーんってなってしまった時に、どのように話を回したらいいか。最初はわからなかったですね。でも、小池さんが、わたしたちのグループでシーンってなった時に、入ってきてパッと別の話の話題を振ってくれたので、助かりました。話しのつなげ方ですね。いろいろ考えて、「はい」か「いいえ」で答える質問をするんじゃないかと、わたしはこう思いますっていう質問の仕方をするとか、聞き方とかそういうのを学んでうまくなったと思います。{インタビュー2015/12/23}」と語った。活動を企画し運営すること、そして、活動内でファシリテーターとして学習者たちの話を繋いでいく試行錯誤をした結果として学習者の反応があり、それによって自分達の活動や、対応の仕方を評価し、改善しているのである。

## (6) [自分の話し方を意識して調整する]

このカテゴリーは、<わかりやすく話そうと意識する>という1つの概念がそのままカテゴリーとなった。日本語回廊の学習者は日本語が流暢な者もいれば、そうでない者もいる。そのため、いつも日本人同士で話しているスピードや言葉遣いで話すと聞き取れないことがある。山田さんは学習者に合わせて若者言葉を入れないように意識したり、相手の反応を見ながらゆっくり話したりすることで自分の言葉を調整している。インタビューでは、「やっぱり言葉の問題。学習者と話すときは、すこし優しい日本語を意識して話してましたけど、私は割とできるだけ、若者言葉なんかを入れないで話すようにしてました。学習者との間は、通じていないときは、林さんや周さんが説明してくれたので、そこで「あ〜こうやって言い換えるんだ」ってことも勉強になりました。{インタビュー2015/12/23}」と語った。山田さんの母語は日本語であるが、どうやって簡潔に説明すればよいか分からず、日本語非母語話者である台湾人スタッフの説明の仕方を見て、簡単な日本語でどうやって説明すればよいかを学ん

でいる。一般的に、教育において日本語と言えば、日本語母語話者が絶対的な存在であって、日本語学習者は日本語母語話者から学ぶものであると見なされる傾向にあるが、ここでは逆に日本語母語話者が日本語学習者であるはずの台湾人スタッフから日本語を学んでいることがわかった。

## 6-1-4 宮迫さんの場合

宮迫さんは、2015年1月から東海大学に留学している学生である。日本の大学では英語を専攻し、台湾留学の機会があり東海大学へやってきた。そのため、中国語はほとんど話すことができず、華語センターで中国語を1から勉強している。第6期日本語回廊が開始した2週目から参加したため、はじめのうちは何をして良いか分かっていなかったが、第7期日本語回廊では、6期の経験を生かして積極的に意見するなど、日本語回廊の舵取りをしてくれた学生である。

宮迫さんに対するインタビューは、第6期活動終了後と第7期活動終了後に行った。インタビューデータを M-GTA で分析したところ、「会話の中から新しい言葉を知る」「中国語を聞くことに慣れる」「説明するために中国語を調べる」「考え方を交流させて中国語を学習する」「相手に合わせて自分の言葉を調整する」「仲間と話し合っ活動を作る努力」「自分の意見が活動のプラスになる実感」「意見を言い合っ活動運営の必要性」「参加者の反応による喜びと反省」「台湾人スタッフの視点を取り入れなかった反省」「活動を作りあげる充実感」「参加者の視点で見ることの重要性を知る」の12個の概念を生成することができ、概念同士の関係を検討し、4つのカテゴリーにまとめた。生成された概念を白地に黒字で表し、そこからできたカテゴリーを黒地に白字で表す。

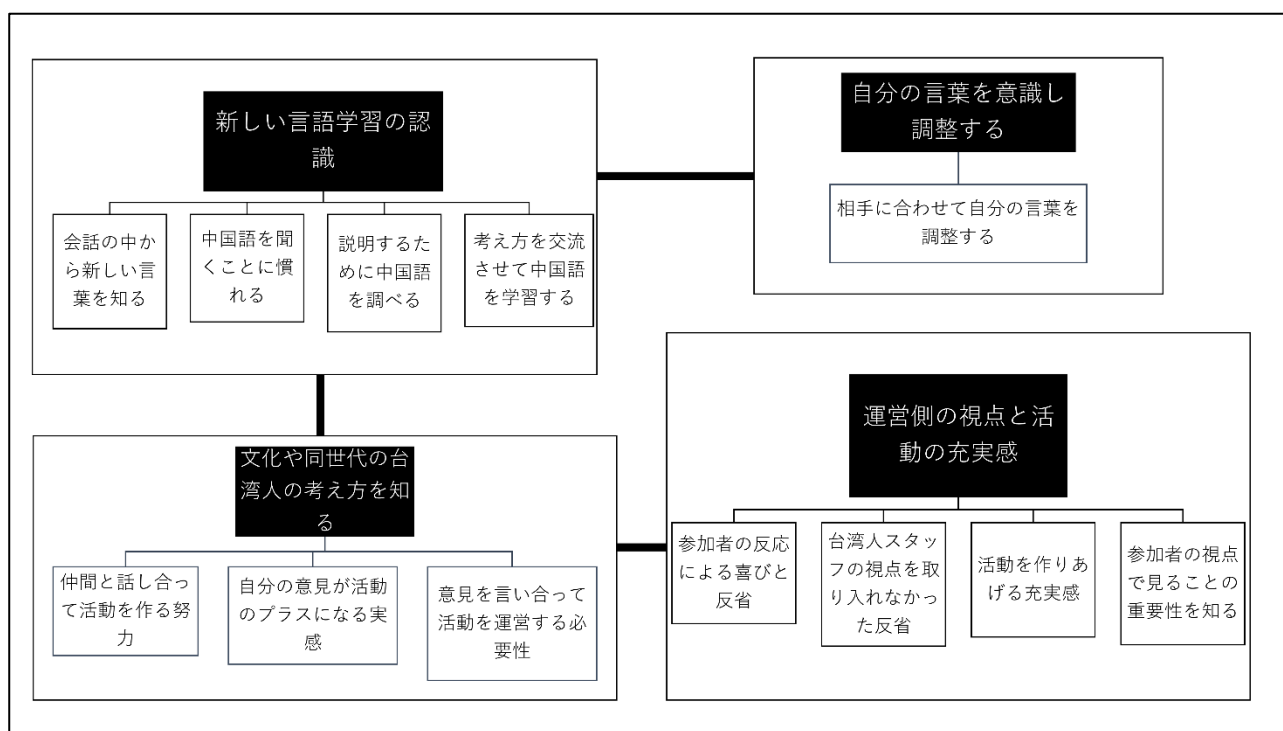


図6 宮迫さんの概念関連図

## (1) [新しい言語学習の認識]

このカテゴリーでは、宮迫さんが[新しい言語学習の認識]を得ていることがわかる。宮迫さんは日本の大学では英語を専攻しており、中国語は第二外国語で少し学習したことがあるだけで、日本語回廊に参加したばかりの頃は、ほとんど話すことができない状態であった。日本語回廊に参加することで、会議や活動では中国語が飛び交う環境に身を置くことになる。宮迫さんはスタッフであるため、そこにいるだけではなく、自分から学習者に対して言葉を発し、働きかけなければならない。会話は基本的に日本語であるが、学習者同士は中国語で話したり、わからない日本語は中国語で質問したりする。そのため、活動の中で中国語が飛び交うという状況が多々ある。言葉を知る概念として浮かび上がったのが、〈会話の中から新しい言葉を知る〉である。インタビューでは、「回廊の場所に行けば、中国語が勉強できる。これは、私自身の機会なんですけど、回廊のみんなと話してたら、私の知らない単語が次々に出てくるんで、これは何、これは何って聞いて、それを勉強して、それを聞くから逆に日本語を教えることもできます。お互いに勉強し合うことができますね。{インタビュー2015/7/2}」と語った。中国語を勉強するために話すのではなく、会話の中でお互いの言葉を確認しながら、新しい言葉を学習していることがわかる。また、こうした中国語の学習方法が授業とは全く異なることを示唆し、「普通の学生が使ってる言葉とか、授業では勉強できないので、例えば旅行班だったら、こういう地名の名前とか、その話題でしか使わない言葉とかは、その話題にならないと使わないので、そういうのが知れていいですね。{インタビュー2015/7/2}」と、その状況や話題の中で中国語を学ぶことを経験している。

そして、〈会議の中国語を聞くことに慣れる〉である。日本語回廊では毎週会議を行っている。台湾人スタッフと共に活動を運営しているため、日本語だけでなく中国語でのやり取りも頻繁に行われている。宮迫さんは、活動に参加し始めたころは全くと言っていいほど中国語ができなかった。しかし、会議に参加するということは、中国語を聞かなければその状況を把握することができない。インタビューでは、「最初の頃は、会議で中国語が出ると、何を話してるんやか全然わからなかったんですけど、今学期は、結構聞いてわかりました。わたしらで運営するってのも、状況はわかっていますし、その中での中国語に慣れましたね。{インタビュー2015/7/2}」と語っている。会議では活動運営や問題について話し合う、そのため自分自身が現在進行



形で参与している問題について、中国語で話されるため、一生懸命聞くことで、状況と発せられる中国語を一致させ、何を話しているか聞き取る練習を無意識的に行っていることがわかる。

そして、＜学習者に紹介するために言葉を調べる＞である。日本語回廊のスタッフとして、学習者との会話を促すために様々なテーマを設定し、準備を行っている。宮迫さんもいろいろな情報をやりとりするために、自分で話すことを調べて準備を行う。その中で、難しい言葉をどのように中国語で説明すれば良いか、台湾人スタッフと共に調べる中で、中国語を習うのではなく、自ら学ぶことを経験している。インタビューでは、「わたしが始めに日本語で書いて、わたしも中国語の意味を調べて、中国語でどう話すか考えてみるんですけど、林ちゃんも同じようにわからないところを調べて、足りない部分を補いあったりして、なんて言ったらいいんやろ、誰かから教えられるんやなくて、自分たちで調べて、学ぶ。すごい良い勉強になりましたね。{インタビュー2015/12/16}」と語った。言語を「教えられる」から「自ら学ぶ」ことを意識している。

そして、こうした授業とは違った中国語の学びを経験することで、自身の学習観にも変化が見られる。単語や文法を構造的に学習するのではなく、他者との交流の中で、話すために、説明するために中国語を使っていくことで、新しいことを知ったり、伝え合ったりすることに意味があることを感じ、＜考え方を交流させて中国語を勉強する重要性を実感＞している。インタビューでは、「ただ単語とか文法を憶えるんやなくて、考え方を交流して、知らなかったことを知るとか、じゃあこれって説明するために話すこと、大事やなあと思いました。{インタビュー2015/12/16}」と語った。宮迫さんは日本の大学で英語を専攻していたが、学校で授業を受ける以外には自分の言葉を実践する場が無かったという。言語の学習のために話すのではなく、言語活動の中から学びを見いだしているのである。

## (2) [学習者の視点を考慮することと活動の達成感]

このカテゴリーでは、宮迫さんが[運営側の視点と活動の充実感]を得ていることがわかる。ここで重要になってくる概念が、＜学習者の知りたいこと興味を考えて活動を作る＞である。日本語回廊では、あるテーマに基づいて学習者と話し合い交流する

ことが目的である。そのため、スタッフは学習者の発話を促すために様々な準備を行う。宮迫さんは、まず自分が話すことを調べることからはじめたという、相手が話すためには自分が話さなければならないからである。インタビューでは、「自分で話すことを調べるのが一番大変でしたね。相手が話すためには、自分からはなさいといけません。{インタビュー2015/12/16}」と語った。しかし、学習者の興味があることを調べるのは非常に難しく、何に重点を置いて話をすればよいかわからず、一番有名なものに絞って調べて話し合いを行った。そのため、自分の調べたことに自信がなく、本当にそれで良いのか疑問に思いながら進めていた。インタビューでは「回廊をやってくなかで、台湾の子の日本についての見方ですかね。スタッフとして、もっと（学習者が）知りたいことを伝えたいなって思ったんですけど、わたしがこれは面白いって思ってることと、向こう（学習者）が知りたいって思っていることが全然違ったりするので、難しいです。それに、もし興味がなかったら来てくれないうから。{インタビュー2015/12/16}」と語った。自分が何をしたいかではなく、学習者の視点に立って活動を作っていく態度と、わからない中でも学習者のために考え、試行錯誤する姿勢が見られる。

そして、自分で考えて話した事柄について、学習者から質問されることで、学習者の発話を促せたことへの達成感を感じ、うれしかったという。逆に学習者の反応がないときは、話した内容を反省し次の内容に活かしている。インタビューでは、「一番うれしかった時は、自分が持ち出した話にもっと質問がきたときとかがすごくうれしかったですね。やっと話してくれたって。逆に反応が無いときは、どうしていいかわからなくて、ちょっと難しかったかなとか、いろいろ自分で反省しました。{インタビュー2015/12/16}」と語った。このように、学習者が何に興味があるのかを考え、調べ話すことで学習者からの反応があり、それが活動へのフィードバックとして、自分がしたことの意味を実感していることがわかった。

### (3) [話し合うことの重要性の実感]

このカテゴリーでは、宮迫さんが「話し合うことの重要性を実感」していることがわかった。日本語回廊を運営していく上で会議は必要不可欠である。

まず、一つ目の概念として＜仲間と話し合っって活動を運営することの重要性＞が浮かび上がった。宮迫さんは、参加したばかりの頃は、あまり状況がわからず参加していたが、他のグループの問題を共有したり、話し合ったりしている内に、学習者の視点から考えて運営していくことの必要性を知った。インタビューでは、「回廊の時に、やっぱり回廊の時は自分の班の状況しかわからないですけど、会議の時に王さんたちがやってた班は、こういうのとは違うのやりましたとか、そういうのを聞いて、あーそうなんやって思ったことがあったり、で、みんなが意見言ったりする。{インタビュー2015/7/2}」と語った。そして、仲間とどのように活動を進めて行くかを話し合うことを通して、活動を運営していく中での視点を考えるきっかけにもなっている。インタビューでは、次のように語った。「最後に班をまとめていくときに、料理班が最後少なくなったときに、なんかどうしたらいいのかって考えてる時に、スタッフのやる気とか学習者のためにとって考えてなくて、学習者の視点から考えて運営をしていかなあかんのやって、今までそんなこと考えたこともなかったもので、すごく思いました。{インタビュー2015/7/2}」

このような仲間との情報のやり取りや話し合いは、ただ活動運営の視点に気づかされたわけではない。もう一つ重要な概念として、＜意見を言い合い協力することの重要性と楽しさを感じる＞である。仲間と共に意見を出し合い話し合うことで、相手の考えていることを理解することができ、自分も意見を出すことで、その意見が活動の一部に取り入れられ、活動をみんなで作っている実感に繋がっている。そのためには、自分から積極的に意見し、仲間と共に協力することが重要であると感じている。インタビューでは、「みんなでこうしたらいいとか、ああしたらいいとか、意見を言うことでみんなの考えが分かったり、もっと良くしようっていう考えが出て、少人数だからっていうのもあるんですけど、一致団結みたいな。協力することが大切やなって思いました。それに、私的に前の時はほとんど半分外から見てる感じで、たまに意見も言ってたんですけど、あんまりよく分かってないところもあったんですけど、今回はちゃんと中に入って、自分の意見も言って、自分の意見も活動の一部のプラスになったりして、楽しかったですし、意見を言い合うことで活動ができる。そういうことが学べたと思います。{インタビュー2015/12/16}」と語った。

そして、仲間と共に活動を作っていくなかで、＜仲間と一緒に一つの活動をつくりあげる充実感＞を感じている。その中での重要なポイントは、仲間と話し合う会議の時間を増やしたことで、より仲間たちの考え方を知ることができ、同時に仲間との良

い関係が構築できているからである。インタビューでは、「今学期は会議が二回になって、よりこうみんなで一緒にやる活動って感じがしていいと思いました。会議では絶対にメンバーに会うので、週に3日は必ず会うので、そこでお互いの意見を言い合って、どういうことをしたいか話し合って、ひとつのものを作っていくことが本当に楽しかったですし、良い経験になりました。{インタビュー2015/12/16}」と語った。第6期の活動と比べ、第7期では、宮迫さんの提案で会議の時間が週2回に増え、会議時間も2時間近くまでに及ぶ時もあり、白熱した議論がされていた。宮迫さんは仲間と共に話し合い、問題を解決していく中で、活動を如何に運営してゆけばよいか、そして自分から意見を出し、活動をよくしていくことの重要性とその楽しさを実感していることが明らかとなった。

#### (4) [自分の言葉への認識を深める]

このカテゴリーでは、学習者と会話をしていく中で、自分の話している言葉が関西弁であることを発見し、それを調整しようと努力していることがわかる。これまで大阪を離れたことのなかった宮迫さんにとっては、台湾の学生がはじめて自分の言葉を意識する相手となった。日本語学科の学生は、いわゆる標準語という日本語を学習する。多くの学生たちは、ドラマやテレビ番組から関西の方言を知り、興味を持っている。日本語回廊でも関西の方言に興味のある学生がいたことから、方言について話し合おうということになった。しかし、大阪出身である宮迫さんは、幼い頃から使っている自分の言葉の何が関西弁なのかわからず、インタビューでは「わたしは今まで自分の関西弁を意識したことがなかったんですけど、回廊で方言について話した時に、わたしは大阪なんで、関西弁ってなって、でも、何が関西弁なんだろうって、よく友達に、それは関西弁だよって言われたりしてたんですけど、関西弁についてはじめて勉強しました。それで、その言葉がどんな意味なんかを説明できるようにしました。

{インタビュー2015/12/16}」と語った。学習者と会話の中で、わかりやすく話そうと意識しているが、なかなか関西弁でない話し方をすることができず苦勞している。そこで、まず何が関西弁なのかを勉強することからはじめ、自分でその言葉を説明できるようにしていったという。ここでは、話す相手を意識することで、自分の言葉の認識を深めていることがわかった。

### 6-1-5 森さんの場合

森さんは、日本人交換留学生で、日本語回廊へは TA の面接で日本語回廊の担当に選ばれた学生である。日本語学科の授業 TA（会話をチェックする）には以前参加していた経験がある。TA の面接によって選ばれたため、他の台湾人メンバーより少し遅く、3 回目の会議から参加した。森さんへのインタビューは、第 6 期活動終了後に行った。インタビューデータを M-GTA で分析したところ、「他者に理解してもらうことの重要性を知る」「人に接することの難しさの実感」「参加者のために仲間と一緒に準備する」「参加者とのコミュニケーションを促す努力」「自分たちで活動を作っていく意識を持つ」「参加者の反応によるよろこび」「スタッフとの良い関係ができる喜び」「相手に合わせて言葉を調整する」「参加者の多様性を知る」「メンバーの考え方ややり方の多様性を知る」「わからない単語や言葉を聞く」「自分の話したいことを苦労して話す」の 12 個の概念を生成することができ、さらに概念同士の関係を検討し、6 つのカテゴリーにまとめた。生成された概念を白地に黒字で表し、そこからできたカテゴリーを黒地に白字で表す。

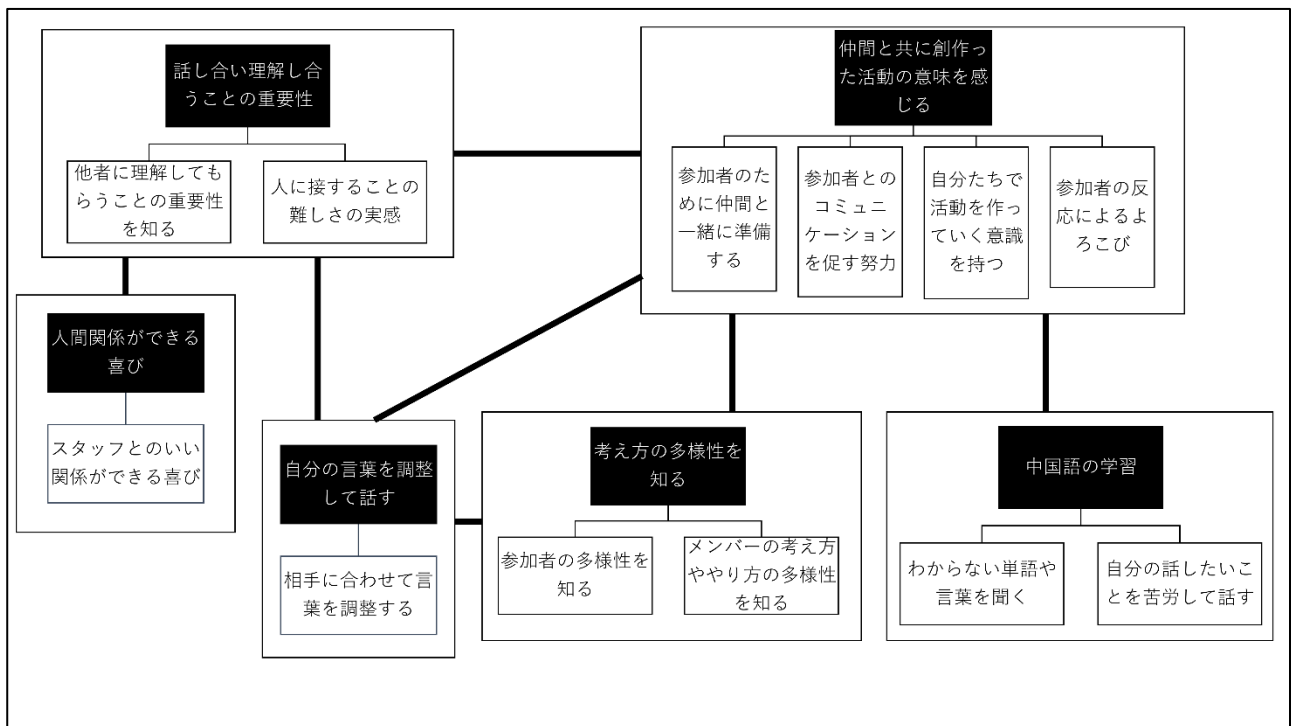


図 7 森さんの概念関連図

## (1) [話し合い理解し合うことの重要性を知る]

このカテゴリーでは、他者と接していく中で話し合うことの重要性に気がつき、自分の人の話を聞く態度にも変化が見られる。森さんは第6期の日本語回廊に参加し、林さんと同じ旅行グループのメンバーである。森さんは、日本語回廊でメンバーや参加者と接する中で、＜人に接することの難しさを実感＞している。インタビューでは、「やっぱり、接し方ですね。難しいですね。外国人同士なんで、そこはってところが互いに分からなくて、考えれば考えるほど、どうしていいかわからなくて、やっぱりいろんな考えの人がいて、どうやって接すれば、理解し合えるのか、ずっと考えました。{インタビュー2015/6/29}」と語った。母語や社会的、文化的背景の全く異なるもの同士が、一緒に活動を作っていく中で、同じ文化の者同士なら持っている暗黙の了解や考え方の基準にズレが生じていることで、どのように接することで、理解し合う事ができるのか、接し方の難しさを実感している。こうした実感への経緯には、いくつかの問題や衝突があった。

森さんは、王さんたちに比べて2週遅れて活動に加わった。そのため、すでに会議は進んだ状況であり、活動のことをあまり理解していなかった。一方メンバーである林さんは、話すことへの怖さから森さんと話し合おうとはせず、森さんも活動に入りにくいと感じ、回廊の活動や会議を休むようになった。その時のことについて、インタビューでは「最初は どうしていいかわかりませんでしたね。入ったはいいけど、受け入れられない、なんかとても入りにくかったです。それで林ちゃんからもあまり話しとかありませんでしたし、参加しにくくて小池さんに相談したんです。{インタビュー2015/6/29}」と語った。その言葉通り、森さんは筆者にメールで相談をした。メールには次のようなことが書かれていた。

〈2015年4月5日20時01分 森さんからの相談メール〉

「小池さん、すみません。最近回廊に行かなくて。正直今のままではきついです。何をしたいのか全然分かりませんし、林ちゃんは当日いきなりこれやってっていいです。なんか、うまく入っていけない感じで、このままでは続けられません。」

その後、筆者は林さんに対し森さんの思っていることを伝え、二人は話し合いの場を持ち、うまく相談しあって活動を続けられるようになった。

また、仲間と活動を行っていくなかで、さまざまな意見や考え方の衝突があり、その中でどうすれば相手に理解してもらえるのかを考え、試行錯誤をしている。インタビューでは、「僕は旅行班でしたけど、やっぱりちょっと意見が違ったりすると、どうしていいか分からなくなって、いろいろあっても最終、それでいいかなっていう、折れるっていうか、いろいろな意見がある中で、自由っていうか好きな事ができるというのもあるんですが、最終決定が意見と違うと難しかったですね。{インタビュー2015/6/29}」と、意見が違うことで、どう決定していけばいいか悩んでいることが語られている。そして、はじめの頃は、「最初はもう、僕が折れるしかなかったですね。あー仕方がないって、これがこの国のスタイルって感じで。{インタビュー2015/6/29}」というように、自分が折れることで、その意見の違いに対処していた。しかし、活動を進めていく中で、自分が折れるだけでは意見の違いは解決しないことに気づき、まずは自分の意見を我慢し、相手を理解しようと努力することを意識し、自分の言い方を変えたりすることでお互いに理解しあえるように努力したという。インタビューでは、「やっていくうちに、自分が理解しないと、ちょっと難しくなってきた。やっぱりどこか疑問に持つとずっと考えてしまうタイプなので、でも直接言ってもあまり通じなくて、首をひねられる。どうしてって。だから、忍耐力がつかえましたね。我慢する力、ここはまず抑えてって、言うことは言うんですけど、向こうに理解してもらえないと何にもならないので、理解してもらえるように、言い方とか変えたりして、理解し合えるようにしましたね、これが難しいんですけど。{インタビュー2015/6/29}」と語っている。このことから、森さんは[話し合い理解し合うことの重要性を知る]だけでなく、自分の話し合うことに対する態度を変化させていることがわかった。

## (2) [仲間と一緒に作った活動に意味を感じる]

日本語回廊は、予め内容が決まっているわけではない。全て自分たち自由に考えて組み立てていくことが必要である。そんな特質を備えた活動の企画をしていくなかで、森さんは回廊には自由があり、いろんな発想で活動を作っていけるという特徴を理解し、活動を作っていくには、自分たちスタッフが自ら働きかけ、＜自分達で活動を作るという実感＞をえている。インタビューでは、「日本語回廊は僕が思うに、自由

はすごくあると思うんですよ、形はあるとしても、考え次第でこれがよかったんじゃないって次はこうしてみようとか、ダメだったら他のことができる。でも、スタッフ側が何かしないっていうことになると思うんです。{インタビュー2015/6/29}」と語った。もともと形や内容が決まった活動ではないため、すべて自分たちで決めていく必要があり、そんな中では自分たちが何かしなければ、何もできないという実感を得ていることがわかる。そして、学習者のために準備をするということ、インタビューでは、「とにかく準備が大変でしたね。他の TA もしてましたけど、準備の量が違います。TA はなんか、先生が用意した会話を練習するっていう、作業みたいな感じなんですけど、回廊は全部やらないといけないし、やらないと、学習者が来ないですからね。{インタビュー2015/6/29}」と、ふつうのTAとは違い、既に準備され与えられた課題をこなすのではなく、学習者のためという努力する対象が存在し、そのために準備をする意義を感じている。また、事前の準備だけでなく、活動中における＜学習者とのコミュニケーションを促す努力＞も学習者のために行うことの一つである。これは日本語回廊のスタッフの誰もが経験することであり、森さんもインタビューで「やっぱり話を引き出すのが難しかったですね。やればやるほど何か違うんかなって思ったり、ここも難しい、どうしたら良いかなって、やっぱりいろいろな人がいたんで、そこを引き出すというか。{インタビュー2015/6/29}」と学習者から引き出すことの難しさを述べている。そして、そのような学習者のために行った準備や取り組みに対して、＜学習者の反応による喜びを感じる＞。例えば、最初は緊張していた学習者も意見を言ってくれるようになったり、同じ学習者が何度もきたり、話すようになってくれた学習者から情報が聞けたりすることで、自分のやってきた活動に対して喜びを実感している。インタビューでは「参加してくれる子たちが、何かわかったとか、そのときはうれしいですね。同じ子が何回も来るとか、最初はあまり話さなくても途中から話すようになってくれて、そこからいろいろ情報聞けたりして。{インタビュー2015/6/29}」と語った。このように、学習者のために仲間たちと一緒に活動を作っていくことで、仲間や学習者と向き合い、その活動の成果として学習者からの反応があり、自分たちがやってきたことへの意義や達成感を得ていることがわかる。



### (3) [自分の言葉を調整する]

このカテゴリーは、＜相手に合わせて自分の言葉を調整する＞＜相手に伝わる実感＞という概念から生成された。日本語回廊では、日本人にとって非母語話者である台湾人スタッフや学習者と話し合う中で、自分の言葉を調整して話す必要がある。森さんは、学習者と話しをしていく中で、自分の関西弁が強いことに気づき、関西弁で早く話すと言語者がわかりにくいことから、自分の話し方を意識し、ゆっくり話したりなるべく標準語で話したり、相手がわからない言葉を別の言葉で言い換えて、相手がわかるように話す努力をしている。インタビューでは次のように語った。「勉強ってというのは、自分の話し方ですね、相手（学習者）にあわせて自分の話し方を変えらるか、ゆっくりとか、あとわかりにくい言葉は他の言い方で話すとか、似てるけど、相手にどう伝えればいいとか、特に母語が同じ人じゃないんで、なかなか伝えるときの日本語をなるべくゆっくりして、聞き取りやすいように意識はしてましたね。日本人相手にしゃべる時は考えたことなかったですけど、相手が日本語が母語じゃないんで、そこは考えさせられましたね。{インタビュー2015/6/29}」このように、相手を意識して話すということは、普段同じ母語同士の者であれば、無意識のうちに行われているのかもしれないが、非母語話者と対峙し話をする中で、聞き手を意識した話し方をしていかなければ、自分の伝えたいことは伝わらないことを実感している。

そして、森さんは、学習者とのやりとりの中で、考えて試した話し方で通じた時に、「ああ、こうしたら良かったって発見したときは、良かったですね。{インタビュー2015/6/29}」と自分の言葉を調整して話すことを通して、＜相手に伝わる実感＞に繋がっている。このように森さんは日本語非母語話者である台湾人と対峙し日本語で話さなければならない環境において、どうしたら自分の言いたい事が伝わるのか、自分の言葉を調整し、通じた実感を得ながら、通じる話し方を見つけていることがわかった。

#### (4) [中国語の学習]

このカテゴリーは<わからない単語やことばを聞く><自分の話したいことを苦労して話す>の二つの概念で構成されている。日本語回廊の場合は、できるだけ日本語で話すことが求められているが、日本語学習者の中には日本語の学習をはじめたばかりで、あまり話せないという学生もいたりする。学習者はわからない言葉がでると、中国語でその言葉の意味を聞いてきたり、学習者同士が何やら中国語で話したりすることもある。森さんは、その様子を見ながら聞きながら、そこで話されている中国語でわからない言葉の意味を聞いたりして中国語を学んでいるという。インタビューでは、「回廊では、本当にいろんな人がいて、話し方や使う単語なんかも全然違いますから、話をしているときに分からない単語がたくさん出てきて、それはどういう意味かって聞いて勉強しましたね。{インタビュー2015/6/29}」

さらに、授業と活動を比較し、授業ではあらかじめ用意されているものを練習することで、既存の言語というものを身につけようとするのだが、活動の場では、自分の興味や話したいことが先行し、話すために一生懸命考え、通じた時、達成感があるという。インタビューでは、「授業では、用意されてるものがあるんで、それを言うだけ、会話も準備されたものを話すかんじなんですけど、日本語回廊では、全て自分で準備して、話したいことがあって、それを準備するんで、ぜんぜん違いますね。苦労して相手と話せたときの楽しさがありましたね。{インタビュー2015/6/29}」と語った。このように、森さんは、中国語を話すために、自分で中国語を組み立て、実践することで、じぶんの言葉で話すことを経験していることがわかった。

#### (5) [考え方の多様性の実感]

このカテゴリーは、<学習者の多様性>と<メンバーの考え方とやり方の多様性>の2つの概念から生成された。日本語回廊には、学習者として毎回多数の学生がやってくる。森さんの場合は、旅行グループで、多いときは25人にも及ぶ学習者が来ていた。森さんは、その中でファシリテーターの様な役割で学習者との話し合うのだが、学習者は10人いれば10人違う。インタビューでは、「そうですね、一つの班が10人くらいでいろいろな、いろいろな考え方があるんだなって、とりあえず喋る人とか、

喋ってそこから情報を出してくれる人とかも、求められてようやく情報が出る人とか、すごい、なんかどう言ったら言いんですかね、いろんな考え方が集まって、一つになる。{インタビュー2015/6/29}」と語った。そして、<メンバーの考え方とやり方の多様性>では、スタッフ間でのやり取りを通して、その仕事の仕方や考え方との衝突があり、そこからも同じように<考え方の多様性を知る>のである。インタビューでは次のように語った。「やっぱり考え方の違いとか、やっぱり日本人ですし、ちょっと硬いかもしれませんが、これでいいんじゃないってなることもあったんで、難しかったですね。林ちゃんとかと一緒に準備するじゃないですか、あー違うなって、もうちょっと焦った方がいいんじゃないのって思うところも自分のペースでやってしまっただけというか。やっぱり何人かがスタッフとしているから、意見が合わなくて大変なのに、のほほんとしてる。いろんな人がいるんだなっていう。{インタビュー2015/6/29}」

このように、他者と向き合い、ことばのやり取りをする中で、自分と他者との違いを認め、[考え方の多様性の実感]をしていることがわかった。

## (6) [人間関係ができる実感]

このカテゴリーは、<スタッフとのいい関係ができる喜び>という概念から生成された。インタビューでは、「日本語回廊から人間関係が広がります。スタッフ同士、いろいろ悩んで、話して、考えたりして活動を広げていったんで、その中で人間関係の難しさとか知りました。で、人間関係を作っていましたね。{インタビュー2015/6/29}」と、スタッフ同士と一緒に悩みながら活動を作っていく中で、人間関係の難しさを知りながら人間関係を広げていると述べている。森さんは同じメンバーである林さんとの問題を経て、活動の最後にはとても良い関係を作っていた。インタビューでも仲間との関係について、「最初はやっぱりいろいろありましたけど、今は楽しく、ストレスもなく、距離が近い人間関係のような気がします。{インタビュー2015/6/29}」と距離が近い関係になったと述べている。

## 6-1-6 山村さんの場合

山村さんは、第6期の回廊に参加していた森さんの後輩で、日本の大学では中国語を専攻している。非常に責任感のある学生で、日本語回廊に参加し始めたばかりの頃から積極的に会議の司会を務めるなど、日本語回廊を引っ張っていった。山村さんへのインタビューは第7期活動終了後と第8期活動終了後に行った。インタビューデータを M-GTA で分析したところ、「会議でみんなの意見を引き出せない」「意見を引き出す方法の模索」「意見を引き出した実感」「会議の効率をあげられた実感」「活動上での問題を話し合う」「トラブルを話し合って解決する」「きれいな日本語で話す必要性を知る」「自分の話すスピードが速いことに気がつく」「参加者との沈黙」「仲間と協力して沈黙を回避する」「コミュニケーションを促す話題を探す努力」「参加者のために活動を作る」「参加者の反応による喜び」「活動を作りあげる実感」「日本人との関わりを作ることの意義を実感」「日本語学習者と交流することの意義を実感」の16個の概念を生成することができ、さらに概念同士の関係を検討し、6つのカテゴリーにまとめた。生成された概念を白地に黒字で表し、そこからできたカテゴリーを黒地に白字で表す。

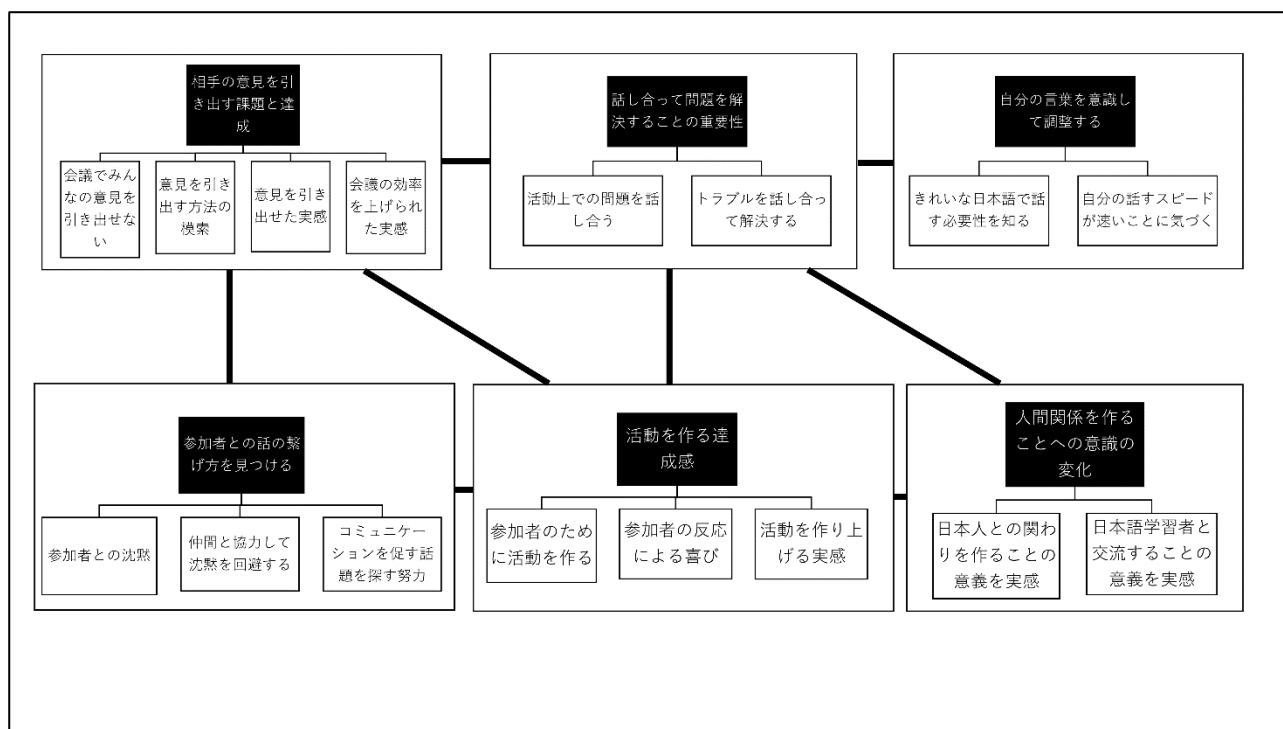


図8 山村さんの概念関連図

## (1) [相手の意見を引き出す課題と達成]

山村さんは、第7期及び第8期の回廊の会議の司会を務めていた。会議の司会というのは、会議の流れをコントロールし、みんなの意見をまとめていくという大役である。彼女はこれまでこのような仕事をやった経験がなく、会議を進めて行くなかで、  
<会議でみんなの意見を引き出せない>という問題に直面した。実際に一人一人聞くと意見が出てくるのだが、うまく会議の進行の中で意見を引き出せなかった自分に対して力不足だと感じている。インタビューでは、「会議が思うように進まないときはしんどかったですね。みんなが黙りこくる。みんなが黙って自分の意見を言わない。なんか思っても、みんな言ってくれないから、それを如何に引き出すかっていうのが、なかなか難しく、それが引き出せなかったときは結構落ち込みました。{インタビュー2015/11/25}」と語った。実際に、第7学期の会議では、山村さんが意見することが多く、その意見に対して他のメンバーが賛成したり反対したりすることが多くみられた。第7期の会議記録の一部を提示する<会議記録 2015年11月18日>。

この会議では、山村さんは回廊全体の問題点についての話し合いを行おうとするのだが、他のメンバーからの発話があまりなく、山田さん少しずつ答える形で会議が進行している。そして、何も発言がない焦りから自分で話して、それに対してメンバーが答えるといった具合である。インタビューでは、自分が司会をしていた会議を次のように評価している。「結局、私が意見出して、まあいいんじゃないとか、それに対する反対意見とか出た感じですね。{インタビュー2015/11/25}」もちろん毎回の会議がこういうわけでないが、このようなやり取りが全会議中3度ほど見られた。山村さんはこのような状況になることを、自分の力不足のために意見が引き出せないと考え、インタビューで「自分にとっての課題ですね。会議の時に、メンバーから意見を引き出して、もっとうまくまとめられるようにならなきゃって。{インタビュー2015/11/25}」と語っているように、相手から意見を引き出すことが自分の課題であると考えようになった。

山村さん：昨日の日本語回廊全体で思ったことはありますか？

(沈黙)

山村さん：例えば、昨日はグループごとに分かれて看板持ってやってみましたけど、どうでしたか？

(沈黙)

山村さん：周さんはどう思った？

周さん：いいと思う。

山村さん：えっと、じゃあ、どうしようか。何か問題点とかなかったですか？ とりあえずアンケート見てみましょうか。感想に書いてあるのは、日本特有の文化が知りたいって書いてあります。だから、学習者が知りたかったことと、違ったんかなってというのが若干あるかなって。

(沈黙)

らいいでしょうか。

(沈黙)

山田さん：今のやり方だと、グループ毎に、前の場合は、状況グループとか事前に何を話したいですか、学習者みんなでテーマを決めていたので、自分で準備して、自分の話したいことを話せていたんですね。でも、今はスタッフが準備したことを話すほうが多いから、聞きたかったことと違ったっていうのがあるんかなって。だから、学習者の興味のあることを聞いて、話すっていうのがあったほうがいいのかって思いました。準備することが多くていつもギリギリなんですけど、もしかしたら、違うことを聞きたかったのかなって思ったりもするので。

山村さん：そうですね。それを合間に挟んでいったらいいんかなって、で、最後に今日は行事のこと話したけど、何か興味のあることはありますかとか感じで、その場で聞いたほうがいいのかって思いました。

山田さん：自由のトークの時間を作ったほうがいいのかって思いました。

山村さん：アンケート

山田さん：アンケート書きつつ、バンドの話とかいろいろ。

山村さん：ご飯のときにいろいろ話したらいいかなって。みんな、昼ごはんは、学習者と一緒に食べてる？それとも持ち帰ってる？

(沈黙)

山村さん：グループで別れると、なかなか集まらんとこもあるやないですか。どうしたらいいんやろう。

そして、<相手から意見を引き出す方法や話し方を模索>するようになる。第8期における日本語回廊の会議では、スタッフのみんなが意見を言いやすいような雰囲気を作ることで、みんなの意見を促すことを考えた。具体的な方法としては、会議が始まる前に日常的な話をして、会議の雰囲気が和んだところから会議をスタートさせたり、今はなしている議題を簡単に説明してから、その質問に入るように心がけていたという。インタビューでは、「相手から、みんなから意見を引き出す方法を考えましたね。話し方とか、会議の雰囲気を良くするとか。雰囲気をよくしないと、みんななかなか意見言える雰囲気やなんで、意見も出てこないんで。{インタビュー2016/6/26}」と語っている。実際に会議記録を見てみても、そのようなやり取りが行われていた。

<会議記録 2016年3月21日>

山村さん:劉さん、それ何食べてるん?

劉さん:これは、うどんです。

山村さん:あー、そうなんや。最近、SOGO に新しいうどん屋できたん知ってる? 日本の香川の有名なやつ。

周さん:うん、知ってる。食べました。

山村さん:どう?おいしい?

周さん:はい、おいしいです。

山村さん:台湾の子ってうどん好きなんや!

(省略)

藤田さん:そんなことないでしょう! それはいくらなんで。

山村さん:本当なんですって!

藤田さん:はははは、おもしろいです。

このように会議が始まる前に日常的な会話をして話しやすい雰囲気を作る努力をしていることがわかる。そして、「それから質問をする。なんか前と比べて、日本語聞き取れてない感じの子が多かったんで、とりあえず今の状況を軽く言って、今このことを話してるんですが、～さんはどう思いますかって聞いたりしましたね。{インタビュー2016/6/26}」の語りから、議題をわかりやすくメンバーに伝えてる試みをしていることが伺える。実際の会議記録を見ても、山村さんのこうした努力は明確である。

<会議記録 2016年3月8日>

山村さん:はい、じゃあまず今学期の目標を決めたいと思います。前学期の目標は、交流ということやったんですが、今学期はどうしましょうか? えっと、まず目標を決めようと思うので、何かありますか?

周さん:前学期の交流はよかったと思う。みんなで日本語と考えを交流できる場所。

山村さん:そうですね。Tちゃんは前、学習者でしたけど、どういうことが楽しかったですか?

劉さん:旅行と料理が楽しかった。

山村さん:あー、回廊外でやったやつですね。今学期もそういうんを入れていった方がいいですね。周さんはどうですか?どんなことが楽しかったですか?

周さん:うーん、文化、いろいろな文化がわかります。それが楽しかったです。

周さん:日本と台湾の文化を話し合う。今学期もそれは入れいった方がいい。

山村さん:そうですね。じゃあ、目標は、みんなで楽しく交流しつつ文化を話し合う的な感じがいいですかね。

劉さん、周さん:うん。

山村さん:じゃあ、活動のテーマを決めていこうと思うんですけど、どんなテーマがあったらいいと思いますか?

この会議記録では、回廊の目標などが話し合われているが、山村さんはスタッフたちに今討論する内容を話し合い、一人一人に対してわかりやすく質問をしている。第7期の会議と比較しても、落ち着いた話し方で会議を進めていることがわかる。

山村さんは自分の考えた方法を実際に適応していくことによって、仲間から＜意見を引き出せた実感＞や＜会議の効率を上げられた実感＞を得ている。インタビューでは、「質問によりますが、静かな子が結構多いじゃないですか、だからその子たちははじめは、結構なかなかパパッと出てこない感じがしましたけど、でも終わりの方になると、聞いたことに対して意見を言うようになって、うまく引き出せたなって思いました。{インタビュー2016/6/26}」と意見を引き出すことができた実感していることがわかる。また、「なんか前学期よりも効率が上がった。それが自分の成長とつながってる気がするので、なんていうか、日本語回廊をやる意義として、みんながやっぱり個人として成長すべきであると思ってて、そこで自分の成長は何って言ったら、会議の司会かなって感じです。{インタビュー2016/6/26}」という語りから、＜意見を引き出せた実感＞や＜会議の効率を上げられた実感＞が自分の司会者としての成長に繋がっていると評価している。山村さんは非常に責任感が強く、何事も一生懸命取り組む学生であり、日本語回廊においてもメンバーの中心となって活動運営に取り組んでいた。そのため、司会者としての仕事でも悩むことが多く、メンバーとの間で直面した問題を自ら解決策を探し、実施することで、このような成長を感じることができたのである。

## (2) [参加者との話の繋げ方を見つける]

このカテゴリーでは、＜学習者との間の沈黙＞＜コミュニケーションを促す話題探し＞＜仲間と協力して回避する＞の4つの概念から生成された。日本語回廊のスタッフたちは、活動の中で学習者との間のファシリテーター的な役割を持つ。そのため、スタッフを一番に困らせる問題が、＜学習者との間の沈黙＞である。山村さんはインタビューで、「やっぱり毎回の活動の時に、学習者との間に沈黙がある。その沈黙をいつもどうしたらいいかって、いつも悩みましたね。結局沈黙が苦痛なんですよね。どうアプローチしていいか分からなくて。{インタビュー2016/6/26}」と語った。会話が途絶えた時、気まずさを感じるのは普通だが、スタッフとして話を盛り上げていく役であり、複数の学習者との間で起こる沈黙は、耐え難いものである。こうした問題を解決するために、山村さんは、＜コミュニケーションを促す話題探し＞を行った。具体的にはインタビューで次のように語った。「内気というかあんまり話せないこと



のコミュニケーションが大変でしたね。なんか、その子にぴったりの話題を探すのにすごく苦労しましたね。その子は普段は本当に話さないんですけど、ある話題になるとぱぱーって話すじゃないですか、そういう人たちって、その話題を探して、キャラクター付けをするとか、大食いの子とかいたじゃないですか、そういう感じの子とか、〇〇に詳しい人とかそういう感じ印象付けて、ことあるごとにその話題に触れるようにしました。{インタビュー2016/6/26}」 学習者がどのような話題に興味があるのかを観察し、そこから話を繋げていく方法を試みている。そして、自分の試みに対して、「そしたら、場がもつっていうか、話が途切れても次に繋げられましたけど、やっぱりできてないところもあって、名前が覚えられないとか、一人では限界がありました。{インタビュー2016/6/26}」と、評価をしている。そして、沈黙に対応する方法は、会議でも頻繁に話し合われた。メンバー同士で各自が試みた対策法を共有し合い、仲間同士が協力し合うことで、沈黙を回避する方法を見つけていった。話し合いの様子を以下に提示する。

<会議記録 2016年4月18日>

山村さん：沈黙が起きた時ってどうしてますか？

川崎さん：そうなんですよ。話が途切れたときが一番気まずいですね。

周さん：えっと、わたしたちは、これは前学期にも少ししてたんだけど、同じ班の別の人がすぐに質問をする。話題が終わってしまうのは仕方ない、でも誰かが質問とかしたら、話を繋げることができる。メンバー同士で助け合う。

山村さん：あ～なるほど！その方法がありましたか。じゃあ、事前に打ち合わせとかしましょう！

このように会議では、山村さんは前学期に実際に行ったやり方を共有することで、スタッフ同士で協力して質問し合うなどして沈黙を回避する方法を実践していった。インタビューでは、「今学期は、沈黙になったら台湾のスタッフが助けてくれたんで、そもそも沈黙になりそうになった時に、ぱぱっと「日本にはこれがあるよね」とか、「台湾ではなんて言う」とか言って流れを作って、沈黙を回避できましたね。なんか、一緒に協力してる感がありましたね。{インタビュー2016年6月26日}」と語った。山村さんは、仲間と問題の解決策を話し合い、団結して実施していくことで、沈黙を回避できただけでなく、仲間と一緒に協力している実感を得ていることがわかった。

### (3) [活動を作る実感と喜び]

このカテゴリーは、[活動を作る実感と喜び] を得ていることを示している。日本語回廊はスタッフたちで全て作って行かなければならない。その活動の対象として、学習者の存在がある。山村さんは、インタビューで「やっぱりやるからには、活動をよくしていこうって思って、常連さんもいるわけじゃないですか、学習者のためって言ったらあれですけど、せっかく来て貰うなら、いい活動にしたいんで、みんなで話し合ったりして活動を作っていましたね。{インタビュー2016年6月26日}」と、自分が日本語回廊にスタッフとして関わっていく上での意識を「学習者のために活動を作る」としている。学習者にとってどのような環境を作って行くかというスタッフとしての意識を持ち、そのためにみんなで話し合っ、活動をよくしようと努力していることがわかる。そして、学習者の反応こそが、こうしたスタッフとしてのモチベーションに大きな影響を与えている。山村さんは「アンケート見て、楽しいとか書いてあるとうれしいですね。参加してくれる人の反応を見るとうれしい。活動中にも、相手が閃いたというか、なんか「あ～それってそういう意味なんだ」って感じで分かってくれた時に、分かってくれたんだなって、教えてるわけじゃないんですけど、相手（学習者）ができることが増えるっていうか、知ったことがあるってことがうれしかったですね。{インタビュー2016年6月26日}」と語った。自分が学習者のために活動をよくしていこうと努力しことに対し、学習者からの反応、ここでは学習者が分かってくれたという反応であるが、それを見ることによって、喜びを感じている。また、反応は活動中の「わかった」といった反応だけではない。第7期、第8期の活動では、学習者達を誘って何度か食事会を行った。日本語回廊としての活動の外で行われる食事会では、普段話せないことが話せたり、学習者の違った一面をみることができると。山村さんはその食事会で、活動をしてきてよかったと思える学習者の反応があったという。インタビューでは、「最後の食事会の時にみんなで写真を取り始めたんですよ。そしたら、いつ日本の帰るのとか聞いてくて、あんまり話さない人たちだったから、何も思ってなかったかと思ってたんですけど、なんだかんだで繋がりを感じて、良かったなって。学習者の反応、なんか最後にそういう話さなかった学習者、もしかしたら日本語回廊がつまらなくて嫌々来とったんかなって思ってた人たちが、最後に来学期も参加したいですって言ってくれてほんとうにうれしかったです。日本語回廊やってて本当に良かったなって思いました。{インタビュー2016年6月26日}」

と語った。日本語回廊の活動中は、なかなか反応が無かったり、何を考えているかわからなかった学生から、自分のことを気にしてくれる言葉を聞いたり、「来学期も参加したい」という言葉を聞くことで、活動をしてきた甲斐を感じている。そして、こうした学習者たちからの反応を含めて、仲間と共に活動を作ってきたことで、＜活動を作り上げる実感＞を得ている。インタビューでは、「活動が、火曜日の活動がよくなっていくのがいいなって、そのためにみんなで考え続けて、一緒に向上していこうって感じがいいですね。一つのものに対してみんなで話し合いとかやって、それをよくしていこうっていうのが楽しかったですね。{インタビュー2016年6月26日}」と語った。活動は一人ではうまく行かず、仲間と話し合っていくにもたくさんの問題や困難がつきものである。山村さんは、[会議の中で意見を引き出す課題と達成]の中で、メンバーから意見を引き出し、意見をまとめていくことの難しさを感じ、調整しながら会議を進行させていることが明らかとなった。こうした問題を乗り越えながら、みんなで活動を作ることで、一つのことをみんなで作っていくことの楽しさを実感しているのである。

#### (4) [自分の言葉を意識し調整する]

このカテゴリーは、山村さんが他のスタッフや学習者と言葉のやりとりをする中で、[自分の言葉を意識し調整する]ことを行っていることを示している。日本語母語話者である山村さんは、これまで自分の話し方について考えたことはなく、最初に自分の話し方が相手に分かりにくいことに気づいたのが、この日本語回廊であったという。日本語回廊には、日本語学科の学生がスタッフとして参加し、学習者として日本語を学習している台湾人の学生が参加する。その中で、日本語を使ったやりとりがされるのだが、会議の中でたびたび台湾の学生が聞き取れていない様子が見られた。会議記録を見てみると、その状況が見えてくる。

<会議記録 2015年10月14日>

周さん：我々發的時間還 OK。（配る時間は、まあ OK です。）  
山村さん：あれって持ってきてすぐ配ったんか、それとも置いて、頃合いを見てくばったんかどっち？  
王さん：わかりにくい、もう一回言って。  
林さん：うん、早い。  
藤田さん：買って来て、先に置いておいてから、みんなお腹空いたかなってところで配ったってこと？  
周さん：はい。  
藤田さん：買ってきて、すぐに配ったのか？  
小池：確かさっき買ったよね。  
周さん：頃合い・・・。  
山村さん：タイミング。じゃあ、準備はできてたってことですか。

文字で見ると、山村さんが何を言っているかは明確であるが、実際にはイントネーションに特徴があり、語と語がくっついて、話す速度が早いため、筆者も時々聞き漏らすことがある。会議記録では、林さんと王さんが聞き取れないからもう一度言って欲しいと彼女に対して求めている。また、{会議記録 2015年10月19日}では、山村さんの発話に対して、台湾人スタッフのほとんどが聞き取れていない様子だったため、筆者が聞き取れているか呼びかけを行ったところ、王さんが「早い」と聞き取れないことを伝えた。そして、藤田さんが山村さんの話し方を指摘した。

<会議記録 2015年10月19日>

山村さん：みなさん、大丈夫ですか？ 準備の状況は？  
みんな：大丈夫。  
山村さん：どういう順番で話すとか。ちょっと危なくないですか？話題の振り方、この話題が消えたときに次これはなそうっていう状態にあるかどうかです。  
小池：みんな、聞き取れた？  
山村さん：あー、すみません。わたしの言ってること聞き取れませんでしたか？  
王さん：うん、早い。  
藤田さん：ちょっと訛りがひどい。  
山村さん：これ、訛りですか？

このような会議の様子や、あっけにとられている台湾人スタッフを見ることで山村さんは、自分の話し方が相手に伝わりにくいことを意識し<きれいな日本語で話す必要性>を感じている。インタビューでは、「台湾の子と話するときとか、もっときれいな日本語話さんといけんって思いました。特に、日本語が母語やない子らと話すときは、わたしは十分気をつけてたつもりなんですけど、全然わかってもらえない時もあるって、そしたら藤田さんとかが、はっきり話さないとわからないって言ってきて、ち

よっと自分の日本語っていうのを考えさせられましたね。{インタビュー2015年11月25日}」と語った。ここでは、日本人スタッフの藤田さんから自分の言葉を指摘されたことについて述べられている。また、<きれいな日本語で話す必要性>という概念と並行して<話すスピードが速いことを知る>ということにも気がついたという。インタビューでは、「自分の話す日本語が速いんだなって改めて実感しました。会議の時とか、林さんや王さんが首をひねるとか、「速い、わからない」って言われることが多くて、今まで普通だと思ってたんですけど、気を付けようって思いました。{インタビュー2015年11月25日}」と語った。日本語回廊が終盤になった時、山村さんの話し方は少しゆっくり気味になり、相手の反応をしきりに確認しながら話している姿が確認された。このように、日本語非母語話者と共に言葉を交流させることによって、それまで気づかなかった自分の言葉を客観視し、調整していることが明らかとなった。

#### (5) [人間関係を作ることにに対する認識の変化]

山村さんは、日本語回廊でたくさんの人と接することによって、[人間関係を作ることにに対する認識の変化]が見られた。日本語回廊に参加するまでは、中国語を勉強するために台湾に来ているのに日本人と付き合ってもダメだと考え、日本人だけでなく日本語を学習している日本語学科の学生との接触も極力絶っていた。しかし、日本語回廊に参加し、日本人や日本語学科の学生と共に一つのことをしたり、さまざまな情報の共有をしたりすることを通して、いろいろな人と人間関係を広げる楽しさや有意義さを実感している。そして、インタビューで「日本語関係の人と今までほとんど知り合ってなかったんですよ。知り合わない方がいいと思ってましたから、日本語ばかり話す台湾人と一緒におっても、中国語勉強にならんって思って、でも、結局それは違うんやなって {インタビュー2016年6月26日}」と語っているように、それまで考えていた人間関係を作ることにに対する認識に変化が起きていることが明らかとなった。

## (6) [話し合って問題を解決することの重要性]

<山村さんからのメール 2016年3月16日 22時12分>

小池さん、すみません。なんか日本人の二人が突然やめるってことになりました。思ってた活動と違ったようで、仕事自体がストレスだそうです。中国語の勉強しにきたのに、忙しくてできない。ということだそうです。でもこんな急に辞めるって本当ないですわ。なんだかんだ言ってわたしに見る目がなかったってことです。本当すみません。

第8期の日本語回廊では、第7期に参加していた日本人スタッフ2名が帰国したため、新たな日本人スタッフを決める必要があった。そこで、華語センターに通っている山村さんが日本人スタッフを募集することになった。そこで、二人の日本人スタッフが決まり、活動に向けた会議がスタートした。しかし最初の3回の会議には出席し、一生懸命作業をしている様子だったにも関わらず、第一回目の活動当日に突然二人同時に「やめます」と申しでてきた。話を聞いたところ、「自分が思っていたものとは違っていた。仕事が大変だ。」という理由であった。突然二人辞めたことで、2回目からの活動をどうしていくかすべて考え直さなければならなくなった。しかしそれ以上に山村さんは自分の責任だとすべてを背負い込んでいた。その時の彼女の心境を表すメールを提示する。

このように、山村さんは自分を責め、夜もあまり眠れなかったという。そんな状況の中、周さんから一度集まって話し合おうという連絡があった。LINEでグループを作りやりとりをしていたため、その時のLINEのメッセージを提示する。

<LINEのメッセージ 2016年3月18日 18時20分頃>

周さん：日本人二人辞めちゃって、ちょっとやばいね。みんなで集まって会議しませんか。明日集まれますか？

藤田さん：OK。

山村さん：はい、よろしくお願いします。

そして、回廊メンバーみんなで話し合い、周さんの友人である川崎さんが参加できるということで、4班あったグループを3班にすることで解決した。このように問題が起き、みんなで話し合い解決することを通し、[話し合って問題を解決することの重要性]を実感していることがわかった。

## 6-1-7 周さんの場合

周さんは東海大学日本語学科の2年生である。1年生の頃は、日本語回廊によく顔を出す常連であった。その流れから、2015年9月から事務係りとして日本語回廊に参加した。事務係りとして学校との仲介を担うだけでなく、活動の企画や回廊の場にも積極的に参加し、活動を盛り上げていった中心的なメンバーの一人である。周さんへのインタビューは第7期活動終了後と第8期活動終了後に行った。インタビューデータをM-GTAで分析したところ、「たくさんの意見をまとめることの難しさ」「考え方を交流させて活動を作る必要性」「お互いに話し合っ活動を作る実感」「仲間を思いやることの重要性」「自分の仕事に対する責任を持つ」「学校側からの要求の中で悩む」「学校側への対応の仕方を工夫」「日本人と台湾人の仕事の取り組み方の違いを発見する」「参加者との話題の広げ方を見つける」「参加者の反応による反省と喜びの実感」「参考にならない参加者の意見やアンケート」「参加者の顔を見て気持ちをを読む」「参加者の反応を見て活動を作る必要性の実感」の13個の概念を生成することができ、さらに概念同士の関係を検討し、7つのカテゴリーにまとめた。生成された概念を白地に黒字で表し、そこからできたカテゴリーを黒地に白字で表す。

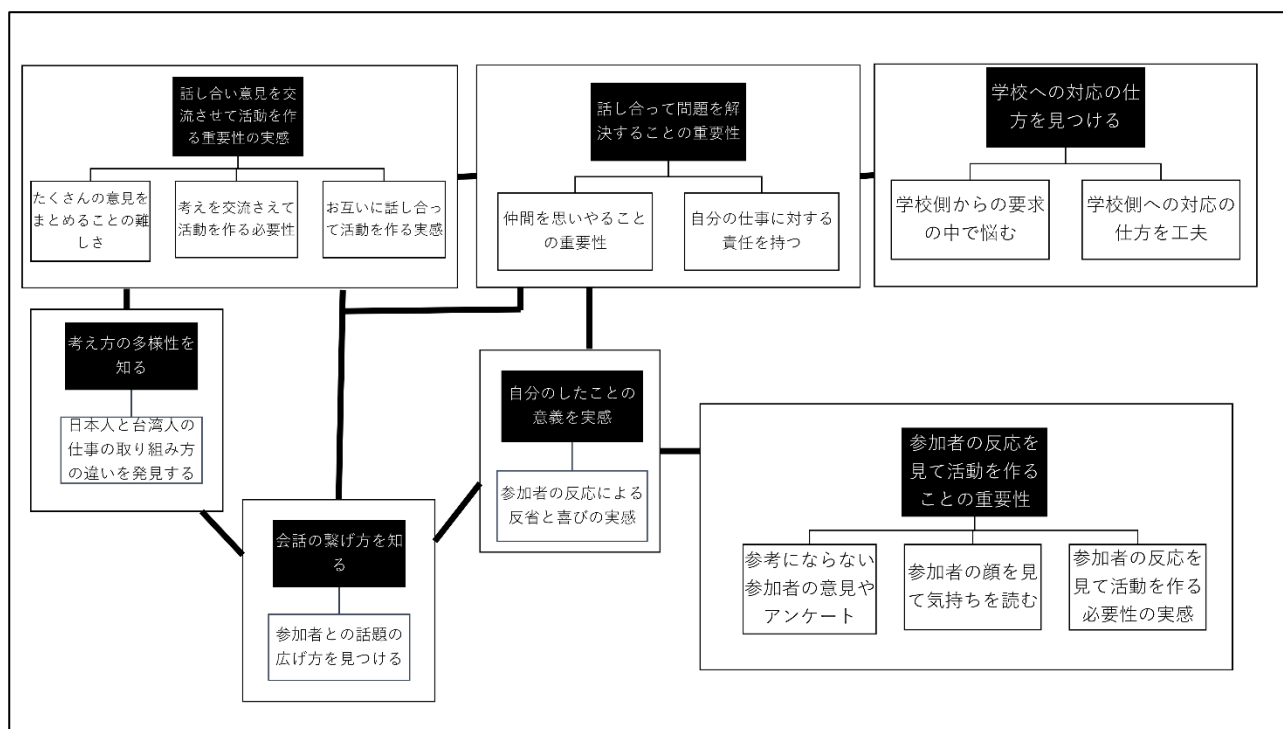


図9 周さんの概念関連図

## (1) [話し合い意見を交流させて活動を作る重要性]

このカテゴリでは、[話し合い意見を交流させて活動を作る重要性]への気づきがあったことが認められる。第7期、第8期の日本語回廊では、活動を運営する上で、週に2回の会議を行っていた。そのため、より沢山の意見を話し合う機会ができた。まず一つ目の概念として、〈たくさんの意見をまとめることの難しさ〉である。これは、スタッフが積極的に会議に参加し、活動の内容や問題点を話し合うことで、たくさんの意見が出たが、その意見をうまくまとめられない状況も同時に発生した。インタビューでは、「みんなの意見をまとめるのは、とても難しい、だから、会議では周さんはどう思うって聞かれた時に、意見を言っても、まとめられないことが多い。{インタビュー2015年12月20日}」と語った。また、意見がまとまらないことで、周さんは自分の意見が無視されているのではないかと感じることもあった。「会議では、ちょっとだけけど、他人の意見を蒸しする時があった。例えば、今学期の回廊は地域によってグループをわけてるじゃないですか。でも、地域によって分けてるのは、大阪と沖縄グループには来てくれる人がいつも多い、でも愛知県と岐阜県に参加する人はそんなに多くないから、みんなで回廊のやり方を考えた時に、わたしは、いつもこんな問題があったから、地域によって分けるのを辞めようって、具体的な解決策も言ったけど、結局地域によって分けるになったじゃん。みんなでやるからね、一人の意見は無視されやすい。{インタビュー2015年12月20日}」と語っている。実際に会議記録を見てみると、意見がなかなかまとまらない様子がよく分かる。次の会議記録では、調査協力者周さんが感じている問題点を提出し、山村さんが司会者として、全員の意見を聞き会議を進めているのだが、林さんや山田さんの意見は少し異なり、限られた時間の中で会議や準備をしなければ成らないため、結局はそれまで通りの進め方で行うことになってしまった。

以下の会議記録を見てみると、周さんが会議で自分の意見を言ったにも関わらず、会議で自分の意見が取り入れられず最終的に自分の意見が取り入れられず、話が流れてしまった出来事は周さんにとって大きな意味を持っている。他者と話し合い決めてゆく中で、その意見をまとめる難しさを実感しているのである。



林さん：如果繼續用現在分組的方法的話有點麻煩。

林さん：因為我們這一組都是朋友的朋友，那要拆開嗎？

周さん：盡量拆開，不然的話，參加的人都集在同一組，我覺得這樣子有些組沒有人，有些組太多人，我覺得要盡量分開。

山村さん：うん。昨日も結局沖縄がいっぱいになったし、大阪もいっぱいになったから。で、岐阜と名古屋が二人だけで、名古屋に座ってって言ったけど、大阪の方にいった。だから、どうしたらいいんかなって。

周さん：さっき話したのは、ある人はアンケートで方言を知りたいって書いてあった。だから、方言について紹介したらどうかなって。

林さん：来週のテーマ。

周さん：うんうん、来週のテーマを方言にしたらどうかなって。

林さんは：2つにする。

周さん：例えば二人の日本人はなんか、擬音語について紹介する、そして二人の日本人が方言について紹介するみたいな。

山村さん：二人、二人。

周さん：2つのグループは方言、2つのグループは擬音語みたいな、来てくれる人は自分で選べる。

～<省略>～

藤田さん：じゃあ、どうやって分けますか。結局班は4つに分けますか。

山村さん：結局みんなが同じテーマになったら、4つに分けるしかないですね。

山田さん：うん。

山村さん：それか、2つにわけろ？

山田さん：方言と若者言葉で2つ2つ？

山村さん：はい、どう思います？今のスタイルが問題だと思っている人もいますが、とりあえず、若者言葉と方言で均等にわけてくようにする。

林さん：オーケー。

山田さん：そうそう、進め方っていうのを次は変えてみたらどうかなって思いますけど、興味あることを話させる。興味あることなら喋ると思うので。次はもっと参加度をあげられるような進め方をするように。

山村さん：じゃあ、スタイル変えますか？怖いな、もう時間ないし。

宮迫さん：なりゆきで。

藤田さん：人数によってやり方のパターンを変える。

周さん：2つのテーマで話したいか、一つのテーマでいいか。

山村さん：えー。どっちでもいいけど、一つの方がわかりやすいかなって。

(各自話す)

山村さん：結局答え出ないですね～。どうしましょう～。

藤田さん：とりあえず、みんな各自で地域毎に若者言葉とかを準備しておいて、やり方は月曜日話し合しましょう。

(昼休み終了)

周さん：もう、わからんけど。

そして、周さんが活動に参加して第8期(2015年10月～12月)の活動では、会議での話し合いの仕方に大きな変化が起きた。周さんはインタビューで、「今学期の会議は本当に良かったと思う。なんて言うか、私たちみんなの意見を山村さんが必ず聞

いてくれた。みんな本当にいい感じで、お互いの意見を聞いて、互いに意見を出し合  
って、考えてる感じで良い活動が作れた。{インタビュー2015年12月20日}」と語  
った。この変化に大きな影響を与えたのは、会議の司会を担っていた山村さんの会議  
の進め方に変化があったことでもあるが、みんなと話し合い、問題を解決すること  
で、<お互いに話し合っただけで活動を作る実感>を得ていることがわかる。

こうした会議における意見のやり取りを通して、調査協力者山村さんは<考え方を  
交流させて活動を作る重要性>を実感している。日本語回廊に関わる学生スタッフ  
は、学年を問わず参加することができる。山村さんの参加した第7期、第8期におい  
ては、同じ学科の一つ上の先輩や、日本から台湾に留学している様々な年齢の学生、大  
学院生である筆者など、年齢も違えば、育った環境も違った学生たちで構成されてい  
る。そのため、それぞれの経験や見方から意見を出し合い、活動を作っていくことが  
できる。山村さんはインタビューで、「みんなの考え方を言い合えば、みんな違うか  
ら、だから他の人の考え方も分かって、参考になる。先輩の人たちや私たちより年上  
の人たちの経験はわたし達よりも多いから、そういう考え方を言い合うことがいいと  
思いました。{インタビュー2015年12月20日}」と、自分とは異なる経験を持つ人  
の意見を聞くことの重要性を感じている。また、日本人留学生という全く文化背景の  
異なる学生と共に話し合う中で、一つの物事に対して、どのように感じているのか、  
両者の意見を出し合い、調整することで、よりよい活動を作っていけることを実感し  
ている。インタビューでは、「同じ事に対してどんな考えがあるか、日本人の場合は  
どうですか、台湾人の場合はどうですかとか、わたしはどう思いますかとか、どうい  
うの。考え方を交流させることが大事、意識共有しなければ、同じ活動をやってい  
く中で、完全にみんなの意見が合うことはないけど、調整すればもっとよくなるから。

{インタビュー2016年6月26日}」と語った。調査協力者周さんは仲間との話し合い  
の中で、自分の意見が聞き入れられなかったり、聞き入れられたり、みんなの異なる  
視点から出てくる意見をまとめる困難を感じながら、いろんな考え方を交流させて活  
動を作っていく必要性を実感している。

## (2) [考え方の多様性を知る]

日本語回廊は台湾人スタッフと日本人スタッフが一緒に活動を企画し運営している。その中で、調査協力者周さんは、<台湾人と日本人の会議の取り組み方の違いに気づく>。インタビューでは、「会議で自分の考え方を言っているのは、ほとんど日本人でしょう。例えば、このことについてどう思ってる。自分の考えを言う人、言える人はほとんど日本人。会議では、中国語を使ってもいいのに、台湾の学生は自分の意見を直接言えない人が多い。{インタビュー2015年12月20日}」と語った。もちろん、これは台湾人、日本人の違いというよりは、個人の経験の有無と関係があるのだろう。しかし、周さんは会議でのやり取りの中から、自分たちができない事を発見し、そこから普段の生活での自分たちの行動を振り返っている。そして、周さんは自分たちの行動について次のように分析している。「会議しているときは、台湾のスタッフは「あーいいと思うよ」とかそんな感じ。でも実はよくないと思う。「いいよ」って言っても、心の中ではよくないと思ってる。責任をとりたくないから、自分の考え方は言わない。誰かがやってくれるから、そこに意見をあわせる感じがする。{インタビュー2015年12月20日}」

このように、客観的に自分たちと日本人の行動を比較することで、自分たちに欠けている部分を知り、その後の行動を変化させている。周さんは自分から意見を言おうと努力し、一学期目の活動の後半には積極的に問題点を提出し話し合いに参加していた。これは、[話し合い意見を交流させて活動を作る重要性]と深い関係にある。日本人と自分たちを比較し、そこから自分たちに欠けている部分を見つけ、積極的に発言をしていく中で、聞き入れられなかったり、聞き入れられたりすることで、話し合っていくことの重要性を実感するに至る。そして、発言に対する考え方にも変化が見られた。第8期終了後のインタビューでは、「もし、わたしはこのやり方が本当にいけないなって思ったら、ちゃんと言わないといけない。何も言わなくて怒るのは、わたしはだめだと思う。意見を出さなくて一人で怒ってたら、関係がよくなるから、活動もうまくいかなくなると、その人もやる気がなくなって責任もなくなる。{インタビュー2016年6月26日}」と語った。2015年12月20日のインタビューでは、自分たちのできていない部分を挙げているが、少し他人事のような捉え方である。しかし、第8期終了後のインタビューでは、自らの実体験と結びついて、発言することに対する新しい認識を得ていることがわかる。

### (3) [仲間への思いやりと責任の重要性を知る]

このカテゴリーは、[仲間への思いやりと責任の重要性を知る]である。日本語回廊は、一人で活動をしているわけではない、仲間の誰かが何かの理由で参加できない場合は、他のメンバーでその仲間の仕事をカバーしなければならない。第8期の日本語回廊のメンバーは各々の学業やアルバイトなどで忙しい人が多く、活動に参加できなかったり、授業の影響で準備に間に合わなかったりということが多々あった。そんな時は、各自が積極的に連絡を取り合い互いの仕事をカバーしていた。周さんはインタビューで、「今学期はみんなの時間があんまり無かった。こういう時は特に仲間思いが大事だと思う。わたしは忙しくて、活動にはあんまり行けないんだけど、わたしの仕事は他の人がカバーしてくれるとか、今回は本当によかった。藤田さんはアルバイトのために忙しくて、活動に時々来れなくて、小池さんとか山村さんが協力してカバーしてたじゃん。そういうのいいね。{インタビュー2016年6月26日}」と語った。周さんは、仲間とのやり取りの中で、相手を思い行動する仲間の姿を見たり、自分も仲間に助けられたりすることを通して、<相手を思いやることの重要性>を実感している。そして、この概念と非常に深い関わりを持っている概念として<自分の仕事に対する責任を持つ必要性>が浮き上がった。インタビューでは、「スタッフとしての責任を持つことが大事だと思います。この活動に対して自分がやらなければならない仕事をしているかどうか。そういう責任です。例えば、私たちがご飯の準備をしているけど、もし、わたしたちに責任感がなかったら、お昼ご飯がないとか、そういう問題が出てくる。それと仲間思いは関係がある。自分が活動に対して責任があって、やる気があるなら、仲間が来れない時とか、自分から仕事をカバーするじゃん。{インタビュー2016年6月26日}」と語った。第8期の日本語回廊では、仲間同士の助け合いが頻繁に見られた。周さんもインタビューで語っているように、お昼ご飯の準備や仲間が用事で来れない時は、来れない人から言うのではなく、周りが「代わりにやろうか？」と積極的に声がけをしていた。周さんは、実際に自分が仲間に助けられ、活動を運営していったことを通して、仕事に対する責任と仲間を思いやることを実感していることが明らかとなった。

#### (4) [学校への対応の仕方を見つける]

調査協力者周さんは、活動の企画運営に関わり学習者と接する以外にも、事務係として学校側とのやりとりを行ってきた。事務係りの主な仕事は、教学支援センターに経費の申請や確認作業、毎週回廊が終わった後のレポート提出、資料（レジュメ）印刷、活動の食事や飲み物を準備することなどがある。第7期、第8期の活動では、手のあいている者が記録の写真を撮影したり昼食を取りにいたりと分担作業を行っていたが、学校側とのやり取りは全て事務係りである山村さんと荘さんが行っていた。日本語回廊は2012年より始動し、教学資源センターからの予算で活動の経費をまかなって来たが、教学資源センターの回廊の担当者が毎学期変わり、経費の申請方法や使用可能な範囲、レポートの書き方なども毎回変更される。しかし、担当者は詳しい決まりや申請方法などを全く把握しておらず、回廊スタッフからの質問にも適切に答えられない状況があるという。その反面、活動の内容には何度も異議を唱えられ、その度に事務係である周さんは＜学校からの要求の中で悩む＞のである。インタビューでは、「まず、今学期は学校に文句言われた。ただ楽しい交流じゃなくて、学校が重視しているのは、学習者の日本語能力がちゃんとあがってるかどうか、それについて。だから、この活動はみんなで交流することが大事なのか、それとも授業と同じ勉強。これについて悩みました。それに、もし改善しなければ経費がなくなって活動できなくなるって学校に言われた。{インタビュー2016年6月26日}」と学校側からの要求と自分たちが目的としているところの間にギャップがあり、そのことで活動が続けられなくなるのではないかと悩んでいることがわかる。そして、そんな状況の中で周さんは一つの答えを出した。それは、報告書をうまく書くということである。インタビューでは、「報告書には具体的にどういう事をしたとか、学習者にとってどういう勉強になったかを書かなきゃいけない。だから、よく嘘を書くんです。例えば、自分の趣味とかそういう話を回廊でしたときは、報告書には学習者は「私は～が好きです。」とか「わたしの趣味は～です」って文型とかを書いて、日本語を勉強したことを報告書に書いた。報告書に学校に満足する内容を書いていけば、学校は満足する。だって本当に関心があるわけじゃないから。誰も見にこないし。{インタビュー2016年6月26日}」と少し皮肉っている部分もあるが、学校との間の問題に向き合い、＜学校への対応への仕方を工夫＞していることが明らかとなった。

## (5) [交流の中で日本語を学習する必要性を実感]

日本語回廊は他者との交流を通して、相手が何を言っているかを聞き、自分の言いたいことを、言葉を組み立てて話すところに意味がある。それは授業で教科書を使ってタスクを達成する勉強とは違い、その場その場の状況に応じて調整しなければならない。周さんは[学校への対応を見つける]のカテゴリーでも、学校が回廊に持つ「日本語能力」という認識と、自分たちが行っている回廊の認識との間に葛藤があったように、ただ単語を教えることは意味がなく、学習者と共に知っている日本語を使って話し、もともと知らなかった言葉も他者との交流を通して学習し、考えや情報などをやり取りすることが必要であり、＜交流の中で日本語を学習することの必要性＞を実感している。インタビューでは、「ただの勉強なら意味がない。例えば、私たちは学習者と話し合うんじゃないで、ただ単語とか教えてたら交流がない。学習者は聞いているだけになる。ひとつのそんなに難しくないテーマがあって、このテーマについて自分の知っている日本語を使って話し合う。この言葉はわたしは知らないけど、他の人はこう言ってる。そういう学習。あと、そこで考え方とか好きなものとか、情報も交換できる。{インタビュー2015年12月20日}」と語っている。周さんのこうした学習に対する新しい認識は、構造的学習観に類似するものである。言語の学習を、ただ言語の知識を取り入れ、指定された表現ができるようになることではなく、他者との関係性の中で、自ら体験したことを意味づけ知識を再構成していくという考え方を日本語の学習として位置づけていると捉えることができる。

## (6) [学習者の反応を見て活動を作ることの重要性]

日本語回廊を企画、運営していく上で、学習者の存在は欠かせない。学習者はどのようなことに興味があるのか、何をテーマにすれば、会話を促すことができるのか常に考えなければならない。活動では、実際に自分たちで決めたテーマで学習者との会話を進めていたが、うまく進まなくなったことで、＜学習者の反応を見て活動を作ることの重要性を感じる＞。インタビューでは、「やっぱりやり方を決めるのが大変だった。やり方と、今週のテーマを決めるのは、最初に決まったテーマによってうまく進まなかったんで、会議の時、テーマを考え直すんだけど、その時、本当に何をやれ

ばいいのって、学習者画境見あるものをやらないと、みんな話さないからね。何をしたらいいかわからなくて、ずっといらいらしていた。学習者の意見とか反応を見て決めなきゃね。{インタビュー2015年12月20日}」と、学習者の興味を考えてテーマを設定していかなければならないと実感している。そして、スタッフたちは学習者が何をしたいのかわかるために、アンケートを用意し、自由に記入してもらった。しかし、アンケートには「楽しい」「面白い」などの感想は書いてあるが、何をしたいかについては書かれていない。実際に会議でアンケートの内容を話し合っている部分を提示する。

<会議記録 2015年10月19日>

山村さん：じゃあはじめましょう。反省から、そこにアンケートあるんで。見ましたか？

周さん：この禮拜的問卷還在嗎？

林さん：在，這裡。

山村さん：内容で分けてあります。グループ毎に反省をお願いします。MOH何を探してるの？

林さん：先週のアンケート。

周さん：あー、回収しないとってこと？ じゃあまずは、全部のグループを見ていきましょう。

<アンケートを確認>

宮迫さん：なんか少ないなあ。

山村さん：あれ、ここ少ない。書いてない人もいるのかな。

山村さん：どうですか？じゃあ、沖縄チームからお願いします。

山田さん：はい、昨日の全体的に難易度は普通って感じで、参加度は高いに丸をつけてくれる人が多いです。内容はおもしろくないが一人もいないですね。

周さん：でも、参考になること書いてないね。楽しいばかり。

調査協力者周さんはインタビューで「参加する人は日本語学科の人たちが多かったから、その人達に「今の活動のテーマはどう？」とか、「何をしたいか」とか「何が好き」とか聞いても、みんなこれでいいよ、楽しいからって答えて全く参考にならない。それにアンケートも「おもしろい」とか「楽しい」とか、そんなのばかりで、そういう言葉はあまり真剣に書いてない感じがする。{インタビュー2015年12月20日}」と語ったように、<学習者の意見やアンケートは役に立たないと感じる>。

そんな状況の中で、周さんは<学習者の顔を見て気持ちを読む>方法を身につけていった。インタビューでは、「反応を見る。人の感情とか、もし面白くない話だったらすぐに表情に出てくると思う。だから、学習者の表情とか、動きとかをよく観察して、この子はこの話題について興味がないねとか、こういう事は好きなんだとか観察した。{インタビュー2015年12月20日}」と語った。普段、日本語を学習していても、授業では相手の反応を見ながら話すことなどはほとんどない。自分の課題やタス

クの練習をする中では、意識は自分の発する言葉に集中し、相手の反応に対してはあまり興味がないだろう。だが、スタッフとして学習者の興味や好きな事柄を知らなければならない状況において、相手の反応を伺いながら話をしている。そして、相手を観察することを通して、人の気持ちを考える勉強になったと感じている。インタビューでは、「なんか日本語を話せない子でも、好きな事を聞けば、反応する。「ああ、わかる！」とか、目とか、分かって聞いている目と、一生懸命聞いている目、全くわからずボーっとしている目とか全然違う。人の動きを観察してその人の気持ちを考える。すごく勉強になりました。{インタビュー2015年12月20日}」と語った。

調査協力者山村さんは学習者の反応を観察することを通して、相手がどう感じているか考える技術を身につけていることが明らかとなった。

## (7) [学習者との話の繋げ方を見つける]

このカテゴリーでは、日本語回廊を進めて行く中で、調査協力者山村さんは学習者とどう接すれば良いかを学んでいることを示している。日本語回廊におけるスタッフ達の主な仕事は、話題を提供し討論する際に、学習者の発話を促したり、話を繋ぐといったファシリテーターの役割を担うことである。日本語回廊に参加し始めた頃は、うまく話を促すことができなかつたり、話を繋げることができなかつたりする。山村さんもはじめは、他の人とどうやって接触すればいいか分からなかつたという。インタビューでは、「やっぱり学習者とのインターアクション、始めたばかりの時は、他の人とどうやって接触するかなんて考えたことがなかつた。どうやって話題を広げるか、最初は何を話していいかわからなかつた。だから、スタッフも学習者も気まずい思いをした。{インタビュー2015年12月20日}」と語った。それまで、相手との話を広げるということを経験してこなかつた山村さんにとって、はじめてスタッフとして学習者と対峙したとき、その難しさを実感している。

そして、他のメンバーの学習者とのやり取りの仕方を観察し、そこからどうやっていけばいいかヒントを得ている。インタビューでは、「他のメンバーのやり取りを見て、わたしも「どう思う？」とか「台湾ではどうかな？」って聞くようにして、学習者のみんなに考えてもらうようにした。{インタビュー2015年12月20日}」と語った。仲間のやり方を見て、自分も実践してみることで、どうやって学習者との話を繋



げるのかを模索していることがわかる。そして、第二学期目の回廊では、一人ではなく仲間全体で一丸となって話を繋げていく体制を作っていた。会議中に、どうしたら学習者との間の沈黙を回避できるかを話し合い、仲間と協力し合う方法を発見した。例えば、あるスタッフが学習者と話をしている、話題が終わりそうになった時に、仲間がすぐに質問などを入れることで、話を繋げることができたのである。インタビューでは、「スタッフ同士でフォローする。例えば学習者から意見が出なくても、仲間がフォローして、雰囲気盛り上げる。もちろん、声が小さいとかどうしても反応がないとかもあったけど、その話題が終わった時に、趣味の話をしている、話が終わってシーンってなるかもしれない。その時に、趣味の話題から別の話題にかえることが出来る。{インタビュー2016年6月26日}」このように、仲間と問題点について話し合い、協力し合うことで、ファシリテーターとして学習者とどう接して行けばよいか、その方法を発見していることが明らかとなった。

#### (8) [自分のしたことの意義を実感]

このカテゴリーは、＜学習者の反応による反省と喜びの実感＞という概念から生成された。スタッフとして回廊に携わって行く上でのスタッフの参加動機やモチベーションにも非常に大きな影響を与える。周さんはインタビューの中で、自分が以前、日本語回廊の学習者であった時と現在を比較し、次のように述べている。「前、学習者として回廊に参加してるときは、ただの学習者だから、今日の内容は面白いとか、このスタッフはいいねとか思ってて、ただの楽しさ。でも、今はスタッフとして参加してる。もちろん準備は大変だけど、大変さもあって、学習者も喜んでくれて、変えるときに「楽しかった」とか「ありがとう」って聞くと本当に嬉しい。{インタビュー2016年6月26日}」と語った。こうした学習者の反応は自分に対してではなく、活動全体に対してであり、仲間たちと協力して作った活動に対して学習者から良い評価をしてもらうことで、自分も達成感を感じているのである。ジョンソン(2010)は協同における効果として、協同学習の場面では、生徒たちは目標達成のしかたは相互依存

的な関係になっている。すなわち、生徒たちは、グループの他の生徒も一緒に目標を達成した時だけ、自分たちの目標に到達できたと考えるようになる<sup>40</sup>としている。

そして、学習者からの反応はスタッフのモチベーションに繋がるだけではない。学習者とのインターアクションを増やすために、様々な努力をしているスタッフであるが、その努力した結果を知るのも、学習者からの反応である。例えば、学習者が興味のあるような話題を自分たちで考えて、その結果として学習者が楽しそうな反応をしたり、インターアクションを促進させることができれば、その話題は良いものであったと知ることができる。インタビューでは、「例えば、屋台について話し合った時は、台湾と日本の屋台についてみんなで盛り上がって話したから、その時は、「ああ！ やっと話してくれた」ってやっと繋がったって感じで嬉しかった。{インタビュー2015年12月20日}」と語った。このように林さんは、学習者からの反応を見ることで、自分のモチベーションがあがったり、活動がうまくいっているかどうか、自分たちの考えた活動内容は学習者にとって興味のあるものかどうかを判断していることがわかった。

これまで見てきた調査協力者達は、それぞれが人間関係や言葉などの問題にぶつかりながらも、話し合い解決していくことで、気づきや新しい認識を得ていることがわかった。しかし、スタッフとして参加した学生みんながみんな問題を解決できるとは限らない。第6期日本語回廊では、12人のスタッフがいたが、その内の5人は途中で来なくなったり、諦めたりして日本語回廊を去って行った。その中で、曾さんが調査に協力をしてくれた。ここでは、曾さんの例を取り上げる。

---

<sup>40</sup> ジョンソン, D.W./ジョンソン, R.T. 他 (2010)

## 6-1-8 曾さんの場合

調査協力者曾さんは、1年生の頃日本語回廊に参加した経験を持つ。今回、日本語学科で履修した「日語分科教学法」の授業の実習として参加した。本人の希望で活動では料理班で活動をしたいということで、日本人スタッフ山本さん、台湾人スタッフ張さん、陳さんの三人のメンバーと料理グループとして活動をデザインしていくことになった。しかし、活動が始まって3回目頃から陳さんは会議、活動共に来なくなり、張さんは初めから来なかった。さらに、残った二人もコミュニケーションが取れていないため、活動がうまくいけなくなり、最終的にやる気をなくしてしまった。

曾さんへのインタビューは、第6期日本語回廊終了後に行った。インタビューデータを M-GTA で分析したところ、「メンバーと話し合えない」「できなかったことへの反省」「協力することの難しさを実感」「協力することの重要性を再認識」の4つの概念を生成することができ、さらに概念同士の関係を検討して、1つのカテゴリーとしてまとまった。

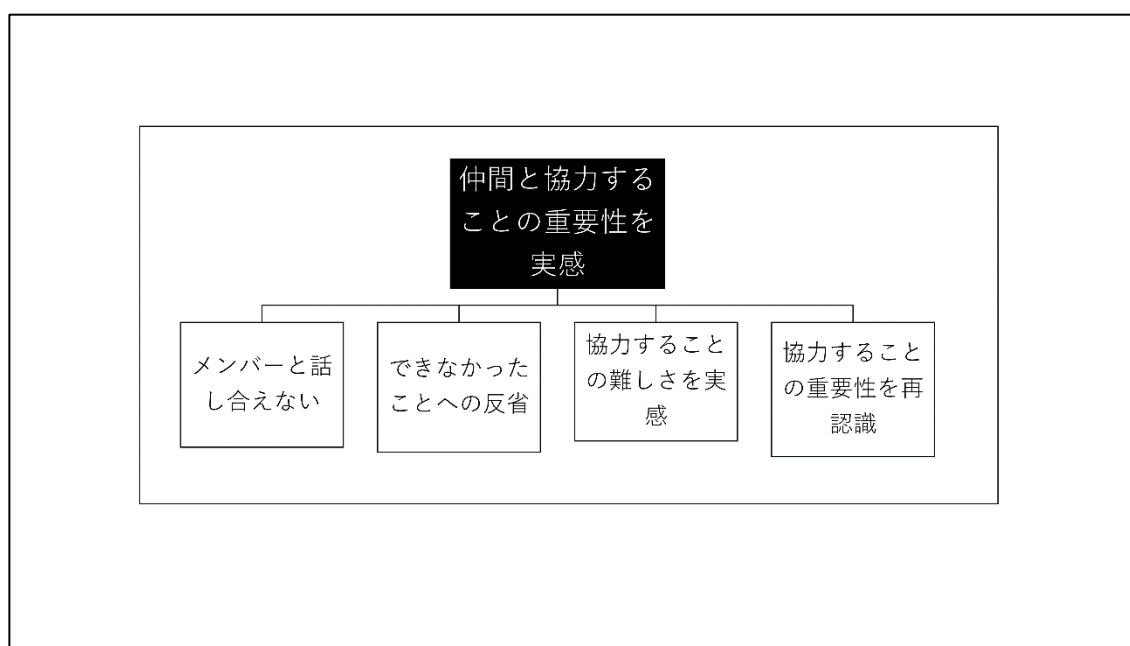


図 10 曾さんの概念関連図

曾さんの参加していたグループは始まってから、様々な問題を抱えていた。その中でも一番大きな問題が、＜メンバーとの問題＞である。料理班のメンバーのうち、二人は来ない、一人とはコミュニケーションが取れない状況であった。インタビューでは、「我們這組一直都不好，有事情啊，聯絡幹嘛就很麻煩，到最後我不想

用了，他們不來就就算了。（わたしたちのグループはずっとだめです。連絡しても、返事がない、最後はやりたくなくなりました。） {2015/6/27} 」とメンバー同士の連絡が全く取れていない状況を述べている。また、「就是那個日本人，山本先生，他只是有時候日文不懂問他這樣。我們無法溝通。（日本人の山本さんには、分からない日本語を聞くだけ。話し合えません。） {2015/6/27} 」と、日本人スタッフである山本さんとも、コミュニケーションが取れず、わからない日本語を聞くという関係であったことを語った。実際に、活動を行っていく中で、同じグループのメンバー同士は話し合い、どのようにしていくか一緒に決めていかななくては、活動はうまくいかない。日本語回廊の会議中にも、グループの様子が伺えるやり取りをしていた。

<会議日時：2015年4月2日>

小池：じゃあ、料理班はどんな感じでしたか？  
曾さん：グッド！  
小池：具体的に言うと？  
山本さん：いや、やってねえじゃん。これやってって言ったのに。  
曾さん：あはははは（苦笑）  
山本さん：どうでしたか、昨日は。  
曾さん：うん・・・、よかった。  
山本さん：まあ、ウチらは方向性しっかりあるから、作って食べる。  
曾さん：うん、可是（でも）・・・。  
小池：何かあるなら、言ってください。  
山本さん：大丈夫だよ。  
曾さん：うん、問題ない。

この会議記録から、料理班では全く連携が取れていないどころか、話し合いも行われていなかったことがわかる。料理班の状況を聞かれて、曾さんは「グッド！」と答えている。各班ともに何かしらの問題は抱えており、会議では問題について話し合われているのだが、曾さんはそこで問題を提出しなかった。そして、同じグループの山本さんは、「いや、やってねえじゃん。これやってって言ったのに。」と曾さんの「グッド」に対して突っ込んでいる。この二人の関係性については、山本さんは、メンバーと一緒に作っていこうというスタンスではなく、自分で決めたことを上から投げするようにしてメンバーと接していた。そのため、曾さんは自分の意見をなかなか言えず、上記の会議記録でもその光景が反映されている。曾さんは「うん、でも・・・」と何か言いたそうな雰囲気であるが、山本さんが再度「大丈夫だよ」と

念を押すようにして、話が終わった。また、料理班は4名のスタッフがいるにも関わらず、会議や活動に来るのは曾さんと山本さんだけで、あとの二人は全く来ない状況であった。インタビューでは、「他們兩個有時候來有時候不來，有一天突然傳簡訊給我說要做什麼，但是有時候本人不來。（二人のスタッフは、来たり来なかつたりだったが、突然、メッセージで連絡をしてきて、「これから何をすればいいのか」って言ってきて、一緒に活動の当日何をするのか決めます。でも、本人が来なかつたり。{2015/6/27}」と語った。料理班は、曾さん、山本さん以外に、張さんと頼さんが参加していたが、張さんは初めから一回も来ず、頼さんは3回目から来なくなった。二人とも、日語分科教学法の授業を履修しており、その実習として参加したものである。そのため、期末に近づくと、張さんがレポートのために、突然参加し始めるという状況があった。会議記録を見ても、2015年6月11日から張さんは、会議に参加している。以下、会議記録を提示する。

<会議日時：2015年6月11日>

小池：料理班はどうですか？ここ2回（学習者は）誰も来なかったですが。  
張さん：そして、昨日は私と曾さんと一緒に授業のレポートを相談します。最後の期末レポート、評価と仕事を分けして。  
小池：それはいいとして、どうして学習者が来なかったんでしょうかね。  
張さん：大丈夫、レポートはできます。  
山本さん：学習者はみんな、料理班は終わったと思ってる。  
小池：それはちょっとおかしくないですか？あと二回残っていますが。  
張さん：大丈夫、後でメールでアンケートします。

このように、張さんは、自分のレポートの為に曾さんに連絡をして、最後の方になって参入したのだが、自分のレポートの話ばかりで、活動については全く考えていない。この日から曾さんは会議にも来なくなり、筆者が連絡した時には、「もうやりたくない」と話していた。

日本語回廊の活動を作っていくということは、とても一人でできる作業ではない。そのため、同じグループのメンバーがそのような状況の中で、活動に問題が起きたとしても、首尾良く解決していくことはできない。

曾さんは、活動の中で度々問題を感じながらも、解決できずに日本語回廊の最後を迎えた。インタビューでは「最後覺得真的不知道這個組到底可以做什麼。其他沒什麼特別學到或很好玩，雖然還是有人來參加，可是我不知道他們為什麼來參加，就是感覺不好。（最後このグループは一体何ができるのか分からない。特に勉強できることもない、おもしろくない。学習者は来るけど、なんで来るのかわからない。よくない。）

{2015/6/27}」や就是跟當初想的不一樣。每一次活動沒什麼事情可以做。除了料理之外沒什麼可以做的事情，不知道為什麼有人來參加。（最初に考えてたのと違った。毎回の活動で、特にできることがない。料理以外は特別なことがないのに、なぜ学習者が来るか分かりません。）{2015/6/27} というように、自分では面白くないと感じ、なぜ学習者が来るのかわからないと、活動自体が問題だらけなことを認識していたが、その問題を解決するには至らなかった。インタビューでは、「我們組有問題，但是參加的人會來，也會做料理，硬要繼續的話，可以做下去，所以不用改。（問題はありますが、学習者はきます。料理も作ります。そのまま続けても、活動は続きます。だから、変えなかった。）{2015/6/27}」と現状維持をする姿勢であったことがわかる。

その後、日本語回廊の活動が残り2回あるにも関わらず、曾さんは活動に来なくなってしまった。このように途中で抜けてしまった曾さんだが、日本語回廊で自分たちができなかったことを反省し、次のように語った。「就是我們應該可以做別的方向，像其他組，每天有不同題目，可以聊天，可是我們都沒有做到。（他の班みたいに、毎回違うテーマでおしゃべりしたり、別のやり方があったはずですが、でも、できなかった。）{2015/6/27}」

また、インタビューで、「我們要辦這種活動，一定要大家合作，但是我們並不是合作關係。こんな活動をするには、みんなの協力が必要です。でも、わたしたちは協力関係じゃなかった。{2015/6/27}」と語っている。このように、活動の中ではメンバーとうまく関係を築くことができず、問題も解決することができなかったが、実際に他者と協力して一つの活動を作っていくことの難しさを経験し、[仲間と協力する重要性を実感]していることが明かとなった。

## 6-2 分析のまとめ

前節では、調査協力者一人一人のインタビューデータを「概念」という塊で個々の新しい認識や、意識の変化を捉え、その現象が起因している背景を明らかにしてきた。しかし、それだけでは、協働における対話が生む学びとして、全体像を知ることにはできない。そこで、全ての調査協力者から生成された概念をもう一度整理し直し、重複する概念名の統合を行い、さらにそこから概念間の比較検討を通して、概念を説明するカテゴリーを生成した。カテゴリーと概念は、表 8 に示す。

カテゴリー	概念
自分の学習言語に対する認識	上手になるために日本語を話す
	単語や文法を覚えることが勉強
	自分の学習言語に自信がない
人間関係に対する考え	学習のために作る人間関係
活動を作る努力	参加者のために仲間と一緒に準備する
	自分たちで活動を作っていく意識を持つ
参加者との問題	参加者との沈黙
	参加者のニーズがわからない
運営上での問題	学校側からの無理な要求
	会議でみんなの意見を引き出せない
仲間とのコミュニケーション問題	協力することの難しさ
	メンバーと話し合えない
	積極的でない人と一つのことをする大変さ
コミュニケーションを促す工夫	コミュニケーションを促す話題を探す
	相手の反応を見ながら話す
	相手に合わせて言葉を調整する
	意見を引き出す方法の模索
	問題を話し合う
仲間とのコミュニケーション問題	自分の考えを相手に伝え話し合う
問題の解決	参加者との問題の広げ方を見つける
	参加者の顔を見て気持ちを読む
	意見を引き出した実感
	活動の中で自分の役割を見つける

カテゴリー	概念
	会議の効率を上げられた実感
	話し合っ解決
	自分から伝えることで相手が変わる実感
状況の中で言語を学ぶ	わからない単語や言葉を聞く
	自分の話したいことを苦労して話す
参加者の反応	参加者の反応による喜び
	台湾人スタッフの視点を取り入れなかった反省
	できなかったことへの反省
	参加者の反応による反省
考え方の多様性を知る	メンバーの考え方ややり方の多様性を知る
	参加者の多様性を知る
話し合っ問題を解決することの重要性を知る	たくさんの意見をまとめることの難しさ
	他者に理解してもらうことの重要性を知る
	相手の顔を見て話すことの必要性を感じる
	分担協力して作業することの重要性を実感
	仕事と怖いという気持ちを分けることの必要性
	ちゃんと話して相手に伝えることの重要性を知る
参加者の反応を見て活動を作ることの重要性	参加者の反応を見て活動を作ることの重要性
仲間意識と人間関係の構築	スタッフとの良い関係ができる喜び
	いろんな人と関係を作ることの重要性
	仲間を思いやることの重要性
自分のしたことの意義を実感	活動を作り上げる実感
	自分の行動に意義があることを実感
	お互いに話し合っ活動を作る実感
スタッフとしての責任の芽生え	自分の仕事に対する責任を持つ
日本語を話す事に対する認識の変化	言語学習の仕方に対する認識の変容
	日本語を使うことに対する意識の変化
	自分の日本語に対する自信の芽生え

表 8 全体の概念とカテゴリー一覧



表8で出てきた、概念とカテゴリーを日本人留学生と台湾人日本語学習者が協働で学習支援活動を運営していく中で、スタッフたちの行動や他者との関わりの変化、変化を生み出した要因などについて、生成したカテゴリーと概念をもとに説明する結果図を作成した。ここでは、図11に沿ってストーリーラインを見ていく。それぞれ生成された概念を細ゴシックで、カテゴリーを太ゴシックで表す。

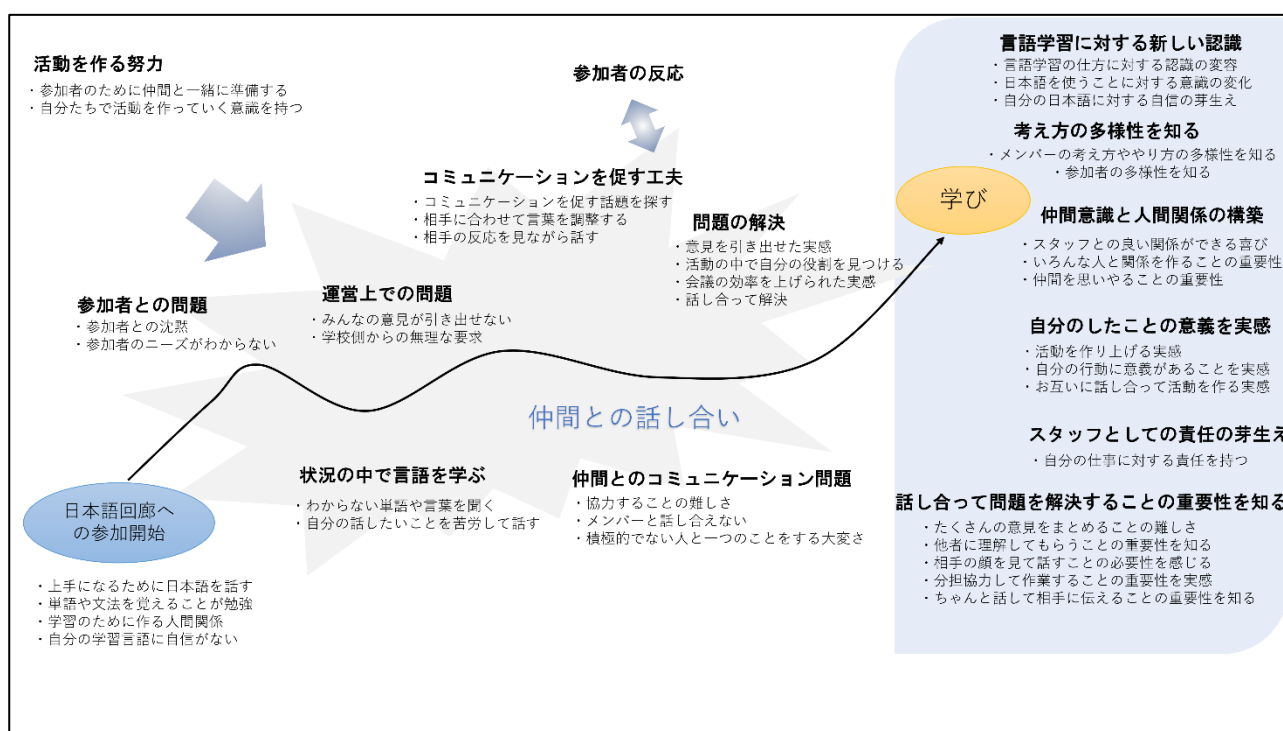


図11 協働における対話が生む学びの結果図

日本語回廊に参加し始めた頃、スタッフたちは自分の学習言語を学習する、学習者であり、そんな彼らは<上手になるために日本語を話す><単語や文法を覚えることが勉強><学習のために作る人間関係><自分の学習言語に自信がない>という考えを持っていた。日本語回廊を運営していく中で、<参加者のために仲間と一緒に準備する><自分たちで活動を作っていく意識を持つ>というように活動の中で参加者に対する働きかけを行わなければならない。仲間と話し合いながら活動を作っていく過程で、「参加者との問題」や「運営上での問題」、そして「仲間とのコミュニケーション問題」などが発生する。「参加者との問題」には、<参加者との沈黙><参加者のニーズがわからない>などの問題があり、「運営上での問題」には、<みんなの意見が引き出せない>や<学校側からの無理な要求>などの問題がある。みんなの意見が引き出せないというのは、会議の運営上スタッフがあまり意見を言わず、思うよう

に会議が進行しないという問題があり、仲間と話し合い解決に向けて「コミュニケーションを促す工夫」などを行っていくことで、仲間や「参加者の反応」を通して「問題の解決」の実感を得たり反省したりする。また、活動を運営していく中で、自分の学習言語でやり取りを行うことで、「状況の中で言語を学ぶ」ことを経験していくのである。そして、そうした仲間や参加者とのやり取りを通して、「言語学習に対する新しい認識」「考え方の多様性を知る」「仲間意識と人間関係の構築」「自分のしたことの意味を実感」「スタッフとしての責任の芽生え」「話し合っただけで問題を解決していくことの重要性を知る」の学びを得る。以下に、それぞれのカテゴリーについて代表的な発話例と共に説明する。

### 6-2-1 スタッフとしての責任の芽生え

活動の成功という目標に向けて、仲間と活動を作っていく。そのためには、一人一人が[スタッフとしての責任]を持たなければならない。しかし、こうした[スタッフとしての責任]は、活動に参加すると同時に芽生えるものではない。活動を運営していくなかで、うまくいかなかったり問題にぶつかったりする中で、少しずつ芽生えてくるものである。調査協力者森さんはインタビューの中で、「日本語回廊は僕が思うに、自由はすごくあると思うんですよ、形はあるとしても、考え方次第でこれがよかったんじゃないって次はこうしてみようとか、ダメだったら他のことができる。でも、スタッフ側が何かしないってということになると思うんです。{インタビュー2015年6月29日}(森さん)」と語った。活動を運営していく中で、その特徴を理解し、自分たちで作っていかなければならないというスタッフとしての実感を得ている。また、中国語話者であるスタッフにとって日本語を話すことは、<支援者として日本語を話さなければならない>という意識を持っており、学習者が日本語で話すよう、自分は中国語で話さないように心がける。インタビューでは、「日本語は、しなければならないこと。回廊の時に日本語で話す。日本語を、日本語で話さない、学習者も日本語で話さない。{インタビュー2015年6月29日}(林さん)」と語った。

そして、活動運営の中で問題にぶつかることを通して、学習者からスタッフへの意識の変化が起きている。「あのとき、回廊全部で、2回目か3回目の回廊で状況がはじめてあった。だから、回廊のテーマはお勧めの場所だけど、行きたい場所に話がずれ

てしまって、みんな話さない状況。そういう問題、はじめてあった。だから、どうしようって。{インタビュー2015年6月29日} (林さん)」というように、活動中で起きた問題と向き合い、不安に感じることで、スタッフとしての意識を身につけている。スタッフとしての意識が芽生えることで、自分の仕事に対する責任を持つようになる。「前学期やってたから、これからも続けることは、一つの責任 {インタビュー2015年6月29日} (王さん)」や「スタッフとしての責任を持つことが大事だと思います。この活動に対して自分がやらなければならない仕事をしているかどうか。そういう責任です。例えば、私たちがご飯の準備をしてるけど、もし、わたしたちに責任感がなかったら、お昼ご飯がないとか、そういう問題が出てくる。{インタビュー2016年6月26日} (周さん)」で言及しているように、日本語回廊のスタッフとしてやるべき責任、続けていくことの責任を持つようになる。

このように、ただ初めからスタッフとしての意識や責任を持つのではなく、活動を運営していく中で、問題や葛藤を経験することで、少しずつ持つようになるものだと考えられる。

## 6-2-2 自分のしたことの意義を実感

日本語回廊の活動の対象は参加する日本語学習者である。彼らの日本語の実践の場として、さまざまなテーマや活動を準備し、日本語を話すお手伝いをすることに目的がある。そのため、参加者の反応は活動を運営するスタッフにとって極めて重要なフィードバックとなる。前項で挙げたように、学習者との間の沈黙や、あまり積極的に話そうとしない学習者の発話を促すために、どうしたら良いか仲間と話し合い、その方法を実施する。

インタビューでは、「学習者から反応があった時、やっぱりわたしは沖縄が大好きなので、紹介したときに、沖縄と台湾とこういうところが似てるねっていった時に、「えーそうなんだ！って驚いて関心してくれたときは、よっしゃ！って思いました。そんな反応があったときがうれしかったですね。{インタビュー2015年12月23日} (山田さん)」や「一番うれしかった時は、自分が持ち出した話にもっと質問がきたときとかがすごくうれしかったですね。やっと話してくれたって。逆に反応が無いときは、どうしていいかわからなくて、ちょっと難しかったかなとか、いろいろ自分で

反省しました。{インタビュー2015年12月16日} (宮迫さん)」と自分が考えた話題に対し、学習者の良い反応があることで、喜びを感じている。そして、一方で学習者の芳しくない反応によって、話題や活動内容を反省する。「回廊をやってくなかで、台湾の子の日本についての見方ですかね。スタッフとして、もっと(学習者が)知りたいことを伝えたいなって思ったんですけど、わたしがこれは面白いって思っていることと、向こう(学習者)が知りたいって思っていることが全然違ったりするので、難しいです。それに、もし興味がなかったら来てくれなから。{インタビュー2015年12月16日} (宮迫さん)」というように、自分が面白いと思ったことでも学習者はそう思わなかったり、学習者のニーズとのギャップから学習者が来ないことを気にしている。

学習者の反応からは、自分たちの考えた活動の善し悪しを判断する以外に、スタッフ達の達成感や喜びに繋がっている。インタビューでは、「前、学習者として回廊に参加してるときは、ただの学習者だから、今日の内容は面白いとか、このスタッフはいいねとか思ってて、ただの楽しさ。でも、今はスタッフとして参加してる。もちろん準備は大変だけど、大変さもあって、学習者も喜んでくれて、帰るときに「楽しかった」とか「ありがとう」って聞くと本当に嬉しい。{インタビュー2016年6月26日} (周さん)」や「いろいろ準備して、学習者(学習者)のおもしろいや勉強になったということを知り、うれしいです。{インタビュー2015年6月29日} (王さん)」など学習者から感謝されることで、[自分のしたことの意義を実感]している。また、日本語を学習しているスタッフにとって、日本語は学習するものであるが、「友達ができること。あそこ(回廊)では、後輩や他の学科の学生と知り合うことができます。だから、どこかで会った時はあいさつをしたり、ある時、一人の後輩と知り合って、ある日、メールで(日本語で)教えてほしいところがあるって連絡があって、わたしの日本語で役にたった時、とても嬉しかった。{インタビュー2015年12月2日} (林さん)」や「回廊をやってよかった。日本語がうまくなったと思うけど、具体的にはわからない。でも、日本語でなにかしたこと、日本語の能力じゃない。これは、テストとは違う。{インタビュー2015年6月29日} (王さん)」と語っているように、自分の日本語が他者の役に立ったこと、日本語で何かをしたことについて喜びを感じている。

このように、学習者のために活動を考え実施していく中で、学習者からの反応があり、その反応を通して[問題解決の実感]を得たり、[自分がしたことの意義を実

感]している。つまり、自ら発信し、他者とのインターアクションがあることで、スタッフたちの活動持続への動機や言語を使うということに対する考え方に大きな影響を与えていると捉えることができる。

### 6-2-3 言語学習に対する新しい認識

#### (1) 言語学習に対する新たな認識

第二外国語を学習する人にとって、学習言語を自由自在に操れるようになることは、一つの大きな目標である。しかし、筆者もそうだったように、外国語を学習していく過程で、その学習言語が上手になるためにはどうしたらいいかということを考えるようになり、「とにかく話す」や「単語をもっと覚える」など様々な考えが浮かんで来るようである。その反面、実際に試行錯誤しながら学習言語を使っていくことに対して臆病になったり、まずは単語や文法を覚えるというステップを踏む必要があると考える傾向にある。インタビューの中では、「わたしは日本語を話すのが苦手、でも話さないとうまくなれない。{インタビュー2015年6月29日} (林さん)」や「日本語が上手になるために、勉強する。(小池：どんな勉強ですか?) 日本人と話す。

{2015年3月6日} (王さん)」などと、<日本語を上手にするために話す>という意識を持っていたり、「わたしは、日本で英語を専攻してるんですけど、話さんと上手になれへんのはわかってて、でもそんな英語を話す環境もなくて、結局テストのために覚えてました。{インタビュー2015年7月2日}」というように、テストために学習言語を勉強するようになる学生もいる。また、学習の捉え方については、「どんな勉強・・・、主には日本語、先生が教えた事を勉強して、後はなんか自分の知りたい事の授業を聞いたり、調べたり、勉強してる。{2015年3月6日}」や「跟日本人聊天，可以自己，就是，就可以問自己有興趣的問題，然後，得到跟上課不一樣的知識，從日本人那邊得到不一樣的知識，我覺得很有趣(日本人とおしゃべりする、自分で興味のある問題を聞く、そして、授業とは違う知識を得る。日本人から違った知識を得ることは、面白いことだと思います。){インタビュー2015/3/8}」というように、知識を受容したり、先生から教えられることが勉強であると捉えている。

以上のような、言語学習に対する認識を持ち、日本語回廊に参加したスタッフたちだが、日本語回廊の活動を企画、運営していく中で、言語学習に対する認識に変化が見られた。日本語回廊の活動を企画、運営していく上で、台湾人スタッフ、日本人ス

スタッフ、日本語学習者（日本語回廊の活動に参加しに来る学生）との間には、それぞれの学習言語によるやり取りが行われる。その相手、状況に応じて話さなければならない。インタビューでは、「回廊の時に日本語を話す。日本語を、日本語で話さない、参加者も日本語で話さない。だから、日本語で話さなければならない。{インタビュー2015/3/8}」というように、日本語を話さなければならない状況にあったことを述べている。自分が参加している状況の中で、学習言語を聞いて話すということは、バフチンの言語活動の概念からすると、自分の所属する経済的組織の中で、お互いの経験や考え、意見を交流させるということと同じである。そこでは、学習のためではなく、生産や創造に向けた活動を首尾良く行うために、言語による交流が行われるのである。そうした言語活動を通して、スタッフたちは自分の学習言語の言葉や表現方法を試行錯誤しながら見つけていくのである。インタビューの中では、「回廊の場所に行けば、中国語が勉強できる。これは、私自身の機会なんですけど、回廊のみなどと話してたら、私の知らない単語が次々に出てくるんで、これは何、これは何って聞いて、それを勉強して、それを聞くから逆に日本語を教えることもできます。お互いに勉強し合うことができますね。{インタビュー2015年7月2日}」や「就日本人他們在我們開會的時候就是都講日文，就可以聽他們是去怎麼表達一件事情，所以是一種學習。然後我也講自己的想法。（日本人は会議の時日本語を話します。そのとき、彼らがどのように一つのことを表現しているのかを聞きます。これは勉強です。そして、私も自分の考えを言います。）{インタビュー2015/6/29}」というように、メンバーや学習者たちとやり取りをする中で、相手から出た言葉を聞いて、そこから新しい言葉の意味や表現方法を学んでいる。さらに、学習言語を使ってやり取りをする中で、聞き取れない言葉や、知らない言葉が出てくるのは当然である。そこで、「會議的時候常常有他們在講什麼東西。聽不出來。就是有時候講的一瞬間聽不懂，但後來聽一聽才發現原來是那個。猜一下，而且那個不會一下就過去，他們通常會有前後文，所以可以猜一下。也有猜錯的時候。（會議の時、よく何を言っているかわからない時がある。聞いてわからない。一瞬わからない、でも後で聞いていると、そういう意味だったのかってわかる。推測してみる、それにそれ（話題）はすぐに通るすぎない。前後に内容があります。だから推測できる。間違えることもあるけど。）{インタビュー2015/6/29}」というように、前後の話の内容から、わからない言葉を推測するのである。

このように、他者とのやり取りの中で、試行錯誤しながら相手の言葉を理解し、また同時に新たな言葉や表現方法を学んでいるのである。

## (2) 言語を使うことに対する認識の変化

自分の母語で話をする際、相手が同じ母語話者であれば、自分の話し方で相手に伝わっているかどうかあまり気にすることはない。しかし、相手が非母語話者である場合、相手が理解しているかを考えて話さなければならない。日本語回廊に参加しているスタッフは会議や活動の中で、台湾人スタッフや日本語学習者と日本語で話すことを通して、〈自分の話す言語に対する認識を深める〉のである。インタビューでは、「わたしは今まで自分の関西弁を意識したことがなかったんですけど、回廊で方言について話した時に、わたしは大阪なんで、関西弁ってなって、でも、何が関西弁なんだろうって、よく友達に、それは関西弁だよって言われたりしてたんですけど、関西弁についてはじめて勉強しました。それで、その言葉がどんな意味なんかを説明できるようにしました。{インタビュー2015年12月16日}」というように自分の話している言葉への認識を深めたり、「勉強っていうのは、自分の話し方ですね、相手（参加者）にあわせて自分の話し方を変えるというか、ゆっくりとか、あとわかりにくい言葉は他の言い方で話すとか、似てるけど、相手にどう伝えればいいのかとか、特に母語が同じ人じゃないんで、なかなか伝えるときの日本語をなるべくゆっくりして、聞き取りやすいようにって意識はしてましたね。日本人相手にしゃべる時は考えたことなかったんですけど、相手が日本語が母語じゃないんで、そこは考えさせられましたね。{インタビュー2015年6月29日}」や「台湾の子と話すときとか、もっときれいな日本語話さんといけんなって思いました。特に、日本語回廊やない子らと話すときは、わたしは十分きをつけてたつもりなんですけど、全然わかってもらえない時もあるって、そしたら藤田さんとかが、はっきり話さないとわからないって言ってきて、ちょっと自分の日本語っていうのを考えさせられましたね。{インタビュー2015年11月25日}」というように、相手にわかりやす言葉を意識している。

また、スタッフたちは、学習言語を話すということに対して、日本語回廊に参加しはじめた頃は、「就是有日本人，可以跟他說日語。可以練習口說，這個是口說的勉強，因為我不太會說，所以需要練習口語。（日本人がいるから、彼らと日本語を話す。会話の練習ができる、これは会話の勉強です。わたしはあまり話せません。だか

ら会話の練習が必要です。) {インタビュー2015/3/8}」や「我不敢説日語，因為會很害羞，就是應該是很多學語言的一個要克服的點。(わたしは、恥ずかしくて日本語を話せない、これは言語を学習する多くの人が克服しなければならない点です。{インタビュー2015/3/8})」というように、自分の日本語を上達させるために話すという意識を持っていたり、「日本人と日本語を話す機会、大事です。それは日本語や日本語の文化を知る。{インタビュー2015年3月6日}」と自分自身の日本語や日本の文化を学ぶために日本語を話すという認識を持っていた。

しかし、日本語回廊で日本語を使っていく中で、自分の学習のために日本語を話すのではなく、学習者の為に日本語を話すという意識が生まれる。インタビューでは、「学習者が日本語を話すために、いろいろ準備して、話します。{2015年6月29日}」や「なんか、勉強したことはたくさんある。うーん、話すこと。司会を……。回廊の時、状況班の司会。静かになった瞬間を、早く何かを話すという。どうすれば、(参加者との)話を繋げられるか、それを考える。{2015年6月29日}」というように、学習者とのコミュニケーションを促すためにどのように日本語を話せば良いのかを考えている。

そして、「自分の考えを話すために日本語を話す」という意識が生まれるようになる。言語活動は、イデオロギー現象であるとバフチンは述べている。発する言葉には自分の社会的背景や考え方が含まれている。しかし、文法を覚えたりタスク達成を目標にした会話練習の中では、その目的がタスクを達成するという点にあるため、イデオロギー現象とは言えない。日本語回廊では、台湾人スタッフと日本人スタッフが共に話し合い活動を運営していく、そのためには両者の学習言語である日本語、中国語でのやり取りも行われる。中国語で伝わらなければ日本語でも伝えなければならない。スタッフたちは、会議の中で学習言語を使って、自分の考えを相手に伝えるということを行っているのである。インタビューでは、「授業では、用意されてるものがあるんで、それを言うだけ、会話も準備されたものを話すかんじなんですけど、日本語回廊では、全て自分で準備して、話したいことがあって、それを準備するんで、ぜんぜん違いますね。苦勞して相手と話せたときの楽しさがありましたね。{インタビュー2015年6月29日}(森さん)」や「日本語で自分の考えることを話す。これは大変です。でも時々中国語で話します。{インタビュー2015年6月29日}(林さん)」というように、自分の話したい事や、相手に伝えなければならない事柄を日本語で話し、相手に伝わることで達成感を得ていることがわかる。また、そうした活動の中



で、自分の考えを如何にして相手に伝えるかということが重要だと考えるようになる。インタビューでは、「回廊でいろんな人と話して、自分をどう（考え）アピールするかが大事だと分かった。それは授業では学べない。うーん、自分の考えを相手に伝える力。そういう力が必要。{インタビュー2015年6月29日}（王さん）」と述べている。

他者とのやり取りを通して、自分の話す言語への認識を深め、相手の理解を意識して自分の話し方をスピードを調整したり、相手がわかるように自分の意見を伝える努力をしていく中で、「自分の言語学習のために話す」という認識から、「自分の考えを相手に伝えるために話す」という認識へと変化していると捉えることができる。

### （3）自分の学習言語に対する自信の芽生え

第二言語を学習する中で、自分の言語に対して自信を持つことができるということは、自分の学習動機を維持する上でもとても重要になってくる。学校で言語を学習する中で、自信に繋がることと言えば、日本語能力検定や中国語検定などで良い成績をとったり、先生に褒められたりした時であろう。日本語回廊のスタッフとして、学習者と関わっていく中で、自分の考えを相手に伝えられたり、相手の話している内容を理解することができた時に、自分の学習言語への肯定的な評価と繋がる。「回廊をやっているときに、自分で中国語でしゃべって説明しなければならない時、あってるかどうか分からなくて、自分ではぜったいこうって分かってるものしか言えなくて、それでもうまく言えなかったりしましたね。{2015年12月16日}（宮迫さん）」のように、はじめは自信がないながらも、自分の学習言語で相手に伝えようと努力することや、「でもやっぱり、自分で中国語で言ってみて、通じん時もあるんですけど、参加者が分かってくれた時は、あ～そう言えばいいんやってわかって、そんなとき嬉しいです。{2015年12月16日}（宮迫さん）」と、試行錯誤することを通して、相手に伝わることで、達成感を感じる。また、日本語回廊の会議では中国語と日本語の両方の言語が飛び交う。その中で、日本人スタッフは自らの学習言語である中国語を聞き、台湾人スタッフは日本語を聞いて理解しなければならない。誰もがはじめからその学習言語でやり取りをする環境に入って、すぐにできるものではない。台湾に来て中国語の勉強を始めたばかりの宮迫さんは、「会議とかではじめは全然わかりませんでしたね。中国語がわかるっていうことは大きいと思います。台湾の子たちが

何を話しているかわからないと、話が進まないのでも聞いてみると、わかるようになってくるんですね。{2015年7月2日} (宮迫さん)」や「最初の頃は、会議で中国語がでると、何を話してるんやか全然わからなかったんですけど、今学期は結構聞いてわかりました。わたしらで運営してるってなので、状況はわかっていますし、その中で中国語になれましたね。{2015年7月2日} (宮迫さん)」と、はじめは会議で何を話しているのか理解できなかったが、その状況と照らし合わせながら聞くことで、理解できるようになったと述べている。「わかるようになる」というのは、自分の中国語に自信がつくきっかけであると考えることができる。

そして、自分で自分の成長を感じ、自信を得る他に、日本語回廊では日本語学習者からの反応によって、達成感を感じる。林さんは、「うれしい。認識朋友，在那邊就是有些學妹，認識一些學妹和外系的，然後在路上遇到可以打招呼，或是因為在那邊認識一個學妹，然後那時候她就是有一天傳訊息有需要幫忙，然後可以幫上忙，那時候還蠻開心的。我的日文有幫得上忙，我覺得蠻開心的。(うれしい。友達ができる、そこでは後輩もいて、他学科の後輩とも知り合える、そしてあったときに挨拶したり。後輩と知り合って、あるとき助けてほしいと連絡があった。そして、手伝うことができるととてもうれしかった。わたしの日本語が役にたってうれしかった。){インタビュー2015年12月2日} (林さん)」とはじめは自分の日本語に対して全く自信がなかったが、後輩から頼られ、役に立つことで、自分の日本語に対して自信まではいかないにせよ肯定的に考えられるようになったのではないだろうか。また、「うれしい、ふん、フフフ。回廊でなんか来た人に日本人に間違えられたとき、はすごくうれしかった。最後に、日本人ですか?って聞かれて、うれしかった。わたしは、言語と見た目ですべて日本人になりたいから。{インタビュー2015年12月2日} (王さん)」と日本語学習者から直接日本語を褒められることで、自分の話す日本語に対して自信が芽生えている。

#### 6-2-4 考え方や文化の多様性を知る

日本語回廊では、テーマに基づいて学習者と話し合うことが活動の中心である。ここでは、各々の考え方や文化などを討論する。その中で、<学習者の多様性><台湾の文化や同世代の台湾人の考え方を知る>。インタビューでは、「そうですね、一つの班が10人くらいでいろいろな、いろいろな考え方があるんだなって、とりあえず喋

る人とか、喋ってそこから情報を出してくれる人とかも、求められてようやく情報が出る人とか、すごい、なんかどう言ったら言いんですかね、いろんな考え方が集まって、一つになる。{インタビュー2015年6月29日} (森さん)」と学習者と一括りに言っても、その性格や考え方はそれぞれ違い、多様なものであることに気がついている。また、台湾や日本の文化について学習者と討論することを通して、「台湾と沖縄のことを話してて、たくさん似ているところがあると感じました。食べ物とか、風習とか。テレビとかでも台湾や沖縄の文化を紹介してますが、実際に話し合うと、もっともっと知りたくなりました。{インタビュー2015年7月4日} (山田さん)」や「文化を知るのも、例えば、クリスマスは日本では恋人のイメージですよとか、なんでしょうか。インターネットで調べるとか本で調べるのとは違って、その土地の人たちがどんな風に考えているのか、若い人は特にどう考えているのか、テーマを通して理解できたのはよかったですね。{インタビュー2015年7月4日} (山田さん)」と、文化や物事に対する考え方を理解することができると述べている。

そして、<考え方や仕事の仕方の違い>は、メンバーと協働作業する中でも垣間見ることができる。日本人と台湾人の違いという用語弊があるが、それぞれ違った環境や文化背景のもとで育った者同士の仕事に対する考え方や、行動に違いが出るのは当たり前であるが、共に作業をしなければその違いを知ることはできない。日本人留学生である森さんは、会議や事前準備で台湾人スタッフと共に作業をする中で「やっぱり考え方の違いとか、やっぱり日本人ですし、ちょっと硬いかもしれませんが、これでいいんじゃないってなることもあったんで、難しかったですね。林ちゃんとかと一緒に準備するじゃないですか、あー違うなって、もうちょっと焦った方がいいんじゃないのって思うところも自分のペースでやってしまうっていうか。やっぱり何人かがスタッフとしているから、意見が合わなくて大変なのに、のほほんとしてる。いろんな人がいるんだなっていう。{インタビュー2015年6月29日} (森さん)」と、メンバーの対応に対して少し逸脱を感じながらも、いろいろな人がいることを知る。また、台湾人スタッフである王さんや周さんは日本人留学生と一緒に作業をする中で、「一番明確なのが、山村さん。彼女のやり方は日本人とは関係ないかもしれない。たぶん本人の特質。彼女はある事をするのに、すごくパワーがある。会議のリズムをうまくコントロールして、それはすごくいいことだと思います。最後は、みんなのぐちゃぐちゃな意見をまとめて結論を出す。すごいです。{インタビュー2015年12月2日} (林さん)」や「会議で自分の考え方を言っているのは、ほとんど日本人でしょ

う。例えば、このことについてどう思ってる。自分の考えを言う人、言える人はほとんど日本人。会議では、中国語を使ってもいいのに、台湾の学生は自分の意見を直接言えない人が多い。{インタビュー2015年12月20日}(周さん)」と自分たちとの仕事の仕方の違いを発見し、見習うべきことであると感じている。

このように、他者と共に言葉の活動をすることによって、その考え方や仕事の仕方などに多様性があるということを実感しているのである。

#### 6-2-5 仲間意識と人間関係の構築

他者と協働で活動を作っていくためには、一緒に活動を作っているメンバーを仲間であると認め、対等な人間関係を構築していく必要がある。ジョンソン(2010)は、『協同』で最も大切な構成要素は互恵的な協力関係(肯定的相互依存)であり、グループの皆がうまくいかない限り自分の成功もないというようにそれぞれのメンバーが互いにつながっていると感じた時、実りあるものとなる。ひとりの失敗は、全員の失敗につながる。グループのメンバーは、それぞれの努力が自分のみならず、他のメンバー全員にも同じように役たつのだということを理解している必要がある<sup>41</sup>と述べている。しかし、こうした意識は誰もが初めから持てるわけではない、それまで交流の無かった他者と共に活動を作っていくことは、簡単なことではない。メンバーと共に、問題に直面し対話を重ね解決していくことではじめて、相手を仲間と認め、関係を構築することができる。

インタビューでは、「今学期は、沈黙になったら台湾のスタッフが助けてくれたんで、そもそも沈黙になりそうになった時に、ぱぱっと「日本にはこれがあるよね」とか、「台湾ではなんて言う」とか言って流れを作って、沈黙を回避できましたね。なんか、一緒に協力してる感がありましたね。{インタビュー2016年6月26日}(山村さん)」と、協力して問題である「沈黙」を回避することで、仲間と一緒に協力しているという実感を持っている。また、「今学期はみんなの時間があんまり無かった。こういう時は特に仲間思いが大事だと思う。わたしは忙しくて、活動にはあんまり行けないんだけど、わたしの仕事は他の人がカバーしてくれるとか、今回は本当によかった。藤田さんはアルバイトのために忙しくて、活動に時々来れなくて、小池さんと

---

<sup>41</sup> ジョンソン, D. W. / ジョンソン, R. T. 他(2010)p14

か山村さんが協力してカバーしてたじゃん。そういうのいいね。 {インタビュー2016年6月26日} (周さん)」と語っているように、お互いが忙しく役割を全うできない時は、声を掛け合って互いの役割を補い合う関係を作り、互いに思いやることの重要性を実感している。こうした、互いを支え合う関係は、個々の不安を取り除くことができ、仲間との信頼関係を強くする。林さんは、第6期の活動では周りに頼ることができず、不安を抱えていたが、第7期の活動では頼ることのできる仲間ができたため、不安無く活動運営に参加することができた。インタビューでは、「前(前学期)と違います。今は不安な感じがありません。なぜなら、今私は活動当日に中心で司会をする人じゃないから。一番不安なのは、一人で真ん中にあることです。今は一緒にやる人がいます。わたしは人の意見をまとめることができません。毎回活動の時にみんなが意見を出して、それをまとめる。前、私がまとめますが、できない。でも今はまとめることができる人がいるから、頼ることができる。気持ちが楽です。 {インタビュー2015年12月2日} (林さん)」と語った。一つの目標に向けて仲間が協力し合っ  
て行動することにより、互いを認め合い、肯定的な対人関係を構築することができるのである。森さんは、「最初はやっぱりいろいろありましたけど、今は楽しく、ストレスもなく、距離が近い人間関係のような気がします。 {インタビュー2015年6月29日} (森さん)」と最初は、仲間となかなかうまくいかず、揉めることもあったが、活動が終わった頃には、距離が近い人間関係になれたと述べている。その過程には、「日本語回廊から人間関係が広がります。スタッフ同士、いろいろ悩んで、話して、考えたりして活動を広げていったんで、その中で人間関係の難しさとか知りました。で、人間関係を作っていきましたね。 {インタビュー2015年6月29日} (森さん)」という[仲間と共に協力する実感]があるからこそ、信頼し会える関係を構築することができたのだと考えることができる。

## 6-2-6 話し合って問題を解決することの重要性を知る

日本語回廊では、全く異なる文化背景の学生たちが、一緒に活動を作っていくてはならない状況にある。そのため、スタッフたちは自分の意見を相手に伝えられなかったり、話し合いの際にみんなの意見がバラバラになり、それをまとめることが難しかったりする。日本語回廊の活動成功に向けて、スタッフたちは企画・運営していくのだが、その過程で、様々な問題点にぶつかり、＜活動で起きた問題を話し合う＞。例えば、学習者との問題は＜学習者との間の沈黙＞や＜学習者の非積極的な態度＞が挙げられる。「話しの途中でシーンってなる {インタビュー2015年6月29日} (王さん)」「とにかく沈黙が苦痛なんですよね {インタビュー2015年11月25日} (山村さん)」や「学習者たちは、あんまり自分の意見を提出しない {インタビュー2015年6月29日} (王さん)」と語っているように、学習者との間の沈黙が活動を行う上での大きな問題となっている。こうした問題を＜仲間と解決に向けて話し合う＞。話し合いでは、「みんなで話し合って、うーん、できなかったところもありますけど、小さい問題は結構解決できていたと思います。例えば、最初に学習者の名前を聞いて、ホワイトボードに書いておいて、話を振る時に名前を呼ぶとか、沈黙になりそうなときに、どうするか、会議で話し合って、例えば質問の仕方を「わたしは、こう思います。～さんはどう思いますか」とか、活動の時に試して、効果があったかなって思います。 {インタビュー2015年12月23日} (山田さん)」というように、解決できている問題もあるが、一方で「告知が遅くて一方的に教えるしかないってなったり、グループの分け方、このやり方だと良くないんじゃないかってなった時に、じゃあどうするかっていうので、あんまりまとまらなかったっていうか、そこが一番の反省点なんですけど、意見が出たのに、聞けなかったっていう。 {インタビュー2015年12月23日} (山田さん)」というようにたくさんの意見が出る中で、相手の話を聞けなかったことを反省している。また、「会議では、ちょっとだけだけど、他人の意見を無視する時があった。例えば、今学期の回廊は地域によってグループをわけてるじゃないですか。でも、地域によって分けてるのは、大阪と沖縄グループには来てくれる人がいつも多い、でも愛知県と岐阜県に参加する人はそんなに多くないから、みんなで回廊のやり方を考えた時に、わたしは、いつもこんな問題があったから、地域によって分けるのを辞めようって、具体的な解決策も言ったけど、結局地域によって分けるになったじゃん。みんなでやるからね、一人の意見は無視されやすい。 {イン

タビュー2015年12月20日} (周さん)」というように、自分が意見したにも関わらず、聞き入れられなかったことを通して、他者と話し合っ物事を決めていく中で、くさまざまな意見をまとめいていく難しさ>を実感している。

また、このような他者と話し合う場において、<自分の意見を相手に伝える難しさ>も同時に感じる。仲間と共に活動を作っていく中で、自分の思うことを相手に伝えることは非常に重要なことである。「もし、わたしはこのやり方が本当にいけないなって思ったら、ちゃんと言わないといけない。何も言わなくて怒るのは、わたしはだめだと思う。意見を出さなくて一人で怒ってたら、関係がよくなるから、活動もうまくいかなくなつて、その人もやる気がなくなつて責任もなくなる。{インタビュー2016年6月26日} (周さん)」と語っているように、自分が思っていることを相手に伝えないまま、活動を続けていくと、必ず問題が発生する。前節で扱った個々の分析の中で、林さんと森さんの例を挙げると、彼らは初め話し合ったり活動についての説明をしあったりすることはなく、いつも一方的なやりとりであった。そのため、森さんは活動に参加したくなくなり、活動自体もうまくいかなくなった。その原因は、互いに自分の考えを伝えなかったからである。しかし、森さんが他人を通して自分の気持ちを林さんに伝えることで、話し合い、問題を解決していった。林さんはインタビューで「わかつたことは、相談、相談が大切。話すのが怖い、でもやっぱりちゃんと話さないとわからないとわかつた。{インタビュー2015年6月29日} (林さん)」と語つた。また、森さんは、「やっぱり伝え方ですかね。一方的にわーつて言つても伝わらないので、我慢して相手の話をまず聞くとか、やっぱり難しかったですね。{インタビュー2015年6月29日} (森さん)」と語っている。このように、それまであまり関係性の無かつた者同士が一緒に活動を作っていくことで、それぞれがコミュニケーションの仕方や、気持ちの上での壁にぶつかり、悩み、自分の意見を相手に伝えることで、問題を解決することを通して、[話し合つて問題を解決することの重要性を知る]のである。

以上、協働における対話が生む学びの分析を行つてきた。そこでは、[言語学習に対する認識の変化] [考え方や文化の多様性を知る] [仲間意識と人間関係の構築] [話し合い協力することの重要性を実感]などの学びと、そこに至るまでのプロセスが浮かびあがつてきた。

筆者は本論文の序論で、言語教育における目的は（１）言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ。（２）他者を認め、考え方の多様性を理解すること。（３）自己の認識を深めると共に、学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い、自己課題を見つける。の３つにあるべきだと述べ、日本語回廊の実践を行ってきた。ここでは、こうした学びが言語教育においてどのような意義があるかについて論じる。

## （１）言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ。

バフチンは、言語活動とは単なる記号の連続体ではなく、考え方や認識のやり取りが行われるイデオロギー現象であると述べている。

日本語回廊を企画、運営していく上で、スタッフたちは互いの考えていることを言語を使って表現していかなければならない。しかし、自分の考えを学習言語で表現するということは非常に難しいことである。インタビューでは、日本語回廊の場では常に自分の知らない言葉や単語が出てきて、その度にその言葉を確認して、どのように表現するのかを学んだり、会議の中で他の人が話していることを一生懸命聞き、自分の考えをどのように表現しているかを学んでいる。そして、試行錯誤しながら、学習言語を使って自分の考えを伝え、「伝わる」という経験をすることで達成感を得ている。はじめは、どうやって自分の考えていることを表現すれば良いか分かっていない状態から、他者とのやり取りの中で、表現の仕方を参考にして自分でも実際に使ってみることで、それまでは他者のものであった「言葉」が自分のものとなるのである。バフチンは、「言葉の中の言葉は、なかば他者の言葉である。それが＜自分の＞言葉となるのは、話者がその言葉の中に自分の志向とアクセントを住ませ、言葉を支配し、言葉を自己の意味と表現の志向性に吸収した時である。」と述べている。つまり、言葉が自分のものとなるためには、他者の言葉に自分の志向、つまり考えを吹き込み、自分が伝えようとする意味と表現の仕方がピッタリとあった時である。日本語回廊のスタッフたちは、他者の言葉の表現方法を聞き、自分も話さなければならない状況において、自分の考えと表現方法を合致させ、話すことで、自分の言葉として学んでいるのである。



## (2) 他者を認め、考え方の多様性を理解すること。

自分とは全く異なった考え方や文化を持つスタッフや学習者と話し合い、ぶつかり合うことで、他者という存在を認め、その考え方の多様性を理解することに繋がっていることもわかった。日本語回廊では、スタッフ同士が企画運営していく上で、会議が重要視されている。その会議の中で、ある一つの問題に対して自分の思っていることとは全く異なる考えを持っているスタッフもいるわけであり、きちんと相手の話を聞き、話し合わなければ、活動はうまくいかない。無論、会議の中で出された様々な考えを全て統一し、完璧な選択をすることは困難である。時には、誰かが自分の意見を諦め、妥協しなければならない。スタッフたちは、他者の考え方を尊重しながら意見をまとめていくことの重要性を実感している。

また、会議の場面では、日常的には見られない個々の特徴といったものを伺い知ることができる。例えば、仕事に対する向き合い方であったり、仕事の仕方など、自分とは違った考え方、やり方を持つ相手と一緒に仕事をする中で、考え方ややり方の多様性を知る。分析結果から、会議の中で自分の意見をたくさん述べられる

日本人とあまり意見を言わない台湾人を比較したり、きちんと会議全体を把握してまとめることのできる人がいること、そして大変な時に呑気に構えている相手など、人それぞれ考え方や進め方が違うことを受け入れ、理解することに繋がっている。

## (3) 自己の認識を深めると共に学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い自己課題を見つける。

分析結果から、自分の言語や自分の知識に対する認識を深めるといったものが出てきた。日本人スタッフたちは非日本語母語話者である台湾人スタッフや日本語学習者と討論する中で、相手に合わせて日本語を話すようになった。相手に合わせるということは、相手にわかりやすい言葉で話さなければならない。相手の反応を見ながら自分の言葉を発することで、自分の方言や訛りなどを認識し、他者との違いがあることを知った。また、テーマに基づいた話し合いで、自分の生まれ育った場所の文化や考え方と、自分と異なる文化や考えを持つ人と、考え方を交流させることによって、自分のルールや自分の生まれ育った場所への認識を深めている。さらに、日本人スタッフ

と台湾人スタッフが一緒に会議や作業をする中で、他者との仕事の仕方や、考え方の違いに気づき、自分の行動を分析するきっかけとなっていることがわかった。

そして、日本語回廊を運営していく中では、日本語学習者との間、スタッフの間で、様々な問題が起きる。例えば、「日本語学習者があまり積極的に発話をしない」や「うまく会話を続けられない」などの日本語学習者との問題、「異なる意見の中でうまくまとめられない」や「他のメンバーとうまくやれない」などのスタッフ同士の問題がある。そうした問題を見て見ぬふりをするのは簡単だが、そこで問題点に向き合い、解決に向けて話し合いを行うかどうかで、結果は大きく違ってくる。林さんの例を挙げると、彼女ははじめ、同じグループの森さんと連絡を取り合おうとしなかったため、互いの関係性に問題が起きた。そこで、林さんは逃げずに森さんに向き合い話し合うことで、その問題を解決している。また、活動の会議で司会を担当していた山村さんは、他のスタッフたちからなかなか意見を引き出せないことから、どうしたらうまく意見を引き出せるのか、それを自己課題として、いろいろな方法を試し、話を引き出す方法を見つけている。他者から話しや意見を引き出すということは、会議においてだけでなく、活動の中でもスタッフとしての一つの課題となっている。実際に活動の中で日本語学習者と話し合いをしていくのだが、なかなか話そうとしない学習者がいたり、スタッフが話を振っても反応がなかったりする。そのような状況の中で、スタッフたちは、どうしたら、うまく話を繋げられるのかということをも自己課題とし、解決に向けてさまざまな方法を試行していくのである。このような話の繋げ方以外にも、自分の意見をどうやって相手に伝えるかという点や、何でも言い合える人間関係を構築するという点も自己課題として出てきた。王さんは初めの頃は、自分の考えていることを相手に伝えられずにいた。しかし、活動の中で、相手に自分の考えをアピールしないとうまくいかないということに気がつき、どう自分をアピールするかということをも勉強することが必要だと考え、日本語回廊が終わる頃には「だいぶ言えるようになった」と述べていた。また、山田さんや周さんはみんなで見聞を言い合い、それをまとめていく上で、相手の話をしっかり聞き、自分の意見を言いながら、まとめていくことの必要性を実感した。

このように、他者との言語活動を通して、問題が生じ、その問題から自分たちの課題を見つけると共に、解決に向けて話し合い、そこからまた新たな認識が生まれていることがわかった。

しかしながら、分析の中でも取り上げたように、曾さんのようにうまく行かなかった例もある。彼女は、活動の中で様々な問題がおき、それに悩んでいたが、話し合うことをしなかった。同じグループの日本人スタッフに対しても、台湾人スタッフとも自分の考えを伝えることがなかった。そのため、問題を問題化することができず、結果として新たな認識へとは繋がらなかったように思われる。曾さんの様な例は、他者と協働していく中で、頻繁に起きてくる問題ではないだろうか。そういった場合、どのように対処すれば良いのか。対処の方法を考えていく必要があるだろう。

## 第7章 今後の課題

### 7-1 方法論的課題

本稿では、日本語教育の目指すべき目的を日本語の能力育成ではなく、言語活動そのものに注目し、言語活動が生む学びを、(1) 言語活動によって新たな考え方や自己表現のあり方を学ぶ。(2) 他者を認め、考え方の多様性を理解すること。(3) 自己の認識を深めると共に、学習言語を使った活動によって生じる問題に向き合い、自己課題を見つける。と定義し、状況の中に組み込まれた言語活動が行われる場として、日本人留学生と日本語学科の学生が協働で学習支援活動を運営するという実践を行い、その中で学生たちにどのような学びがあったのかを明らかにすることができた。日本人留学生と日本語学科の学生を調査対象としたこと、そして会議の文字化資料や筆者との相談記録などを参照したことで、インタビューだけでは見えなかった実際のやり取りを知ることができた。

しかし、調査協力者の内省を深く記録するという点に関して、術を用いていなかった。ポートフォリオや活動日誌などを活用することで、さらに深く学生達の学びを掘り起こすことができたのではないだろうか。今後、調査データの幅を広げるために、導入して行きたいと考える。

また、今回の研究を通して、ファシリテーターである筆者自身が活動を運営していく中でどのような位置づけで、どのような役割を担っていたのかについては述べてこなかった。林さんと森さんの問題を解決する際に、筆者が相談に乗ったことは、彼らの変化に対して大きな意味を持ったのではないだろうか。ファシリテーターが活動運営に与えた影響についての調査は今後の課題としたい。

### 7-2 活動の課題

本実践を通して、スタッフとして活動に参加した学生たちは、日本語学習支援活動という他者のために自らが行動しなければならない環境の中で、活動をよりよくしていくために、互いに意見をぶつけ合い、または仲間に対して逸脱や問題を感じながらも、話し合い解決していくことで、いろんな考えを持った人がいることを知り、そんな人たちと一緒に何かをやっていく為には、話し合い協力していかなければうまく行

かないことを実感している。また、そうした活動の中で、信頼できる人間関係を構築し、人間関係を築いていくことの大切さを学ぶことができた。

しかし、そうでなかった学生もいることは、特筆しておかなければならない。他者と一緒に活動や作品を作っていく中で、相手に自分の意見を伝えられなかったり、話し合いが行われなかったりすると、活動に参加することが嫌になり、来なくなったり辞めてしまったりするのである。工藤（2013）は、他者と一緒に何かをやることを無駄に思わない気持ちや、グループの中でキーパーソンになる人物の存在が重要であると述べている。本実践を振り返って見ると、第6期における料理班では、仲間と一緒に協力して活動を作っていこうという姿勢を持った人物がいなかったこと、仲間に自分から働きかけようとしなかったことが、失敗に繋がったのではないかと考えられる。

また、そうした問題点に対し早期に気づけなかった筆者にとっても、うまくコミュニケーションを取ることでできないグループに的確な助言をして、まとめていくことが必要であることを実感した。

そして、このように様々な学びを得ることのできる学習支援活動「日本語回廊」であるが、はじめは学生主導で行ったものではなく、学校側の要求で始まったものである。そのため、活動を継続することができるかは、全て学校側の予算と気まぐれにかかっていた。日本語回廊がスタートした2014年の第1期目は、教務課の課長が非常に積極的であり、活動を盛り上げていこうという姿勢があっただが、第2期目では、課長が異動となり新しい課長が就任したことで、活動に予算が出ないということになり、一時は中止も考えられたが、途中で予算が出るようになり、再開するなど、非常に不安定な状況である。また、日本語回廊の事務を担当する学生は、学校が教育部に提出するための資料を作成しなければならないなど、大きな負担を強いられていた。現在では、日本語学科から少しの予算が出るということで継続することができているが、将来的に日本語回廊を継続させていくことを考えると、これも安定しているとは言えない。

スタッフに関しては、現在では是非やってみたいという学生が無償で奉仕してくれている。本研究でも明らかになったように、日本語回廊を運営する中でスタッフの学生たちは、さまざまなことを学ぶことができる。これが彼らの活動への参加の意義へと繋がっているのだろう。そうすると、学びの場としてコーディネートし、ファシリテーターとして関わることのできる顧問の様な人の存在も不可欠である。

今後、日本語回廊を継続させていくために、日本語回廊の位置づけや長期的に関わっていける人物を定めていかなければならない。

<参考文献>

1. 足立祐子(2006)「地域日本語教室とその役割-多文化共生社会づくりの担い手として -」国立国語研究所編(2006)『日本語教育の新たな文脈-学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性 -』アルク. p103-118
2. 新矢麻紀子・他(2004)『協働と対話と正統的周辺参加による「日本語交流活動」: 地域日本語活動「とよなかにほんご・木ひる」活動実践報告』日本語教育方法研究会誌 11(2)
3. イヴァン・イリッチ(1977)「脱学校の社会」東洋・小澤周三 東京創元社
4. 池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピアラーニング入門 - 創造的な学びのデザインのために -』ひつじ書房
5. 石川恵美子(2015)「家庭科教育におけるホームプロジェクト学習の課題: 教育学部家庭科撰修における調査結果より」筑波大学教育学部紀要. 教育科学, 64:117-134
6. 石田悠・笹山晴菜他(2015)「ラーニングコモンズにおける学生スタッフ活動を通しての学生の成長」高等教育フォーラム(5), p189-195
7. 岡本能里子(2007)「未来を切り拓く社会実践としての日本語教育の可能性—メディア・リテラシー育成を通じた学びの実践共同体をデザインする—『日本語教育のフロンティア—学習者主体と協働』くろしお出版
8. 荻原洋(2006)「人間発達と言語」富山大学人間発達科学部紀要, 1(1). p53-615
9. 奥野信行(2013)「新卒看護師の看護実践コミュニティへの参加過程における学びの経験—正統的周辺参加論の視点によるエスノグラフィック・ケーススタディー—」京都橘大学研究紀要 = Memoirs of Kyoto Tachibana University (39), 100(241)-76(265)
10. 小原國芳(1969)「全人1教育論」玉川大学出版部
11. 柏崎秀子(2016)「21世紀型能力に向けた「他者に伝える意識」を持つ意義—読解と作文の融合研究のこれから—」実践女子大学生活科学部紀要 (53), p85-94.
12. 金井淑子(2010)「地域日本語教室における学習者の学び - 日本語非母語話者ボランティアの参加をとおして -」多言語文化 - 実践と研究 3, p150-175
13. 岸磨貴子・久保田賢一・盛岡浩(2010)「大学院生の研究プロジェクトへの十全参加の軌跡」日本教育工学論文誌 33 (3) , 251-262
14. 木下康仁(2003)「グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生」弘文堂
15. 木下康仁(2005)「分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ」弘文堂
16. 木下康仁(2007)「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」富山大学看護学会誌第6巻2号
17. 木下康仁(1999)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文堂
18. 工藤節子(2013)「日本語学習者が母語である中国語の学習支援をする教育実習—支援者としての学びと課題—」2013年WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
19. 工藤節子(2011)「日本語学科の学生の教師としての学び—到達度ベースの目標設定から始めるコースデザインの体験を通して—」2011年度日語教学実践報告集, p72-84.
20. 久保博之(2015)「自然に対する感じ方や考え方を育むプロジェクト学習」鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 24:425-424
21. 小池一平(2014)「「日本語遠足」実践における日本語使用の態度の変化—PAC分析より—」2014年日語教學研究學術研討會
22. 国立教育政策研究所(2014)「資料や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理「改訂版」」

23. 戈木クレイグヒル滋子(2006)『ワードマップ グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生みだすまで』新曜社.
24. 戈木クレイグヒル滋子(2014)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ分析ワークブック』日本看護協会出版会, 第2版.
25. 佐伯胖(1975)「「学び」の構造」東洋館出版社
26. 佐々木倫子(2006)「パラダイムシフト再考」国立国語研究所編 (2006)『日本語教育の新たな文脈-学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性-』アルク. p259-282.
27. 里見実(1995)『働くことと学ぶこと - わたしの大学での授業 - 』太郎次郎社
28. 重田美咲(2008)「工学系大学院留学生の「正統的周辺参加」と日本語学習」広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域 (57), 255-262,
29. 柴田義松(2006)「ヴィゴツキー入門」寺子屋新書
30. ジョンソン, D. W. / ジョンソン, R. T. 他(2010)『改訂新版 学習の輪—学び合いの協同教育入門—』二瓶社. 石田裕久/梅原巳代子訳
31. ジョン・デューイ(1998)「学校と社会—子どもとカリキュラム—」市村尚久訳講談社学
32. ジョン・デューイ(2004)「経験と教育」市村尚久訳 講談社学術文庫「経験と教育」市村尚久訳 講談社学術文庫
33. ソーヤーりえこ(2006)「社会的実践としての学習—状況的学習概観—」『文化と状況的学習—実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン—』凡人社
34. 高橋宏子(2012)「大学生ボランティアの地域日本語教室活動に対する PAC 分析調査」言語文化と日本語教育(43), p1-10
35. 内藤 哲雄(2003)「PAC 分析実施法入門—「個」を科学する新技法への招待」ナカニシヤ出版
36. 永田 良太・山木 真理子(2012)「地域日本語教室における外国人支援者の役割 - 鳴門国際交流教室の場合 - 」鳴門教育大学研究紀要 27, p225-231
37. 中谷素之・伊藤崇達(2013)「ピア・ラーニング—学びあいの心理学—」金子書房
38. 中村恵子(2007)「構成主義における学びの理論—心理学的構成主義と社会的構成主義を比較して—」新潟青陵大学紀要 7, 167-176 術文庫
39. 西口光一(2016)『対話原理と第二言語の習得と教育—第二言語教育におけるバフチンのアプローチ』くろしお出版
40. 西口光一(1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」日本語教育. 100 P. 7-P. 18
41. 縫部義憲(2001)「日本語教師のための外国語教育—ホリスティック・アプローチとカリキュラムデザイン—」風間書房
42. 牲川波都季(2002)「学習者主体とは何か」英雄編(2002)『ことばと文化を結ぶ日本語教育』にほんごの凡人社. p11-29
43. ミハイル・バフチン(1996)『小説の言葉』平凡社ライブラリー. 伊藤一郎訳
44. ミハイル・バフチン(1995)『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫. 望月哲男/鈴木淳一訳
45. ミハイル・バフチン(2002)『バフチン言語論入門』せりか書房. 桑野隆/小林潔訳
46. パウロ・フレイレ(2011)「新訳 被抑圧者の教育学」三砂ちづる訳 亜紀書房
47. 美馬のゆり・山内祐平(2005)『未来の学びをデザインする - 空間・活動・共同体』東京出版会
48. 古川嘉子(2005)「海外における日本語教師の教材作成認識—共同作成経験者へのインタビュー・データを中心に—」『共生時代を生きる日本語教育—言語学博士野田鶴子先生古稀記念論文集—』凡人社
49. ブルーナー(1963)『教育の過程』岩波書店



50. 文野峯子・工藤節子(2012)「体験型授業を通じた学び- 日台プロジェクト交流を例に -」実践持ち寄り改編 (2012) 『言語教育実践 イマXココ (創刊準備号)』ココ出版
51. 星摩美(2015)「「地域の日本語教育」にかかわる人々の活動を形作る意識とビリーフ」人間社会環境研究(29), p17-34
52. 細川英雄(2014)「言語活動主体の充実とは何か：言語教育の目的と市民性形成 (特集言語教育と生きること)」国語教育思想研究 (8), 53-57,
53. 細川英雄(2011)「日本語教育は日本語能力を育成するためにあるのかー能力育成から人材育成へ・言語教育とアイデンティティを考える立場から (特集日本語教育が育成する日本語能力とは何か)」早稲田日本語教育学 (8-9) . p21-25
54. 細川英雄(2007)「新しい言語教育をめざして：母語。第二言語教育の連携から言語教育実践研究へ」(2007)『日本語教育のフロンティア - 学習者主体と協働 -』p. 1-20
55. 細川英雄(2002)「ことば・文化・教育 - ことばと文化を結ぶ日本語教育を目指して」細川英雄編(2002)『ことばと文化を結ぶ日本語教育』にほんごの凡人社. p1-10
56. 細川英雄(2007)「新しい言語教育をめざして - 母語・第二言語教育の連携から言語教育実践研究へ」小川貴士編 (2007)『日本語教育のフロンティア - 学習者主体と協働』
57. 山崎義人(2011)「農村集落における「ムラ・ノラ・ヤマ」に着目した環境学習の実践 - 兵庫県立大学附属中学校のプロジェクト学習を通じて -」日本建築学会技術報告集第17巻第35号, 325-328
58. 山田泉(2002)「地域社会と日本語教育」細川英雄編(2002)『ことばと文化を結ぶ日本語教育』にほんごの凡人社. p118-135
59. 渡邊優生(2007)『多文化共生を目指した地域日本語交流活動：地域日本語ボランティアの新設と日々の活動からの考察』鈴鹿国際大学紀要 Campana 13, 151-168, 2007-03-20
60. J. V. ネウストプニー(1982)「外国人とのコミュニケーション」岩波新書
61. SFARD, A. (1998)・On two metaphors for learning and the danger of choosing1. just one”Educational Researcher, 27-2
62. Wenger(1998)Community of Practice-Learning, Meaning, and Identity, Cambridge University Press, Cambridge.
63. Wenger, E 他(2002)『コミュニティ・オブ・プラクティスーナレッジ社会の新たな知識形態の実践 (Harvard Business School Press)』翔泳社

<WEB サイト>

64. 東吳大學學生學習資源組<[http://tew.scu.edu.tw/Student\\_content.aspx?rid=17](http://tew.scu.edu.tw/Student_content.aspx?rid=17)>. 2016年12月18日20:02アクセス
65. 大仁科技大学応用外語学科 japanese corner <<http://r01.tajen.edu.tw/files/11-1045-3222.php>>. 2016年12月18日20:18アクセス
66. 中國醫藥學院英語角落<<http://language.cmu.edu.tw/ec.html>>. 2016年12月18日19:28アクセス
67. 高雄医学大学言語分化中心 English Corner<<http://lc.kmu.edu.tw/index.php/zh-TW/%E5%85%AC%E5%91%8A%E4%BA%8B%E9%A0%85/%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%BF%AB%E5%A0%B1/231-english-corner-%E6%B4%BB%E5%8B%95%E9%96%8B%E5%A7%8B>>. 2016年12月18日17:12アクセス
68. 国家教育研究院の教育大辞典<<http://terms.naer.edu.tw/detail/1314278/>>. 2016年12月18日21:35アクセス

<資料 1>

<第 6 期日本語回廊活動報告書>

## 2015 年 3 月 18 日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000 字以內)

本學期的日語迴廊活動開始!

將有 4 種主題分為 4 組供大家選擇有興趣的去參加。大家分組進行自我介紹，也稍微介紹關於主題的內容。

今学期日本語回廊の活動が始めました！ テーマが四つあって、みんなは好きなグループに参加できます。今回皆さんは組を分けて、自己紹介して、テーマについて簡単に説明しました。



用巧拼分為 4 組，同時進行 4 種不同主題的活動



台灣旅遊地圖組



日文戲劇組



台日料理組



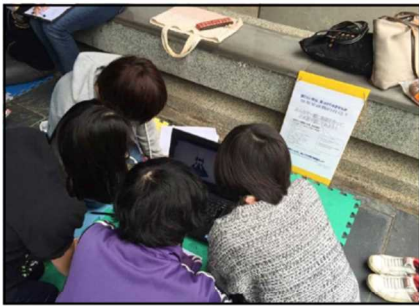
這種時候怎麼辦？狀況組

## 2015年3月25日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000字以內)

這次是第二次的日語迴廊活動。有四種不同主題的組別供大家挑有興趣的參加。並且今天大家對於主題的內容有更加一步的討論及認識。

今回は二番目の日本語回廊の活動です！テーマが四つあって、みんなは好きなグループに参加できます。そして今日皆はテーマについての内容を更に討論して理解します。



日文戲劇組 主題：用聲音來表達情緒

這種時候該怎麼辦?-狀況劇組 主題：關於金錢



台日料理組  
主題：學習日本和台灣的料理名稱



台灣旅遊地圖組  
主題：想去哪裡呢？

## 2015年4月8日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000字以內)

這次的迴廊活動越來越進入狀況了!

每組都開始對於之後要做的活動提出意見及想法。

迴廊活動はだんだんよくなります。

組別はそれからやる活動について意見を提出します。



這次的迴廊活動越來越進入狀況了!  
每組都開始對於之後要做的活動提出意見及想法。



台日料理組  
主題：討論本周末大家一起做料理的活動。

台灣旅遊地圖組  
主題：后豐鐵馬道週遭有什麼推薦的景點？



這種時候該怎麼辦?-狀況劇組  
主題：告白的時候。

日文戲劇組 主題：動畫之中的用語

## 2015 年 4 月 1 日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000 字以內)

這次來參與的人數又增加了!! 加上有新道具-白板的輔助 相信對於大家的學習更有幫助

今回参加した人数また増えました!!

新しい道具---補助的なホワイトボード 皆の学習にとって、もっと助ける



演戲組從 4 名成員增加到 10 名喔!!



旅遊組決定出游的日期和地點

料理組用日文向組員介紹料理的知識



狀況劇組介紹關於祭典的情報



## 2015 年 4 月 15 日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000 字以內)

旅遊組決定出游的日期和地活動進行得越來越順利 在期中考後會暫停兩週活動 各組也在此次活動中做個小總結  
點 狀況劇組介紹關於祭典的情報。  
活動がもっとうまく進んでいる 中間試験の後の二週間は活動がない 皆はこの活動で少し成果をまとめた。



旅行組：製作 5/3 后豐旅遊的宣傳海報



狀況組：介紹各種文化的差異



日文戲劇組：互相確認上禮拜交代的作業



台日料理組：介紹料理和食材的名稱

## 2015 年 5 月 3 日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000 字以內)

期中考過後迴廊活動也要進入到後半段部分了！  
各組也開始討論第二階段的活動。  
中間試験が終わった後、回廊の活動も後半期に進みます！  
皆も第二階段の活動を討論始めました。



旅遊組：制作旅遊成果海報



日文戲劇組：因為一年級午掃的關係，人數減少了



料理組：決定下一次制作料理的日期，並向各組宣傳



狀況組：介紹各種藥的日文名稱

## 2015年5月13日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000字以內)

迴廊已經順利得進行了，從下週開始將會新增一個組別。請大家多多期待！  
回廊もうまく進めています、来週から一つの新しい組が増えます。皆さんは楽しみにしてください！



旅遊組：去日本旅遊時的用語介紹



料理組：說明料理的作法，向其他組宣傳本週的製作料理活動



日文戲劇組：從這禮拜開始錄音的活動，みか老師、太郎、步美一起開心地進行活動



狀況組：介紹節日，下禮拜將會介紹結婚典禮



## 2015 年 5 月 20 日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000 字以內)

因為下雨關係來參加的人變少了,希望下周是 個好天氣!  
雨が降ったので参加する人は少なくなっていました。来週はいい天気が欲しいです。



旅遊組：討論下次的旅遊地點



日文戲劇組：食譜教學



料理組：決定時探購時間及料理活動的最後確認

## 2015年5月27日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000 字以內)

這禮拜因為下雨，導致活動人數有點少 不過還是有新成員加入，新的組別也成立了！

今週雨だから、参加した人数はちょっと少なかった。でも、新しいメンバーが入って、新しいグループもできた！



以民宿作為主題的新的組別



旅遊組討論這禮拜日 5/31 的出遊活動



台日料理組  
分享上禮拜五 5/22 第二次料理大會的感想



廣播劇組：開始進行唸劇本、錄音的活動

---

## 2015年6月3日日本語回廊活動報告書

---

### 成果報導 (800-1000 字以內)

這禮拜因為下雨，導致活動人數有點少 不過還是有新成員加入，新的組別也成立了！

今週雨だから、参加した人数はちょっと少なかった。でも、新しいメンバーが入って、新しいグループもできた！



旅遊組：做旅遊感想海報



日文戲劇組：錄音的活動（關西腔練習）



狀況組：結婚式的介紹



民宿組：民宿介紹

## 2015年6月3日日本語回廊活動報告書

### 成果報導 (800-1000字以內)

最後一次的日語迴廊,及發表令人感動的成果。  
最後の日本語迴廊です。感動させた成果を発表します。

#### 熱鬧的大家族



狀況組:把成果印成小本子分給大家,再發表

以漫畫搭配錄音呈現



## 2015年10月13日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以内)

本學期的日語迴廊活動開始!

將有 4 種主題分為 4 組供大家選擇有興趣的去參加。大家分組進行自我介紹,也稍微介紹關於主題的內容。

今学期日本語回廊の活動が始めました! テーマが四つあって、みんなは好きなグループに参加できます。今回皆さんは組を分けて、自己紹介して、テーマについて簡単に説明しました。



名古屋グループ



岐阜グループ



沖縄グループ



大阪グループ

## 2015年10月20日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這週是討論有關日本的食物，分為大阪、在台灣的日本料理、名古屋、沖繩料理，說明各地方的地形、文化、地區的差異，了解各地區的食物由來、概況，以及是否有品嚐過的經驗，透過每個人的品嚐經驗，更瞭解了食物的味道、口味，也瞭解了與台灣的食物有什麼不同，或許是同一種食物，但味道、口味、醬料、處理方式、配料，都有些許不同。經過如此的討論，增進自我的日語溝通能力，也學到了各種食物日文的唸法。



大阪グループ



グループ分け



グループ毎の討論



名古屋グループ

## 2015年10月27日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

此次活動是由各個TA各自根據「萬聖節與日本高中、大學的秋季活動」準備活動當天要向參加者介紹與交流的內容。當天，參加者們在TA的帶領下針對台灣和日本的萬聖節以及相關經驗或台灣與日本的鬼怪等等主題做分享，另外也介紹了日本的學園祭和運動祭等等秋季活動的內容和舉辦方式，藉此相互了解不同的生活文化。由於在之前的活動當中發現，TA們有時語速較快，導致參加者有時聽不清楚或聽不懂，但又不好意思說，所以我們除了配合白板做解說之外，在語速以及確認參加者了解與否等方面也做了調整，這次的活動相較於之前可以感受到參加者的參與度有上升。



活動開始時參加者與TA互相自我介紹



參加者分享自身經驗



日籍 TA 依地區介紹秋季活動



日籍 TA 以圖片展示日本鬼怪(白板輔助說明)

## 2015年11月17日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這週主題是有關日本大阪、名古屋、沖繩、岐阜各地方的祭典，透過討論與介紹各個地方特色祭典，更可以清楚地理解到日本自古以來的文化，像是大阪組介紹了在關西地區神戶很有名的燈飾祭典（ルミナリエ）、祭典神輿、十日戎等等，岐阜則是介紹收穫祭、餅投げ、節分，愛知是もみじ祭、おでんしゃ、手筒花火，沖繩是端午節、中元節、日本的聖誕節等等。在大家討論後發現各個地區的祭典都相當的有特色，尤其是沖繩跟台灣的祭典有些很相似，跟大家原本想像的有所出入，非常有趣！透過文化交流，互相了解對方家鄉的文化，也就能瞭解到個地區都有獨特的生活方式，也是一種學習語言文化的方式。



名古屋グループ



岐阜グループ



活動全体風景



沖繩グループ



## 2015年11月24日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

本次活動，各組 TA 針對「方言與年輕人用語/流行用語」作準備，向參加者加以介紹自己出身地區平時所慣用的方言，以及現今日本年輕人間流行、經常使用的詞彙。我們利用寫有方言、翻譯以及例句的小講義，透過 TA 和參加者之間的互相模擬與演繹，希望能讓參加者更容易清楚知道各個方言以及流行語的使用時機與意義，同時也詢問參加者除了我們所介紹的內容，是否也知道其他流行語，在討論當中也發現許多我們不曾聽過、有趣的新詞彙，而每次的活動，最難能可貴的，莫過於透過與參加者的討論與分享，並且一起學習了。



岐阜グループ



沖縄グループ



名古屋グループ



大阪グループ

## 2015年12月1日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這次是迴廊最後一次，所以選擇了讓大家可以自己說出想要講的東西，因為平常都是有訂好的主題讓大家一起來討論，也因為是說自己喜歡的東西，大家都聊得很盡興，比起平常有主題性的方式，大家表現的更主動了，主要為旅行、流行、混混語言、著迷的事物等等生活化的話題。



大阪グループ



沖繩グループ



名古屋グループ



岐阜グループ

## 2016年3月15日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這個禮拜日語迴廊的主題是介紹日本與台灣兩國相似的遊戲，ハンカチ落とし與大風吹（フルーツバスケット，還有指スマ這個遊戲，進行文化交流與文化的認識，在遊戲進行的過程中與日本留學生進行對話、交流，以學習日本現今的流行用語，互相認識彼此，也因為遊戲雖然相似，但是其中的規則還是有不一樣的地方，日本留學生與台灣人雙方都了解遊戲的不同之處後，都發現文化差異的有趣所在，遊戲雖簡單，但是卻引起了許多共鳴，以及文化衝擊，更是練習到了不少的日語，增進自我的日語口說能力，大家都相當有收穫。



日本傳統遊戲  
遊戲進行



自我介紹及解釋遊戲  
遊戲進行



## 2016年3月22日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

本週活動在日籍留學生的帶領下，讓參加者全員練習以日語表達自己喜歡與不喜歡的食物，過程中也讓大家除了說食物的名稱之外，也練習如何表達喜歡與否的原因，當中包括味道如何、外觀如何、過敏……等等原因的表達方式。

在這次的活動中，可以看到參加者積極參與討論並且也勇於嘗試表達想法，讓當天活動氣氛十分融洽，也因此活動進行得十分順利，甚至還有參加者在活動結束後利用些許空閒時間，繼續與日籍 TA 交流、討論。

日籍TA向參加者說明自己喜歡的食物



TA 將參加者所提的問題寫在白板並逐一討論



參加者互相討論，並將內容重點做筆記



TA 向參加者介紹家鄉的美食



## 2016年3月29日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這個禮拜日語迴廊的主題是討論奇怪的食物，日本人和台灣人互相覺得奇怪的食物，因為非常的貼近生活，大家討論得非常熱烈，也互相瞭解了不只是日本，而是各國家的文化，也學到了許多平常很少聽到，非常道地的日文。接著是討論下次料理會所需要的食材，也邀請了平常參加日語迴廊的人一起來參與，不只是在迴廊活動時間討論日本食物而已，透過料理會讓大家更加的瞭解日本文化。



料理會討論



介紹奇怪食物



食材討論



食材討論

## 2016年4月19日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

本週活動在日籍留學生的帶領下，讓參加者全員練習以日語表達自己喜歡與不喜歡的食物，過程中也讓大家除了說食物的名稱之外，也練習如何表達喜歡與否的原因，當中包括味道如何、外觀如何、過敏……等等原因的表達方式。

在這次的活動中，可以看到參加者積極參與討論並且也勇於嘗試表達想法，讓當天活動氣氛十分融洽，也因此活動進行得十分順利，甚至還有參加者在活動結束後利用些許空閒時間，繼續與日籍 TA 交流、討論。

日籍TA向參加者說明自己喜歡的食物



TA 將參加者所提的問題寫在白板並逐一討論



參加者互相討論，並將內容重點做筆記



TA 向參加者介紹家鄉的美食



## 2016年4月26日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這個禮拜日語迴廊的主題是討論有關旅行的經驗，與討論有關大家是否在參加迴廊後一起去附近小旅行的活動調查。首先先進行分組活動，由參加者分享各自的旅行經驗和在旅途中所受到的文化衝擊、文化認識，或是向大家分享從沒見過的新奇事物的有趣經驗。也有參加者去日本旅行時所遇到的問題、疑問，直接向現場的日本留學生們詢問以及解惑，而日本人們本身也得到了非常多的收穫，原來外國人有這樣的疑惑，自己也覺得非常的新鮮。



分組討論



討論行程



行程注意事項討論



日期決定

## 2016年5月3日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這次的活動我們以「遊ぼう」(一起來玩吧)為主題，將參加者分為兩組互相討論日本人與台灣人日常生活的休閒活動，主要是希望可以讓參加者在日籍工作人員的帶領之下學習如何說明日常生活的各種休閒活動。

在這星期的活動中，除了讓參加者運用「私の趣味は～ことです。」(我的興趣是…)的簡單句型說出自己的興趣以及平時會從事的休閒活動之外，也讓參加者自由運用日語，以自己會表達的方式向大家解釋休閒活動的內容或是規則。在活動時，除了看小說、聽音樂、看電影、打籃球、游泳……等等活動之外，也有部分參加者分享自己喜歡的桌遊，而大老二、十八啦、麻將……等等遊戲，也因為在日本有著類似的遊戲而受到熱烈的討論，在討論的過程中，看著無論是日籍工作人員或是參加者，因為規則有所落差而覺得有趣、訝異的各種表情，除了覺得高興、有趣之外，甚至讓我感覺到他們互相深入了解對方文化以及生活的那種熱情。

參加者努力用日文分享自己平常喜歡的休閒活動



日及工作人員將討論的內容記錄在白板上



參加者認真寫筆記



日本工作人員分享自己平時喜歡的活動



## 2016年5月10日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這個禮拜日語迴廊的主題是年輕人用語，由台灣學生和日本人留學生互相交換自己國家的流行用語來做文化交流。許多的流行用語的由來都相當有趣，像是 www 這個記號，在日本的手機通訊軟體上年輕人們常常使用，身為台灣人的大家雖然知道他所代表的意思是『笑』，卻不知道他的由來，這時候就由日本留學生來做講解，讓大家更加瞭解它所代表的意義，也可以從中學到許多的日文單字、漢字。然而在活動中，日本人留學生講的例子裡，也有許多是在中文裡有類似的說法，台灣學生們也會分享給日本人知道，互相學習，在分享的過程中發現語言的樂趣。

身為外國人的我們在學習日文的時候，通常會學習較正式的日語，但是在日常跟日本人朋友聊天時，一直用正式的日語聊天的話會讓人覺得很難親近、非常的正經，造成一些日本人的困擾，或是在觀看日本綜藝節目時，會發現節目裡出現大量的口語日文和流行語，因為不了解這些日常的日語用法，影響理解內容，所以口語的日文也是相當重要的，透過這個活動讓更多人學習到這些說話時的小技巧，甚至成為在溝通上的利器，這就是我們這次活動的目的。



想出流行語的例子



討論的過程



分享過程

## 2016年5月17日日本語回廊活動報告書

### 成果報導(800-1000字以內)

這次活動我們以「お祭り・屋台」(祭典・攤販)為主題進行分享跟討論。

活動時首先由日籍留學生介紹日本的祭典以及祭典時會出現的攤販，在介紹的同時搭配祭典與攤販的照片，也更能讓參加者了解實際情形，並且在有疑問時可以直接發問。同時，這次的活動也讓參加者練習介紹台灣的小吃、攤販，並比較台灣與日本的攤販有何不同。

這次活動是本學期最後的活動，這學期的參加者多數都是日文系一年級的學生以及其他科系的學生，剛開始的幾次活動也許是因為還不太會表達，所以在討論主題時總是顯得有些害羞甚至有些不自在，但經過幾個禮拜的活動，大家都漸漸能夠嘗試開口表達，並且在有疑問時不透過台灣的工作人員翻譯，而是自己向日籍工作人員發問，看到參加者都能夠熱烈的參與活動，真的很令人覺得開心。

活動開始前由日籍工作人員說明今天的主題與要討論的內容



最後一次的活動大家一邊吃著披薩一邊分享攤販的差異



由台灣工作人員翻譯較困難的單字給參加者

<資料2>活動に関するインタビュー

対象者:東海大学日本語言文化学系大学院生	
インタビュー日時:2016/05/30	
インタビュー内容:日本語回廊の仕事について	
質問①	日本語回廊の事務はいつからいつまでしていましたか？
回答	2013年(10月)から2014年(6月)の1年半の期間。
質問②	事務の仕事は主にどんな仕事をしていましたか？
回答	<p>教学資源センターと経費の申請ややりとり、毎週回廊が終わった後のレポートの提出、資料(レジュメ)印刷、会議の時間と場所をあわせる。会議の飲み物や食事などを用意する。会議がある時のサインの紙をコピー、提出。TA達のサポート、回廊の授業のレジュメの翻訳など。活動があれば、道具の準備を行う。ブルーシートなどの買い出し、デザートなどの準備。活動写真の撮影。</p>
質問③	一番困難だったことは何ですか？
回答	<p>教学資源センターにレポートを提出すること、期末レポートも提出する必要があったから、仕事の負担が重い。アンケートの分析など、資料の作成も大変。ボランティアも協力してくれていたが、プレッシャーが大きい。給料の申請も面倒。先に仕事証をもらわないと、給料が出せないなど。Iさんがいるときに、後期の浴衣試着やスイカ割などの大きな活動が大変だった。準備や経費の申し込み。経費の縮小、最初は何でもできていたが、だんだん制限が出てきた。印刷代は、もともとはパネル(パウチ)も含まれていたが、2学期目から、パネル(パウチ)が自己負担に、3学期目は印刷はモノクロのみになり、カラーは別途申し込み、印刷の時、マークが必要になった(負担になる)。印刷の為に、サンプルを提出しなければならない(2枚印刷する必要がある)。英語回廊と同じく、毎回の経費は1000元くらい、もともとは一人60元だったが、人数が違うにも関わらず、一緒なので不公平。経費は徐々に厳しくなる。厳しくなる理由は、学校側からの経費が減少したから、審査も厳しくなった。</p>
質問④	102年2学期の回廊の様子はどうでしたか？　そこで、Kさんはどのような役割をしていましたか？
回答	<p>前回に比べてイベントと習熟度に分けることを行った。多学科の参加者が増えた。ゲームと授業を結びつけて、遊びながら勉強することになった。</p> <p>Iさんが遊びながら授業をするという考えをだし、こういう形でやりますから、みなさん一緒にやりましょうと指示を出した。</p>
質問⑤	2014年3月-6月　回廊の様子はどうでしたか？　そこで、Kさんがどのような役割をしていましたか？
回答	<p>最初は、レジュメがあって、授業みたいな感じでやった。個人のレベルによって上級・中級に分けて、ボランティアもサポートしてもらって、いい感じだった。特に、ボランティアのサポートが大きかった。アンケートの計算や、レジュメの翻訳、回廊授業の時、わからないところを説明して、会話練習の時、学生さんたちにサポートする。事前の準備や片づけや会議への参加。会議は、2週間に1回か3週間に1回、1時間半-2時間程度。これからの授業で何をやるか決めて、レジュメの担当者を日本人と担当者一人ずつ決めてやり方を作る。TAあるはい、ボランティアが何をやりたいか、学生に何を教えたいかを提案して、その中に何力所かを選んで、やりたい部分を決める。</p>

	<p>一番最初に何をやるのかを決めてから、分ける。会議はよく提案があって、日本人TAがかなり積極的に参加していた。資料などは日本人TAが作って、FBにアップし、キラさんたちが中国語に翻訳し、印刷後に配布。</p> <p>回廊はここでやめる予定だったが、このまま終わるのはもったいないからと、TAを探して続けてもらうことにした。</p>
質問⑥	日本語回廊はどんな場所だと思いますか？ 意義は？
回答	自分の事務の能力、能力は事務方と、言語の方面。能力の強化、それから時間のやりとりがうまくできるようになった。自分を成長させる場所。言語は、TAと話し合うことで、日本語が延びる。事務の方は、よくあちこちいろんなことをやっていたから、慣れた。コミュニケーションが上手になった。どうやって、TAに、学生に言いたいことを伝えるか、よく考えて、練習していたから。

対象者:東海大学日本語言文化学系教員(日本語回廊の発足者)	
インタビュー日時:	
インタビュー内容:日本語回廊の発足について	
質問①	日本語回廊は2012年10月からスタートしましたが、どの部署からの依頼で始めることになりましたか。経緯を教えてください。
回答	教務科教務町 国際化＝英語になっているのは、おかしい、それで日本語もあるべきだ。もともと、英語回廊はあった。それで作りましようとなった。学校内の他の部署が学科も巻き込まれるような日本語教育があったらいいなということで、OKした。K先生とT先生と一緒にやりましようということで、学科会議にかけた。参加してもいいという風になった。日本語教育に興味がある先生が関わってもいいということで、始まった。1年目は他の先生が順番で入っていった。最初の教務町の案は食べ物やTAのお金を出したり、したが、2年目からは予算が出ないから辞めようとなったが、やっぱり出てくるってなって、毎回少しづつ変わっていくので、いい加減過ぎて、3年目からはやらなくなった。K先生が引き続きやっていった。英語学科は、大学のサービス点数として加算されるが、日本語学科のサービス点数は十分に足りている。
質問②	日本語回廊が始動にあたって、どのくらい前から「日本語回廊」を始めるといった話がありましたか。
回答	9月くらいだった。聞いて即行動っていう感じ始めた。聞いて次の週から会議を行って開始。
質問③	日本語回廊を始める際に、どのような枠組みで開始しましたか。
回答	名前も先生が適当に考えて、場所は教務町の以降では、開放的な場所ということで、H大、昼くらいで1時間というのもあって。自由に会話ができる環境にしたかった。そこに入ったら日本語で話す。そこで、実践する中で、コミュニケーションをしていく。大事なものは、言いたいという気持ちの人を集めて、どういう言うか各自工夫しなきゃいけないから、そこでは創造的なインターアクションができるんじゃないかなと。
質問④	英語回廊では、教員が授業をするといった形式で行っていますが、日本語回廊ははじめから大学院生にTAとして活動を行うようにしましたが、その意図はどういったことであつたのでしょうか。
回答	教師じゃなくて、院生に限るわけではなく、日本人で割と責任感があつて行動できる人ということで考えたら、院生の4人がいたから。行動を起こせそうだから。大事なものは、東海大学にいる

質問⑤	日本人をそこにおいて、生の日本人と喋りたい人が入ってくる。若者の日本人ってというのが大事。若物の文化の接触が特色として大切。コミュニケーションの意欲をそそる構造。
回答	第一期の回廊は、先生がテーマを決めていましたが、そのテーマは先生が決めていましたか。わたしが決めていた。学生が何で日本語を勉強するのかって聞いたら、旅行が第一だったので、旅行で必要な知識やインフォメーションが得られたらいいのかなって、また、ドラマやアイドルが好きだったりするので、興味関心のありそうなものを設定していた。何を話題にするのか。台湾の若者の日本に対する知識を前提にしていた。
質問⑥	日本語学科で日本語回廊という活動はどのように捉えられているのでしょうか？
回答	多くの先生は関係ないような感じ。私は実際行動していたのが日本語学科の学生だったので、学生達のプロジェクト能力を養成する形として捉えている。多様な活動から小さな活動があって、学校の支援があって、ある程度モデルがあって、割と自活できるようなプロジェクトです。神戸ツアーの場合は、お金がなかったり、先生が中心にやらなきゃいけない。甲南キャンプは先生の方で、厳しくシラバスを管理する。それぞれ学校側の経済的サポートも変わってくる。日語回廊は学校側のある程度のサポートを利用しつつ、学生のプロジェクトと能力を養成しているのではないのかなと。実際に行動を起こす時にどのようにお客さんを呼ぶのかっていうのは、実践なので、この実践を行うためにどのような資料があるのが、経費の中でどのように活動を作っていくのか。いろいろなタイプの活動で、様々な資源の運用ができるっていうことを学生に知って欲しい。

対象者:交通大学言語教育センターの日本語教師	
インタビュー日時:2016年10月4日	
インタビュー内容:東海大学における日本語学習支援について	
質問①	活動はいつ頃始まりましたか？
回答	2008年、教育部から予算が出て、日本語テーブルが始まった。
質問②	どのような理念で活動を始めましたか？
回答	言語教育、第二外国語を管轄している。まず、英語学科がテーブルを始めた。理念や目的はそこに由来する。中級以上の学生が、目標を持って学習できるように。 大学のどの部署主催で関わっている人は？
質問③	言語教育センターが主催、語原センターの管轄する図書館のエリアを使っている。大学院生、博士課程の学生が担当になり、活動の時間に常駐している。活動のテーマは、有る程度先生が決めるが、担当の学生(スタディグループのメンバーで決める)が毎回何をするか決める。担当者は毎回一人。毎回、参加者は5~6人。
回答	どのような流れで活動を行っていますか？ 火曜日、水曜日12時20分-13時10分、場所は英語情報室。毎回テーマで討論する。2016/10/04のお昼は、朗読コンテストの原稿の練習。その他、自己の学習経験などを共有し、日本語学習上での問題点などを相談している。スタッフと学生との関係は、教師-学生という関係ではなく、相談に乗ってくれる先輩という位置づけで、学生はテーマに関する討論や、自分の学習について相談を行っている。
質問④	
回答	

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々のご指導とご協力をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

インタビューなどの調査に快く協力してくださった日本語回廊のメンバーに、深く感謝申し上げます。みなさんのお陰で本研究を完成させることができました。

お忙しいにも関わらず、インタビューにご協力してくださいました交通大学の上條先生、東海大学の黄先生、本当にありがとうございます。

終始丁寧かつ熱意あるご指導及び激励をいただきました指導教官である工藤節子先生に、心より感謝しております。研究に対する態度や考え方、研究方法に至るまで時には厳しく叱っていただき、時には側で優しく見守っていただきました。

そして、論文の審査をしていただきました東海大学の張瑜珊先生、銘傳大学の羅曉勤先生、たくさんのご指摘やご意見、暖かいお言葉をいただき、今後の研究の参考にすることができました。また、いつも暖かく支えていただき、本当に感謝致します。

最後に、この4年間、研究の対して理解を示し、いつも応援し支えてくれた妻に深く感謝の意を表します。